801
H64
801-Sh64ウ
1200500753090

始

29. 9.30

[M]
K 0 1
9

陸軍教科書
23858
陸軍士官學校
圖書館

801
SH64

京都帝國大學教授
文學博士 新村 出 著

語學概說

(續國文學講座)

文獻書院內
國文學講座刊行會

言語學概說

目次

序論　言語、言語學、その方法と問題……一
第一章　發音……二
第一節　發音器官とその作用……三
第二節　音韻とその分類……八
第三節　音韻聯合……一四
同化作用……一七
音頭の長短……二四
音節……二四
アクセント……二四
第二章　言語の內的構成……二五
第一節　內的言語……二五
第二節　諸言語の構造（その一）……二五
第三節　諸言語の構造（その二）……二五
第四節　諸言語の構造（その三）……二五
第五節　文法の現象……二六

國立圖書館
昭 24. 3. 5 和
寄贈

數の理象……九六
文法的性の現象……一一三
第六節　語彙の問題……一二九
第三章　世界の言語とその系統……一四六
序……一四六
第一節　言語の系統的分類の原理……一五一
第二節　印度歐羅巴語族……一六八
第三節　印度語族の諸派……一七五
共通印歐原語分出原地の問題……二一六
第四節　ハム・セム語族　ウラル語族　アルタイ語族……二三〇
第五節　ドラヴィダ語族　印度支那(支那西藏)語族　南亞細亞語族　南島語族……二五〇
第六節　阿弗利加の言語　亞米利加の言語……二六三
第七節　孤立の言語　古代の文明語……二六六
第四章　言語の變化……二七六
一、音韻の變化……二八九
二、文法の變化……二九〇
三、語彙の變化……二九一
第五章　言語學史……三〇二

言語學概論

講師　新村出述

序論　言語、言語學、その方法と問題

言語學の研究對象は、最も廣い意味の吾人の思想を發表乃至交換する手段として、人類の使用する「人間言語」である。自然の鳴き沈默の語や廢墟の攝く古代の言葉の如き、吾々の思考精神が無生無心のものに對して主觀的に附與する言語は、直接對象たる言語學の研究範圍に入らない。言語學は唯に文獻にあらはれ、或はあらはれた言語のみならず、現在、如實の現象として現實に使用せられつゝある言語、又、單に文章語標準語のみならず、所謂俗語方言の如きものをも重要なる對象として、何れに對しても夫れ〳〵の取扱を與へる。また單に文化の著しきものを發展せしめた國家或は民族の使用した所謂文明語のみならず、凡そ言語學の目的たる吾人の言語作用の闡明に關する限り、野蠻未開の種族の使用する言語も亦、同じくその重要なる對象である。言語學は人間言語を、そのあらゆる時空の開展に於いて考察する、極言すれば言語學は言語それ自身のための言語の認識である。

吾々が言語そのものを取つて考察するならば、はじめ單純な存在と思はれたこれにも、種々な要素の混入介在するのを發見する。言語は先づ外的表現の機關として音を利用する。音それ自身は生理的產物である。生理的條件の一定の組合せの上に立つ音を重要な構成分子とする言語には從つて生理的方面がある。これら生理的條件には、その狀態

に於いて、その作用に於いて、以前の世代より得て次の世代に傳ふべき遺傳的要素の一部が潜入する。即ち言語には生物學的要素も存在しなければならない。しかし言語が、意味的に或る一定性と統一を持つものである限り、言語の音は單なる他の普通の音に對して自ら區別がある。言語の音は運動感覺以上に言語意識の作用を受ける。即ち言語には心理的方面がある。また言語は單に一時的の存在ではなく、吾々の今日使用する言語は、已に父祖の使用したものであり、また子孫の使用すべきものである。言語には傳統がある、歴史的方面がある。假令、征服侵入等の突然的社會事件のために、言語の突然的な取替へを經驗したとしても、吾々はなほ征服者侵入者の言語の傳統を受けてゐるのである。傳統は單に一個人に依存するものではなくして、一定の社會的團體を豫想する。且つ言語も自我一個のものには非ずして、他我との共存の上に立つものである。言語には從つて社會的、乃至社會學的性質がある。

言語は事實上、人類とは不可離的に結合してゐる。未だ言語なき人種は存在せず、また現今に於ても發見された事はない。言語の存在と所有は、吾人に取つては、はじめから自明の理であつた。舊派の言語學者マクス・ミュラー Max Müllre（一八二三——一九〇〇）も已に云つてゐる如く、言語の學が最近に至るまで起らなかつたのは、言語が太陽の光線の如く、吾人とあまりに深く關係してゐるからであつた。人類と言語には人事的に本質的の關係がある。嘗て、言語の含む種々な方面の中、一方のみを特に重視して、言語を或は單に純心理的といひ、或は純歴史的と唱へ、または純社會的にのみ解釋せんとする傾向があつた。何れも一面である。言語は種々複雜な要素の綜合の上に立つ事は吾人の人間性の成立と同樣であり、而してこれと不可離の關係に立つてゐる。此の意味に於いて言語學を、伊太利の哲學者ヴイーコ G. B. Vico（一六六八——一七四四）に藉りて人事科學（シエンツエ・デルレ・コオゼウマアネ）の一つと稱する事が出來る。

しかし言語を未だ全く生理的生物學的にのみ解釋せんとしたものはなかつた。言語の音、即ちその生理的方面は、それのみを以てしては單なる物理的音響である、意味を持たない、思想の發表乃至交換の手段ではない。これが吾人の言語活動の重要なる一面となり得た事は、脚部の歩行作用に、手の把握作用に對するが如き本來自然的の過程ではない。神經系の中樞に關する諸症に於いては、所謂發音器官（舌、下顎の運動等）の諸作用の中、言語的作用が第一に失はれるのは、その作用が器官に對して、第二次的にして、本來自然的でない事を示す。また他の言語團體内に育つたものは、普通の場合に於いては、正常にその團體の新言語を習得發音するものである。吾々の發音作用は言語的環境に依つて種々に變化し得る。歩行、把握の時空を絶して常に同一の作用たるとは反對の現象である。即ち、音はそれ自體に於いて、自らを言語作用に決定し、且つ或る特定の言語に屬せしめる力はない。これを使役して言語に隷屬せしめるものは言語作用の中樞たる吾人の心的機構である。この意味より進んで、言語を姑く生理自然的作用から抽象してその精神性について見る時、言語學を精神科學の一つとする事も出來る。しかし音は事實上、言語としては缺くべからざる要素である。吾々はこれなくしては言語なるものを認識する事が出來ない。言語學の對象とする眞の意味の言語は、勿論かゝる抽象以前のより全般的な人事的存在或は作用である。而して人事科學は單なる精神科學よりは、この意味に於いても範圍が廣い。言語學はやはり、人事科學とするをより適當とするであらう。たゞ、この名稱が一般に審熟せられてゐないのが遺憾である。

言語の具體的研究には方法的に大體三つの方向がある。この三つは實際上は互に相連關し相錯綜してあらはれるのを常とする。

一、個々の言語乃至方言の研究。

二、個々の言語又は方言間の比較或は對照。

三、時間空間に關せず、一般に言語なるものゝ原理的研究。

しかし個々の言語を研究する時にも、その言語の姿を明確ならしめ、或はそれと關係する他の言語に對する位置、親近の程度を豫め知つて、研究に正鵠を得しめるために、第二の方法も必要であり、その言語の原理的方面に觸れる時は、問題は必然的に第三の部門に入る。また第二の個々の言語の比較對照をなす場合にも、比較對照せらるべき相互の言語の性質歴史を調査する事が必要である。特に、比較（言語學に於いては、同一の祖語を有すると認められる言語と言語との相關的研究を比較といひ、全く無關係な、云はゞ他人同士の場合にはこれを對照と稱する）に於いては當該言語の現在の姿のみでは不充分である。その言語自身に於いて豫め内部的に、その歴史的發展の姿を明らかにして置かなければならない。今日の英語と獨逸語をそのまゝ比較するならば、音韻に於いて、語形に於いて、措辭法に於いて、語彙に於いて、甚だしい不一致を示すであらう。しかし英語を歴史的に遡つて古代英語即ちアングロサクソン語に遡り、同樣に獨逸語をも次第に古代原初の姿へと遡てゆくならば、二つの言語は特に語形措辭に於いて著しい近似を示すに至る。今日全く失はれてゐる英語の語尾變化も次第に現はれて、英語もまた今の獨逸語の示す以上の複雜な文法的語形を有したものであつた事が判明する。而して英語と獨逸語は、かくして一旦西部ゲルマン語に統一せられ、更に、他のゲルマン諸語との同樣な比較によつて、遂に原ゲルマン語に統一せられる。原ゲルマン語は事實上今日に殘つてゐない言語である。たゞ、同一の祖語に屬する諸方言の比較によつて再構せられるのにすぎない。故に祖語の再構は比較言語學の業績の集積であり、エッセンスであると稱する事も出來る。但し今日文献に殘るゲルマン諸語の中、紀元三五〇年の頃に由來するウルフイラス Wulfilas の飜譯した聖書に殘るゴオト語が最も原ゲルマン語に近いが故に、普通ゴオト語を以て原ゲルマン語を代表せしめる。

かくの如くして言語の比較に於いては個々の言語の歴史的研究が先決問題である。外に臨む前に先づ内を整理しなければならない。日本語の比較研究に於いても、從來外部との接觸のみを急いで、日本語に存在する語が先づ日本語の内部に於いて歴史的に何處まで解釋し得るかを等閑に附し勝ちであつた。國語に於ける現在の姿を歴史的に分析究明して、後、これを他の言語から同樣にして得られた原本的要素と比較して、こゝに比較言語學が成立する。幸にして、かゝる研究の結果に於いても、最近日本語が北亞細亞大陸に行はれるウラル・アルタイ語族（朝鮮、滿洲、蒙古フインランド等の諸語を含む一語族）との系譜的關係（Genealogical affinity）を有する事が次第に闡明されて來るのを認める。かゝる比較の結果を文典の形にまとめたものを比較文典 Comparative Grammar といふ。例へば、英獨語比較文典、ゲルマン（諸）語比較文典。しかしウラルアルタイ語族、日本語と大陸語との關係は、未だ業績を文典の形になし得るまでには精緻に比較が進んでゐない。

ゆゑに比較言語學は必ず、歴史言語學を豫想する。歴史言語學なくして比較言語學は成立し得ない。しかし或程度まで比較が完成した曉は、逆にこれに依つて未だ不明なる個々の言語の歴史的部分を闡明し得るのは勿論である。

かくの如く比較言語學が歴史言語學を必要とするのは言語が變化するものなるが故である。即ち言語はその音韻に於いて變化するのみならず、内容部意味に於いても變化し、措辭法、語彙に於いても著しい改變がある。この變化改

變は同一の言語團體内に於いても、部分に依つて、その方向種類速度を同じくしない。故に最初同一の言語も一定の時間の流れの後には、種々な方面に於いて分裂を來してゐるのが見出される。これには最初の言語團體の移住膨脹もこれに與つて大いに力のあるのが普通である。方言の發生はかくして行はれる。こゝに注意すべきは方言といひ言語乃至國語と云ふも單に程度の差異であつて、質的の相違ではない事である。方言が更に夫れ〳〵の方向に分化して最早相互に理解するを得なくなつた時、吾々は普通にこれを別の言語乃至國語と稱する。しかし方言團體が文化的、政治的、或は社會的に、尙相互に緊密な關係を持續する時は、何らかの點に於いて優越する一團體の方言が、廣く行はれてこゝに言語の統一作用を起す。即ち標準語である（Umgangssprache, standard language）。標準語は決して、近代文化社會のみの特殊現象ではない。古代に於いてこの勢力の最も著しかつたのは希臘であらう。文藝政治の中心たるアテネの地に行はれる言語は廣く全希臘の詩人論客の使用した所であつた。今日未開の社會に於いても亦かゝる現象を認める事が出來る。有史以前に於いてもかゝる過程は常に行はれたに相違ない。言語の分化と統一は言語史History of Languageをして今日非常に複雜困難ならしめた最も大なる要因の一つである。かゝる變化と分布の經過を跡づけ、系譜的關係を辿つて言語の分類を試みるのも比較言語學の重要なる任務であり効用である。

これに對して言語相互間にかゝる連絡關係を豫想せずして、從つてかゝる煩瑣な手續を踐む事なくして、單に對照せしめるだけの場合がある。事物の對照は吾人の精神作用の自然的な理解作用である。これによつて、或言語の性質の特殊的なる所一般的なる所を明らかにし、それに對する態度を決定する事が出來る。曾て本居宣長が漢字三音考に於いて、支那語音と日本語音を對比して、和を擧げ、大いに支那の音（特に唐音）を卑めたのも單なる對照の結果である。近世に於いてかゝる對照法を言語學的に試み、非常に興味ある結果を擧げたものに丁抹のイエスペルセン Otto Iespetsen（一八六〇）がある。彼は今日の英語が殆ど全く語形的變化を失つて、同一の單語が文章に於ける措辭的關係に依つて、或は主語となり、客語となり、補語となり、或は動詞となり、名詞となり、時に形容詞副詞として用ゐられる點を、支那語の語順一定し單に此語順によつて品詞が決定せられる事實に對照せしめて、支那語も曾て音的には古代の英語の如く、語尾の變化を有し、語尾に依つてその語の文法的意味と作用を表はしたものであるが、今日何れも前置詞の發達と語順の一定と共に、かゝる煩雜な手續を失ふに至つたのは、却つて言語に於ける進歩である、特に英語に於いては、ane-s reabe-s manne-s の一聯の單語の何れにも一つ一つSを繰り返さなければならなかつた古代英語に對して、今日單に一個のSを以て a red man's といふのみにして、同じ意味を簡單且つ明瞭に表現し得られ一方綜合的な拉丁語の cantaveram（私は歌つた）に對して近代英語が分析的に I had sung といふ時はアクセントを had に置くか sung に置くかに依つて、拉丁語にはあらはし得ない意味の柔軟さが得られるのは、言語が不規則より規則的に、綜合より分析に、剛直より柔軟へと進歩の道を辿つてゐるものであるといふ。

言語は進歩しつゝあるか、退歩しつゝあるかは見る人に依つて見を異にするであらう。何れにしてもかゝる問題は單なる對照をはなれて、已に言語の一般原理的研究に入つてゐる。全く無關係な二つの言語の對比の中に或一定の共通性をも發見せんとする對照法は、比較の場合以上に、人間言語を全體として見た一般原理の指摘に向ふ事が多い。即ち言語を支配する一般法則と特殊法則の關係、言語そのものゝ根本基礎、言語の發生の問題、起原の問題（一元多元の如き）。或はその他抽象性に於ける言語を取つて、言語と吾人の心的作用との關係、人間性との關係、本能との

關係、また人間以外、或種の動物に存在すると推測せられる言語の本質等の如きも亦、言語研究の一般原理的方面の取扱はんとする所である。しかしかゝる場合はその關する所、單なる言語の上に出で、主觀的判斷の這入り込み得る餘地が多い。問題は寧ろ哲學的であるが、科學以前に於ける如き惡い意味の形而上學的問題に墮してはならない。

以上三つの方法の中、言語學なる科學の成立に最も寄與し、その最も有力な武器内であるものは、第二の比較方法であり、又あつたのである。或意味に於いては學としての言語學の成立は、一に比較言語學に依る。故に今日にあつても、比較言語學は、言語學一般そのものと混同せられる程であるが、前者は飽くまでも後者の一部であつて、決して全部ではない。

また吾々は比較と對照と區別して來たが、これは現今地球上に曾て話され、現に話されつゝある言語に、系譜的に關係あるものと全く無關係なものとの二種を認めるからである。伊太利のトロンベッティ Alfredo Trombetti の唱へる如く、世界の言語はすべて一元に出づとするならば、對照は卽ち比較となり、世界の言語は一括して彼の所謂「一般比較言語學」(Allgemeine vergleichende Sptacuwissenschcit; Glottologia compatativa generale) なる項目の下に研究され得るであらう。しかし彼の云ふ所は未だ眞否も判然しない、尙早である。

言語學の普遍に對象とする「自然語」に對してまた人工になる所の所謂國際語、世界語なるものがある。言語團體を異にする人々の間の交通を容易ならしめんが爲に、單に實用上の目的より編成されたものであるが、これを學的に見る時、曾て自然に成り得るとのみ考へられた言語構成に對する人工の侵入として注意すべき現象であらう。近世かゝる事情の下に世に出された人工語は數十百にも上つてゐる。しかしその多くは單なる常識的判斷の上に立つ實用的所産であつて、言語學の一般原理がこれに應用されたのは、エスペラント以後のイド Ido ノヴィアル Novial、その他最近また新たに出たと聞くものゝみである。曾て比較言語學の業績のエッセンスが具體的に原語の再構に示現せられた如く、吾々の第一第二の方法及びその他の研究より抽出せられた言語學の一般原理は、人工語に於いてそのエッセンスを具體化するものであると稱する事が出來る。從つて、言語學の理論が完全性を增加するに從つて、人工語も亦常に改變されてゆくのは當然であらう。人工語は用に於ては實用であり、質においては言語學の一般理論のバロメーターである。イエスペルセンが再三再四この事業に掌はつて、常に新しき國際語を唱導しつゝあるのは、この間の事情を示すものではあるまいか。曾て人工語は自然語にあらざるの故を以て、言語學者の顧みざる所であつた。自然語ならざるに於いては、かの再構せられた原語も同一である。言語學の究竟的理想が言語の一般原理の究明にあるとすれば、この研究の進度を示す人工語は當然吾々の興味を惹かねばならない。又言語學は單に古代の死語を扱ふのみならず、却て目前現實の言語現象にも重要なる關心を有するとすれば、比較言語學に於ける死語以前原語の再構のみならず、現在より未來にわたる人工語に對しても、吾々は同樣以上の注意を拂はなければならないであらう。

言語學は言語をそれ自體のために觀察する。この意味に於いての言語學は、文獻に殘る言語を通じて一國民或は一民族の古代の文化を研究せんとする文獻學とは異る。文獻學は文獻、即ち廣義に於ける文學を持つた言語を扱ふのみであるに反し、言語學は文學や文字すら有しない民族語の研究も亦大いに重要とする所である。しかし文獻學も言語を唯一不可缺の手段として、これを重視するのは、言語學に於けると同樣である。英國にあつては普遍言語學と文獻

學は同じくフイロロヂー Philology の一語を以て表はされる。Philology は語原的には希臘の philo-logia に遡る。logia は「言語」であり。philo- は「愛する、希める」「欣求する」の意であり、全體は「言葉を愛し求め、探求する」の謂である。哲學が philo-sophia、即ち智慧を欣求する事であるのと同樣である。

しかし歐羅巴大陸に於いては、このフイロロヂーにあたる語は主として文献學の意味に用ゐて、言語學には別の名稱を與へる。即ち佛蘭西では文献學のフイロロジ philologie に對して、言語學はランギスティツク linguistique と稱せられ、獨逸ではフイロロギー Philologie は嚴重に前者に限られ後者は言語(の)科學(シュプラーハヴィッセンシャフト) Sprachwissenschaft と稱し、二つの區別が最も嚴格である。英語に於いても、言語學なる事を明確にあらはすためには、獨逸と同じやうに言語の科學 science of language と稱するのが普通であるが、最近次第に一層簡明なリングキスティツクス linguistics なる名稱が用ゐられて來た。もと linguistics, linguist と云へば能く多くの言語を驅使し得る事、及驅使し得る人、即ち博言と博言家のことを意味したのであつたが、最近この意味には次第に ractical なる形容詞を冠する樣になつてから、linguistics は專ら言語學、linguistは從つて言語學者の意味に用ゐられて來たのである。佛蘭西に於いても英語と同じ樣に、「言語の科學」science du langage なる名稱もあるが、今は殆どランギスティツクの下に壓せられてゐる。露西亞に於いても同樣である。が、こゝでは外來語のリンギスティカの外に純粹の露西亞語を綴り合はせた言語(イズイカ)學(ヴィエディニエ) jazykovedene がある。リングキスティツクス、ランギスティツク、これらは何れも拉典語の舌 legua に發する名稱であるが、伊太利では同じ意味の希臘語 (glotta) に語源するグロツトロヂーア Gottologia を言語學の名稱に用ゐる。吾國に於いては、言語學がはじめ博言學と呼ばれてゐたのは、英語のリングキスティツクスの意味が變化して學問上の名稱となつた經過を思ひ起さしめるものがある。言語の本質を闡明せんとする言語學は或程度の博言を豫想しなければならないが、博言そのものは技術であつて學問ではない。

最後に一言しなければならないのは、言語的統一を有する言語團體は必ずしも人種的統一を意味しない事である。否、却つてかゝる例は稀有に屬する。日本語を使用する一の言語團體の成員は、たとへ日本民族は構成しても、決して日本人種なるものを構成しない。文化的統一たる民族と血族的統一たる人種は別物である。言語の統一は人種よりもむしろ政治的文化的の統一に依存する。しかしこれも必ずしも絶對的ではない。瑞西の如き芬蘭の如き、有力な政治的國家的統一を有しながら二個以上の言語の通用を認め、言語的には他の國、他の民族におけるが如き統一を有しない場合もある。かゝる場合は國語なる觀念は、法規上の規定は別として、實際上甚だ不明瞭である。元來、「國語」なる概念には、言語學的要素と社會的(政治的)要素の二つが含まれる。二つの要素が範圍と性質に於いて一致する場合には、國語の觀念は最も明瞭である。日本語の如きは比較的この完全性に近い。しかしかゝる一致は常に要求し得られないのみならず、一致の程度もまた極めて不安定であり、從つて國語なる概念は常に一定した姿を有しない。言語學は、獨立に言語學的要素とその方面から研究を進めてゆく。從つてこゝに言ふ言語は、特別なる場合を除き言語學的以外の要素を除外した場合である。

第一章　發　音

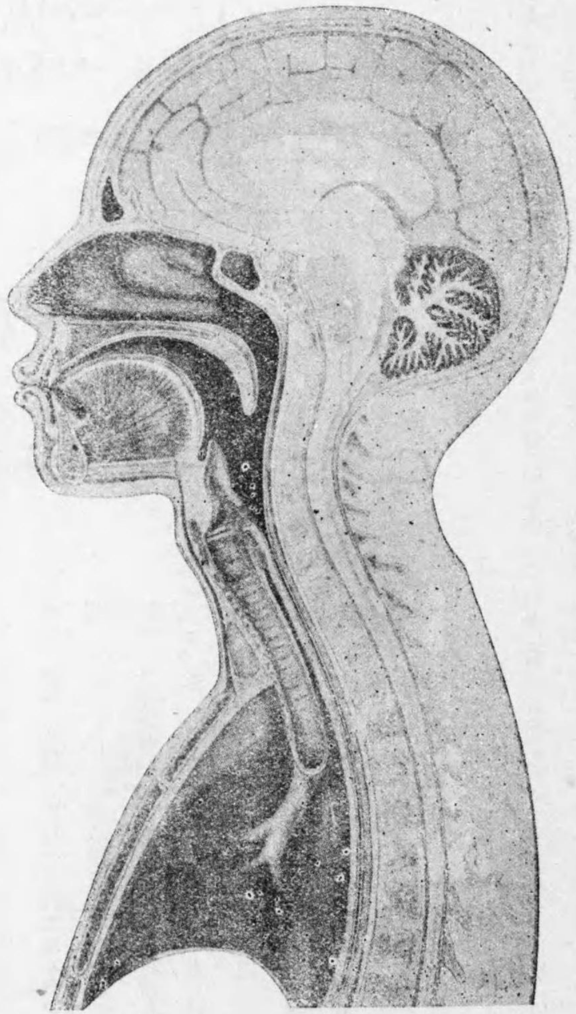
言語に於いて先づ吾々の意識に上るものは、その外的要素、即ち音韻である。言語が言語としての具體的存在を主

張し得るのは一にこれによる。聲音を發出調制する作用を發音 Phonation といひ、これに關與する生理的器官を特に發音器官といふ。發音作用はこれら生理的器官の第二次的機能である。かくして發音せられた音韻を科學的に取扱ふ一科の學が發音學 Phonetics である。言語學が重要なる支持をこゝに仰がなければならないのは勿論である。

第一節　發音器官とその作用

音を發出するには三つの要因が必要とせられる。第一、肺臓より壓出されて外界に迸れ出づる氣流。これは發音の第一條件である。言語によつては亞弗利加の或土語の如き、吸氣による發音を有するものもあるが、最も特異な現象として今の場合、姑くこれを除外する。第二、この氣流が途中に遭遇し、音韻構成の主因となる喉頭の障碍作用。第三、かくして出で來つた氣流或は音韻に種々の反響を與へ、夫れ〳〵の特有の音色を與へる反響作用。第一に關する器官は、空氣を呼出する肺臓、これを狹窄する胸廓筋と横隔膜、及び氣管、第二に關與するものは、氣管の上部に位する喉頭、特にそこに存在する聲帶、第三の作用に關するものは咽部、鼻腔、口腔、及び舌、顎(特に下の)、唇、齒及び口盍を含む音管 (Resonauce Chamber) である。これらを總括して發音器官と稱する。(第一圖參照)

肺臓から壓出された空氣は氣管を經て、その上方に漏斗狀をなして位置する喉頭 (larynx) に入る。俗に所謂喉沸であり、西洋で一般にアダムの林檎 (adam's apple) と稱するものはこれである。喉頭は軟骨より成り、解剖學的に見れば、全く氣管と構成を同じくし、その單なる膨脹にすぎない。下部に環狀の軟骨が水平に横はり、後方の一部が突起して全體宛も寶石の座を有する指環に似てゐる。これを環狀軟骨 (cricoid cartilage) と稱する。その上方前面を屏風なりに一枚の軟骨がこれを掩ひ、先端が前方に突出して、外部からもその突起を認める事が出來る。これを甲

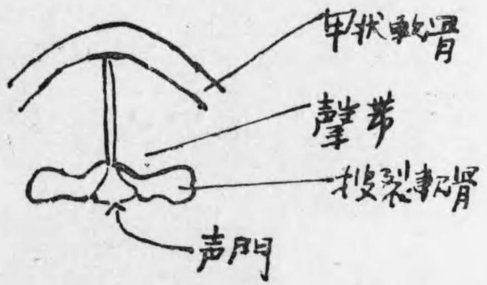


第一圖　發音器官

狀軟骨 (Thyroid cartilage) といふ。環狀軟骨の突起の兩肩より甲狀軟骨の突出部の內面に向つて二枚の彈性ある粘膜質が水平に張られる。所謂聲帶 (Vocal cords) である。(聲帶は名の示す如き帶或はコードではなくして喉頭の內部に張る二枚の膜質である)。吾々が普通に呼吸する時、物を吹く時、この聲門は大きく開いて呼氣の流通に何等の

障害を及ぼさない。聲帶の間に出來る間隙を聲門（Glottis）といふ。二條の聲帶は環狀軟骨の兩肩に於いてはそれぞれ一個の小なる披裂（又は字義的に水盤）軟骨（arytenaid cathlage）に繫がれる。聲門の開閉は主としてこの軟骨の司る所であり、聲帶の緊張弛緩は甲狀軟骨の前進と後退に依る。氣器より喉頭に入つた呼氣は、聲門が緊張し狹窄せられてゐる時、こゝを通過せんとして聲帶の緣邊に振動を起す（第三圖）。言語の音韻的方面に重要なる位置を占める「こゑ」（Voice）はこれである。もし聲門が大きく開かれてゐる場合は單なる氣息（breath）となり、固く閉ぢられてゐた聲門が一時に開かれる場合は爆音をなす、國語學に所謂促音、及び吾々が咳をする時がこれに當る。また聲門が全く閉ぢられ、單に後端の披裂軟骨のみが、第四圖の如く開かれてゐる事がある（軟骨門）。私語する場合の聲帶の位置はこれであり、氣流は軟骨の間を通つてこゝに摩擦を起し、鋭い囁きをなす。故に囁きは全く「こゑ」を伴はない。「こゑ」の最も明瞭にあらはれる音韻は「ア、イ、ウ、エ、オ」等の母音であるが、しかし「こゑ」

第二圖　喉頭左側面圖

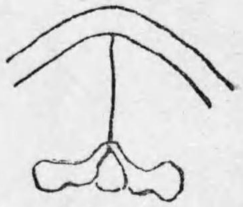


第三圖　振動中の聲帶の位置

は單に母音のみには限らず、子音に於ても亦明瞭にあらはれる。兩耳を塞ぎつつfを發音し次いでvの音を發音する時は後者に聲帶の振動が伴ふのを知る事が出來る。かゝる子音が濁音（sonant, voiced sound）であり、これに對してfの如きを普通に清音（Voiceless sound）といふ。嚴密に云へば有聲音無聲音とするを一層妥當とするであらう。

聲門において起された「こゑ」は單なる一の純音であつて、未だ何の音韻をなすかゞ定つてゐない。これが母音として「ア」となり「イ」となるのは、喉頭の上部に位する第三種の器官の修飾である。口腔（oral cavity）が廣く開かれて上下顎の間に出來る顎間角（angle of jaws）が最も大なる時はアの音をなし、最も狹い時は「イ」の音をなす。獨り口腔のみがかゝる音色の修飾に關與するのみではない、その他舌の位置の上下、唇の形の開閉なども重要な要因である。「こゑ」が子音に伴つて起る場合、即ち有聲子音を單獨に發音する場合に於いては、この「こゑ」が未だ純音の域を脫しない事が明瞭にあらはれる。有聲子音に於ける純音が一定の修飾を經た時は、その子音は最早單なる子音ではなくして、已に一個獨立の音節 syllable である。例へば〔b〕に含まれる純音を〔a, i, u, e, o〕の方向に修飾する時は、〔b〕は〔ba, bi, bu,……〕等の音節となる。

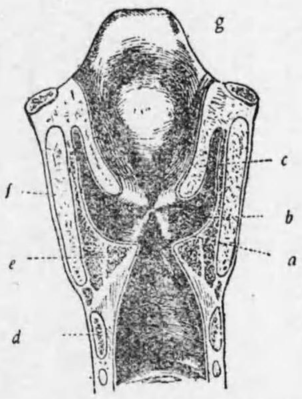
また聲門が大きく開かれて、何等の障害を蒙る事なく喉頭を通過した呼氣も、同樣に第三種の器官によつて修飾せられるのが普通である。しかしこの場合、その修飾或は障害によつて作成せられた音は、聲帶運動の週期的な調音なるに反して、非週期的な噪音（noise）である。多くの無聲子音はかくの如くして構成せられる。もしこれに喉頭に於ける聲帶の運動が加はるならば、直ちにさきの有聲子音となるのは勿論である。しかし、有聲の場合には、呼氣は聲



第四圖　囁き

門と音管の二重の障害を通過するが故に、口腔外に放出される氣流は一重の障害のみより有しない無聲音に比して、非常に薄弱であり、從つて音韻として耳に弱い印象を與へる。古典言語學者が無聲子音に對して強音（fortes）なる名稱を與へたのはこの爲である。

喉頭中にはまた直接何等の發音作用に關係するものを有しないが、聲帶の直ぐ上部にモルガーニ氏竇を隔てゝ所謂擬聲帶（false vocal cords; ligamenta ventriculatia「竇聲帶」なるものがある。作用としては單に眞聲帶を濕潤に保つと思はれる外、今日發音的には全く不用に歸してゐるが、曾て吾々の祖先が所有した第二喉頭の痕跡であらうと云ふ。（第五圖、a聲帶、bモルガーニ氏竇、c擬聲帶、d環狀、f甲狀軟骨、e聲帶筋、g會厭軟骨）。



第五圖

喉頭を出でた氣流は會厭軟骨（epiglottis）を經て音管に入る。會厭軟骨は舌根の後方、喉頭の直上に位し、必要に應じて喉頭の上面に下垂して、その掩蓋の用をなして空氣以外のものゝ氣管への侵入を防ぐ。吾々が〔o, e〕の音を發する時、舌の後退すると共に會厭軟骨も後方に倒れて、喉頭より出づる氣流の流出に或種の障害を及ぼす。これらの音が幾分暗い色彩を持つ印象を與へるのはこの爲である。〔e, i〕の發音に際しては殆ど直立し、呼氣の流出は極めて自由である。これらの音が前の音に比して明亮な響きを持つのはこれに依る。

この音管の最初の部分、咽頭（pharynx）をすぎて、氣流の通路は二つに分れる。上方に向ふものは鼻腔（nasal Cavity）となり、末端は鼻孔に終り、下方の通路は即ち口腔（oral cavity）となり唇に終る。鼻孔と口腔の間には口蓋（palate）が水平に位置して二つを隔つ。口蓋は前部に於いては骨質の硬くして剛直な部分よりなり、後方は筋肉質の軟かき部分より成る。前部を硬口蓋（hard palate）といひ、後者を軟口蓋（soft palate）と稱する。軟口蓋の先端、即ち口蓋の後端は、笛の辨の如き、極めて柔軟な粘膜質の細小な下垂せる一端に終つてゐる。即ち懸壅垂〔uvula〕である。軟口蓋が上昇して懸壅垂が後方に撥ね上げられ、鼻腔への通路を塞ぐ時、氣流はすべて口腔に送られて、こゝに修飾若しくは妨害を受ける。普通音韻は多くかくして構成せられるが、通路の閉塞が或る事情のため不充分な場合は、呼氣の幾分は鼻腔に送られ、こゝに反響を得て鼻音（nasals）の傾向を伴つた音韻が發音せられる。鼻聲で話す（snuffle 獨逸語 näseln）と稱するのはこれである。通路が本來的に開放されてあるべき音韻は、呼氣の大部若しくは全部が鼻腔を通過してこゝに修飾若しくは障害を受ける。m, n, ng〔ŋ〕ñ〔ɲ〕などの音韻はこの鼻音である。懸壅垂はまたそれ自身舌根部を撲ちつゝ、流氣に推されて激しく振動する事がある。日本語にはないが、現代獨逸語、佛蘭西語（特に都會又は上流流會）のrの音はこれである〔R〕。しかも聲帶の振動を伴はない場合も少なくない〔χ〕。口蓋の前端は齒槽（alveor）である。舌の先端をこゝにあてゝ〔t, d, n〕等の所謂舌音（dentals）が得られる。但し日本語のnは母音の後に來る場合、この舌音ではなくして當該音が鼻腔に入つて反響を得るさきの所謂母音の鼻音化（nasalization of vowels）である。

口蓋、特にその前部は硬直で自ら運動せず、その發音作用に關與し得るは一に運動自在な舌との共同作用に俟つ。發音器官の中、口腔は最も外部的であり、發音作用として最も吾人の注意を惹き易く、吾國近古に於いても「南蠻口」

などの如く「口」が言語の意味に用ゐられた事もある程であるが、この口腔の中にあつても、舌が最も重要な作用をなし、從つてまた最も注意せられ、今日佛蘭西語、西班牙語伊太利語等で言語を意味する語は主として語原的には「舌」の意味であつて、已に拉丁語においても lingua（舌）は早くから言語の意味に用ゐられてゐた。舌は發音的に口蓋に對應して凡そ三つの部分に分けて考へられる、舌端（blade）、舌面（dorsum）舌根（root）。舌面を再び前舌面（front）と後舌面（back）に分つ。舌端の尖端を更に舌尖（rim, point）とする事もあるが、發音作用に重要なのは舌端と二つの舌面であり、舌根は咽頭の後壁に近接して亞剌比亞語の〔q〕音を摩擦によつて發生せしめる外、一般に吾々に親しい言語には直接的に使用される事の少ない部分である。

發音器官の最も外部に位置するものとして齒、唇、及び頰がある。即ち直接間接に發音に掌はる器官は、最も內部の横隔膜より、最も外部の唇及び下顎（上顎は不動である）に至るまで大小その數に於いて少からざるものがある。而もこれらの器官は一個單獨に働く場合は稀であつて、或は聲帶と、鼻腔と、或は更に鼻腔と口腔とが聯合して働くのみならず、口腔の如きは更に複雜な器官を擁して無數の修飾障害作用を惹き起す事が出來る。發音作用は決して單純なる過程ではない。一定の音韻をなす爲の一定の障害作用が發音調節 Articulation である。

第二節　音韻とその分類

母音と子音。口腔はその開閉の程度に從つて、即ち所謂顎間角（angle of jaws）の大小に依つて、一、廣く開放せられてこゝを通過する氣流に何ら障害を及ぼすに至らない場合、二、更に著しく狹窄せられ或は、三、全く閉鎖せられて、通過せんとする呼氣の障害となつて、こゝに摩擦を起し、或は一時その流通を杜絶せしめて突然の開放と共に一時に迸出せしめる場合（破裂音）がある。普通こゑを得て口腔に入つた呼氣が、第一の場合の如く、直接の障害なく流出して構成する音が母音（vowel）であり。これに反し第二、第三の場合の如く、口腔內の妨害の下に著しい變形を蒙らざるを得なかつた氣流の迸出に依つて成された噪音が子音（consonant）である。即ち、母音にあつては、已に聲帶の振動に依つて構成せられた純音が、一定の母音となるために、口腔に於いて單に修飾を受けるに止まるが、子音にあつては、口腔の障害がその構成の原因である。子音にも亦聲帶の振動を伴ふものゝあるのは勿論である（有聲子音）。

即ち、母音と子音の區別は單に口腔の開きの大小に依るのみであつて、二つの間には從來信ぜられた如き本質的の對立はない。古典派の言語研究以來、子音を呼ぶに用ゐられる英語の Con-sonant 及び、その語原となつた拉丁語の con-sonans なる名稱（字義的には「共にあつて響くもの」の意）の示す如く、子音はそれ自身單獨には發音される事能はず、必ず母音と竝立しなければならないと誤つて考へられ、從つて母音と子音との間には本來發音的に、因果的の相違があると信ぜられたのであつた。今日に於いても、かゝる考が尙、各國の普通國語辭典等にあげられる定義に見出される事が少なくない。吾國に於いても、今日一般に慣用する母音子音なる名稱も、はじめてこれを譯語として創成せられた時には、少くともかくの如き因果の關係が念頭に置かれてあつたのであらう。中には、今の子音を父音と稱し父音と母音の結合に依つて子音が構成せられるとさへ主張したものもあつたが、こゝに所謂子音とは明らかに音節（スイラブル）の事であつて、單純なる個々の音韻ではなく、當時の音韻現象に對する無理解を物語つてゐる。

何れにしても母音と子音との間には、單に程度の相違があるのみである。〔k〕音と〔ng〕音とは、一見全く隔絕し

た別種の範疇に屬するが如くであるが、〔k〕に對應する〔g〕は、有聲たる事に依つて已に一歩母音の域に近付き、更に〔ŋ〕、或は〔ɲ〕は有聲たる事の外、持續的に發音し得られる事に依つて更に一層母音に近づく。母音に於いても〔i〕〔u〕の如きは〔a〕に比して口腔の開きが一層小であり、從つて次第に子音の範圍に近付く。子音に於いて最も母音に近いものは英語の y 音（これを〔j〕で表はす）及び w 等の音であり、母音に於いて最も子音に近いものは〔j, u〕の二つである。而して〔j〕が一歩進めば〔i〕となり、〔u〕の發音に際して口腔が一層狹窄せられて摩擦を起すに至れば〔w〕の子音である。逆も亦同じ。母音と子音は〔k, t, p〕の無聲破裂音と、口腔の開放最大なる〔a〕に於いて、最も大なる差を示すが、二つの間を繫ぐ段階は充分に具はつてゐる。二つは質的の差違を持たないが、吾々は、〔j, u〕〔i, w〕の間を境界として、これより次第に口腔の通路の擴大せられるものを母音とし、次第に狹窄閉鎖されるに至るものを子音とする事が出來るであらう。これを音韻分類の第一段とする。

第二段に入つて、この各について更に分類を進めなければならない。

子音の分類。 子音は右に考察した如く、呼氣の通路が一部的或は全部的に妨害せられて、妨害箇所との間に摩擦或は停止爆發を起す時に出される噪音である。子音の分類は先づ、この發音器官中の妨害の箇所、言ひ換へれば調節の箇所に依つて分類せられる。前節に於いて述べた如く、發音の器官は逆に外部より數へるならば、唇、齒、齒槽、舌、硬口蓋、軟口蓋、懸壅垂、までの口腔と、これに上部に位する鼻腔及び咽頭（こゝに會厭軟骨がある）を加へた所謂音管と、下つて喉頭の聲門、及び第三種として氣管、肺臓、これに附屬する筋肉膜質を擧げる事が出來る。この中　第三種の肺臓等は、發音の直接條件たる呼氣を作出するのみであり、聲門は普通、これを受けて或ものはそのまゝ通過せしめ、或場合はやゝ障害となつて「こゑ」を與へるのみで、音はこゝまでにあつては、種々の音韻の一樣な原質であつて、未だ何れの音とも不定であつた。これが特定の音韻としての色彩を得るのは音管特に口腔の作用に依る。從つて子音の場所的分類について、問題となるのも主としてこゝである。

㊀ 音はまづ兩唇の間に於いて構成せられる。〔p〕〔b〕〔m〕などはこれである。これを兩唇音を稱する（labials）

㊁ 上唇と下齒の接合によつて構成せられるもの、英語、佛蘭西語等の〔f〕〔v〕がある。齒と唇が構成に關與するに依つて、これを齒唇音（labio-dentals）といふ。日本語の f は決してこの範疇に屬する齒唇音ではなくして、却つて前項に屬する兩唇音である。上下の唇が平らかに接近して、呼氣の通路を扼して起す一種の摩擦音である。こゝに使用する音韻符號に於いてはキヤピタルの〔F〕を以て表はす。〔F〕は今日では波行音中、僅かに「フ」に見られるのみであるが、地方に彼つては「ハ」、「ヒ」等にもこの發音を殘してゐるものもあり、古く今の波行音が、原始の〔p〕音から變化して、八世紀の初頭乃至平安末期或は鎌倉上期にかけて一般に行はれた時はこの〔F〕音であつた。〔F〕が更に變化して今の〔h〕となり、或はカハ（河、川）に於けるが如く和行音となつたについては、後段改めて詳しく說く所があらう。〔F〕の〔v〕に對するが如く、〔F〕の有聲音は音聲學的に云つて〔β〕である。英語の〔w〕の發音の如く唇を圓める事なく、〔F〕の場合のまゝ常に平らである。平安朝時代、特に天曆後には假字遣ひ大いに亂れて波行と和行の混同が文字の上にあらはれ、ハシル――ワシル、ハツカ――ワヅカ等が竝行して存すると稱せられるのも單に文字上の混亂のみではなくして、無聲の〔F〕が有聲となり、本來の和行音と近くなつたが爲めに起因するものと見るべきであらう。從つてワシル、ワヅカのワは〔wa〕ではなくして〔βa〕であつたと見るべきである。

〔ʍ〕の唇を圓めて發音するならば、英語などの有する普通の〔w〕の音が得られる。日本語の和行の音は今日に於いても〔w〕よりも寧ろ〔ʍ〕である。西洋の〔w〕を發音するためには著しく唇を「つぼめて」發音する事を要する。日本語は一般に唇の運動が外國語に比して非常に緩慢である。兩唇、齒唇を一括して單に唇音（labiais）ともいふ。

(三) 舌端を齒或はその直上に位する齒齦にあてゝ發音するもの。〔t〕〔d〕〔n〕等がこれである。これを齒音（dentals）と云ふ。英語の Th〔θ〕の發音は舌端が齒の尖端にかゝるもの、その有聲音は〔ð〕を以てあらはす。〔s〕〔z〕及び英語の sh〔ʃ〕その有聲の〔ʒ〕（measure の s の如き）は、更に著しく後方に舌をあてゝ發音せられる。故に人に依つてはこの二つを齒より更に後方の口〇の部に入れ前部口蓋音（ptepolatals）とする。日本語の佐行音は〔s〕音と〔ʃ〕音との混成であるが、その〔ʃ〕は英語や佛蘭西語程後方ではない。同一の符號を以て寫されるが實際の上に纖細なニュアンスの働くのは當然である。〔t〕〔d〕に比して一見甚しく懸絶するが如くであるが、〔l〕〔r〕も亦齒音である。ダとラ、デとレが或場合混亂せられるのはこれによる。日本語の良行は普通に羅馬字を以て寫される如き純粹の〔r〕ではなくして、事實は〔l〕〔r〕の中間である。舌端を齒槽にあてゝ、呼氣に依つて激しく振動せしめる時は〔r〕であり、空氣にやゝ自由なる通路を與へて、振動なく發音する時は〔l〕となる。發音作用の緩慢な日本語はこの振動の程度が非常に少なく、寧ろ〔l〕に近いとも考へられる。但し日本語の良行者は〔l〕に比して少しく舌端の位置が後方である。近古吾國に來た布教師などが、日本語の良行を寫して或は r とし、或は l としたのも此の爲であらう。〔θ〕〔ð〕の如き齒端に於けるものを特に前部齒音（predentals）とし、その他のこれよりも後方齒槽に於いて發音されるものを後部齒音（post-dentals）と稱する。

(四) 日本語の標準語にはないが、獨逸語の ich（私）などの ch〔ç〕の如く、前舌面を硬口蓋に極めて近く接して、こゝに摩擦によつて發せられる音がある。今日普通に吾々がヒト（人）といふ時のヒは〔hi〕ではなくして〔çito〕である。東京の方言（標準語とは別である）は〔çi〕を更に〔ʃi〕に變化して〔ʃito〕と發音する。〔ç〕の有聲化が羅馬字の y 即ち〔j〕である。〔ç〕と〔j〕は聲帶の振動の有無の外その位置は全く同一である。たゞ前者は後者に異なつた鋭い印象を與へるが、無聲音が有聲音に比して氣流の強い理由は已に述べた。更に〔ç, j〕の氣流の通路を狹窄して瞬間的にこれを閉鎖し、その際鼻腔への通路を開くならば、佛蘭西語、伊太利語の gn、西班牙語の ñ の音が得られる。發音符號〔ɲ〕。獨逸のランゲンシャイトの如き最も權威ある語學書に於いても謬られてゐる所であるが、〔ɲ〕は純然なる口蓋音であつて、決して齒音〔n〕を含む〔ni〕ではない。

(五) 發音器官は單に構造の上から見る時は、硬口蓋、軟口蓋を一括して口蓋として論ずるの常であるが、發音作用の方から見る時、二つを明瞭に區別して、硬口蓋に於いて發せられる前項の如きを單に口蓋音（palatals）と呼び、軟口蓋に發せられるものは、soft palate の別名 velum を取つて velars（軟口蓋音）と稱する。軟口蓋音は軟口蓋と後舌面の間に作成せられる。その最も著しきものは、こゝに氣流が一旦密閉される〔k〕〔g〕の破裂音である。密閉が進んで摩擦音となつて塞合が、獨逸語の ach、蘇格蘭語の loch にあらはれる ch〔x〕の音である。その有聲音〔ɣ〕は獨逸語の Tage などにあらはれる。また〔g〕の發音に際して氣流が、鼻腔を通過する時は英語の King の ng の音が得られる。發音符號〔ŋ〕。支那語にも多く、上海の上も shang 即ち〔ʃaŋ〕であるが、英語に於ける程發

音が强烈ではなく、殆ど〔n〕に近い。反對に、愛宕の如く、宕の支那音 tang〔taŋ〕が、古く吾國で「タゴ」に寫され又發音せられてゐるのは、〔ŋ〕の發音に於ける鼻音的要素に對して破裂音的傾向の强かつた事が伺はれる。その弱い場合には〔taŋ〕は全く鼻音化して〔taũ〕(ũ は u を鼻にかけて發音したもの、日本語の撥音はすべてこれであつて〔ũ〕ではない)となり、〔tau〕となり、遂に〔to:〕(=:o) となつた。歴史的假字遣のタウの發音が今日「トー」であるのは、文字が發音の變化に遲れて、昔の狀態を保存してゐるからである。こゝに正字法(オーソグラフイ)の音韻研究に對する便と不便がある。〔ŋ〕は日本語には單獨の存在を持たないが、加行、賀行音の前に來る〔ン〕は關係的にこの音となる、銀行〔gᵑ.ŋ.o〕考へる〔kaᵑ ga-〕。軟口蓋音は舊派の所謂喉音〔gutturals〕である。

六、口蓋の後端に下垂する懸壅垂の振動によつて構成せられる音。含嗽する際にこれを聞く事が出來るが、日本語は音韻としてこれを有しない。獨逸語、佛蘭西語に見られる〔R〕の音、及びその無聲音〔χ〕の如きがこれの懸壅垂音 (uvulars) に屬する。

普通言語に用ゐられ、また吾々が子音としての意識を持つてゐるものは、發音の位置より云へば凡そ右の如く分類する事が出來るが、尙この外に、二個の發音器官の協力に依つて構成せられる重要な子音がある。

七、即ちさきに觸れた〔w〕の如きは、兩唇の外にその發音に際しては舌の後面が軟口蓋に近付いて、殆ど〔χ〕に近い位置を取る。吾々はこれを兩唇軟口蓋音 (bilabio-velar) と稱する。〔w〕の無聲音は英語の what, which に見える wh の音である。發音符號〔ʍ〕。單なる兩唇音の〔v〕〔F〕との別はこゝにも現はれてゐる。その他佛蘭西語の nuit (夜) bruit (物音、噪音) 等の語にあらはれる u は單なる母音ではなくして、口蓋音〔ɥ〕を兩唇の丸めと共に發音したものである。即ち兩唇口蓋音 (bilabio-palatal) と稱する事が出來る。發音符號〔ɥ〕。無聲子音の次に於いては無聲音として現はれる〔ɥ̥〕。例へば fuit〔fɥ̥i:r〕(逃走する) puits〔pɥ̥i〕(井戸)。又後部齒音の〔l〕がさきの軟口蓋音の手續きを帶びてあらはれる事がある。露西亞語の一はこれであり、英語の〔l〕は餘程これに近い。異なる發音器官の別々の手續の協同に依つて構成せられる音の重要なるものは大約斯くの如きものである。日本語の所謂拗音なるものは舌が正常の位置をはなれて、キヤ行リヤ行では口蓋の〔j〕に近付き、チヤ行では〔t〕の位置と共に〔j〕の位置に及んで發音せられるものであつて、發音の手續きは單に一箇である。シヤ行は明らかに〔ʃ〕一個の作用であり、ツも〔t〕の密閉破裂が弱められて〔s〕の摩擦の性質を帶びたもの〔ts〕にすぎない。日本語に於いては純粹にこの項に屬すべき音はない。

八、普通の音韻は以上の如く主として口腔に於ける氣流の妨害に依つて發生するものであるが、特に〔F〕の如く、口腔には何等の修飾をも受ける事なく、單に聲門を通過する際の輕い無聲摩擦によつて構成せられる音がある。何等の修飾をも蒙らないが故に〔h〕は他の音韻の如き一定の姿はなく、その發音に際して唇、舌端、舌面、懸壅垂の取る位置は殆ど常に、〔h〕に續く母音の發音のそれである。從つてまた逆に、何れの母音を問はず、これを發音しながら聲帶の振動を急に停止せしめるならば、吾々はそこに〔h〕の氣音が殘つてゐるのを發見する。この現象は一句の末尾に於いて往々見る事がある、「遂々行つてしまつた」。〔h〕の分類は極めて曖昧で、子音とすべきか、母音とすべきかについても往々議論せられる所であるが、聲帶の振動を缺くのを本質としてゐる所より見れば、純然たる母音とはなし難く、從つて今便宜上これを子音に編入するにしてもそれが口腔音でない事は明らかであり、强ひて何れかの

發音の(場所)に歸着せしめなければならないとすれば、寧ろ喉頭音 (laryngal) とすべきであらう。

これに對して明瞭に喉頭に於いて構成せられる音がある。日本語には特別な場合の外認められないが、獨逸語、亞刺比亞語等に多い所謂聲門止め (Glottal stop, glottal catch) であつて、さきに述べた如く密閉した聲門が急に打開いて呼氣を迸出せしめる時の音である。獨逸語には特にこれをあらはす文字もなく、また人々の觀念にも存在しない音ではあるが、事實上殆どすべての語頭の音はこれを添へて發音せられてゐる。發音符號は〔ʔ〕或は〔'〕。即ち獨逸語の anは事實に於いて〔ʔan〕〔'an〕、aus は〔ʔaus〕〔'aus〕である。古くから子音として音韻意義の中にも存在し、文字の上にもあらはれてゐるのが亞刺比亞語であるが、日本語にあつても、「エッ」「アッ」等には著しくあらはれ、普通の促音には稍々程度の輕いものが見られる。

以上口腔を中心として發音の場所に據つて重なる子音を分類して來たが、發音には場所による分類の外に、發音の方法による分類がある。例へば〔l〕と〔d〕の如き、何れも舌端を齒槽にあてゝ位置的には、全く同じ發音の場所(齒音)に屬するにも拘らず、結果に於いて全く異るのは、二つが發音の方法を異にするからである。即ち〔l〕は齒端を不動に置いて呼氣をしてその兩側若しくは一側より流出せしめるに對し、〔d〕は一旦呼氣をそこに密閉して一時に爆發せしめる。前者の如きを方法的に側音 (laterals) といひ、細別して兩側の場合を兩側音 (bilaterals)、片側の場合を片側音 (unilatetals, monolaterals) となし、後者の如きを破裂音 (explosives) と稱する。破裂音に屬するものには、この他、〔d〕に對應する〔t〕、兩唇音の〔p, b〕、及び軟口蓋音の〔k, g〕等がある。〔m〕〔n〕〔ŋ〕の如く場所的には異なるものも同一の方法(氣流が鼻腔に流れてこゝに反響を得る事)に依つて發音する事が出來る。即ち鼻音である。その他、〔r〕の如き舌端を振動せしめる卷音 (rolled)、〔f, v〕の如き摩擦音 (fricatives) がある。今さきの場所による分類に、方法による分類を組合せ、子音の有聲、無聲の對立を加へて、この三つの區分原理によつて子音の表を作製すれば大體左の如きものが得られよう、

方法 ＼ 構成所	labial		dental					
	bilabial	labio-dental	predental	postdental	palatal	velar	uvular	glottal
plosive	p　b			t　d		k　g		ʔ(')
nasal	m			n	ɲ	ŋ		
lateral				l　l		(l)		
rolled				r			ʁ R	
fricative	F ɸ ʌW β	f　v		θ ð　s z S Z	ç j (ɥ)	(ʌW) xg		h

勿論これを以て、あらゆる可能な子音の場合が盡された譯ではない。言語に依つて所有する子音の種類と數を異にするのみならず、同一の言語にあつても、時代に依つて音韻組織は必ずしも一樣ではない。更に各々の音韻の有するニュアンスの差異を考へるならば、子音の數は無數にある。

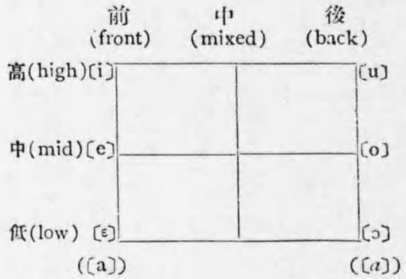
母音の分類。聲門の振動に依つて「こゑ」を得た純音は、咽頭に至つて、全く口腔のみに依つて修飾せられるものと、一部若しくは大部鼻腔に入つてこゝに反響を得るものとに分れる。前者は口腔母音であり後者は鼻腔母音である。

先づ口腔母音に就いて見るならば、その發音に際して唇が「つぼめ」られる場合と然らざる場合がある。この現象は

日本語には西洋語一般に於ける程、明瞭な姿を取つて現はれては來ないが、而も尙、〔o〕の發音を〔e〕の發音に對比せしめるならば前者に於いては唇が稍々著しい圓形を描くのを發見する。唇の圓形は西洋語の〔ɯ〕に於いて最も甚しく、〔i〕に於いて最も稀薄である。日本語の「ウ」は通常〔ɯ〕を以て寫されてゐるが、唇の形に於いて眞の〔u〕とは著しい懸隔がある。かくの如き唇の圓形化を伴はない「ウ」は〔ɯ〕を以て寫される。即ち母韻に於いては唇の形について、圓母音（roundes vowel）と非圓母音（unrotundes vowel）の區別がある。

又、口腔に於ける母音の修飾に關しては、口を廣く開いて行はれる〔a〕の如き場合と、〔i〕,〔ɯ〕の如く狹く閉ぢて發音される場合がある。言葉を換へて云へば、發音に際する舌の位置が口蓋より遠く離れてゐる場合と、近く接してゐる場合がある。二つの間には程度に於いて無數の段階を認める事が出來るが、今便宜上、これを三分して、口の開きに依つて開、中、狹、或はより一般的な稱呼に從ひ、舌の高低に依つて、高母音、中母音、低母音（higi, mid, low の三つに分つ。かくの如き縱の軸に從ふ分類の外に、又水平の軸に從つて母音を分類する事も出來る。例へば、〔i〕と〔u〕の發音に於ける舌の位置は、前者にあつては後者に於けるよりも一層前方である。即ち〔i〕の場合、舌面は硬口蓋に接近するが、〔ɛ〕の場合は軟口蓋である。この前後兩端の中間にも無數の程度を考へ得る事、さきの縱の軸の場合と同一であるが、今、便宜上同じくこれを三分して前部、中部（註）後部（front, mixed, back）の三母音とする。縱横各々三個の場合を組合せて吾々はこゝに九個の母音を得る。これに、さきの唇の運動に關する二個の場合を加へるならば、十八個の母音を得る事になり、更に發音に際する舌自身の緊縮（舌に力を入れて舌身を狹窄する、norrow）弛緩（Wide）の二條件を合せて、理論的には合計三十六個の母音を得る事が出來る。而もさきの分類にあたつては、無數の中間的存在を省略したのであるから、事實に於ては可能なる母音の數は更に上せられる事になり、これに頰、軟口蓋の諸種の運動による影響を考へるならば、母音の數を無限にまで高める事が出來る。母音の數は必ずしも五個とは限らない。

註、今中部と譯した原語の意味は mixed 即ち混合せられの謂である。はじめてこの名稱を用ゐたベル Bell が、最初中部母音は前部後部兩母音の混合なりと自ら信じてゐたためであるが、事實二つの母音の發音手續きの混合はこの場合になく、前後口蓋の中間に、前後舌面の中央部が接近してなす單一の發音過程にすぎない故に佛蘭西では主として中部母音（voyelle moyenne）の名稱を用ゐ、丁抹のイスェペルセンも單に中(部)舌母音（Mittelzungenvokal）と稱してゐる。



しかし個々の言語が實際上有する母音の數は、右の中の極めて限定された一部分であつて、その種類、數量も大體に於いて一定してゐる。

前部母音。前舌面を硬口蓋に向つて高め、舌端を下齒の裏面に觸れしめ、舌全體を緊縮せしめて發聲する時は吾々の普通に有する〔i〕の音が得られる。但しこの際、唇は少しも「圓み」を有せず、最も狹く平らに相接し、モリエールの喜劇中の哲學者ジュルダン氏の言葉を藉りるならば、「口の兩隅を兩耳の方に向て引き離しつゝ」發音されるものである事を忘れてはならない。日本語の〔i〕は、一般の西洋語の場合よりも唇の作用は怠慢であるが、これを〔a〕

〔ö〕などに比較すれば、尙その著しいのを認める事が出來る。〔ü〕にはその長音〔ü:〕がある。若し、唇を平らに相接せしめる代りに、著しい圓みを以て發音するならば、大體獨逸語の正書法の ü の音、佛蘭西語の u の音が得られる。發音符號〔y〕、例へば Kühn〔ky:n〕(大膽な) lune〔lyn〕(月)。普通の母音に於いてかくの如く著しい「圓め」を以て發音されるものは後部母音の〔u〕である。故に〔y〕は、別の言葉を以てすれば、〔i〕の舌に〔u〕の唇を加へたものと稱する事が出來る。從つて〔y〕は未だ子音的要素を少しも含んでゐない一個單純なる母音であつて、屢々行はれる如く日本語の「ュ」即ち〔jü〕を以て置き易へらるべき性質のものではない。英語の pure に於ける u も〔jü〕であつて、母音の前に口蓋摩擦音なる子音を含んでゐる。日本語及び英語には〔y〕の音はない。〔y〕の子音化したものがさきの〔ɥ〕である。子音と母音の境界線はこの間にも走つてゐる。

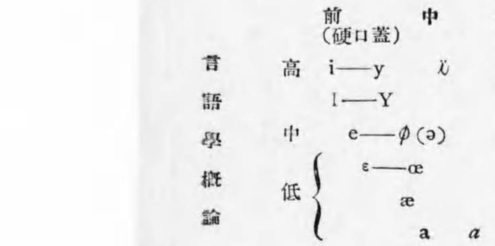
今少し舌の位置を下げた〔i, y〕は〔I, Y〕を以てあらはす。日本語に於いてはこの區別は殆どなく、重要ならざる場合は、この區別の相當著しい西洋語(特に獨逸語)についても、プラクティカリイに前者の〔i, y〕を以て滿足する事が出來る。

〔i〕の位置より、稍舌を下降せしめ、口を開き、從つて唇の扁平も稍々その度を減ずる時は、或點に於いて吾々は〔e〕の音に逢着する。高中低の中音である。これに對應する圓母音が、獨逸語の schön (美しい) Höhe (高さ) 等に現はれる ö の字音、或は、佛蘭西語の neutre (中性の) peu (少なき) 等の eu の字音である。發音符號〔ø〕。この音は英語、日本語には存在しない。英語の pure〔pjue〕の r〔ə〕の音も發生的には〔ø〕の部に屬するものであるが、これに關與する器官の作用が著るしく怠慢である。

次に舌が低下し、唇の扁平が破れて廣き圓形に近づいて、低部に入る時は、〔e〕の開音〔œ〕を得る。獨逸語、佛蘭西語に於いては此二つの音は多くの場合明瞭に區別せられてゐるが、英語にあつては後者の音は air, there, fare, fair の如き r の前に聞かれるのみである。しかもすべての場合ではない。日本語に於ては「エ」の音は一般に前者よりも、唇の弛緩した後者の方であらうと思はれる。〔ɛ〕にも亦對應する圓母音がある。〔œ〕を以てあらはす。

その直下に英語の man, hat, cat などの a の字音をなす〔æ〕の音がある。獨逸語佛蘭西語にはなく、日本語に於いても、小兒の甘えた時の如き、特別なる場合の外、普通の言語音として現はれて來ない。最も口を開き、唇の扁平度を去る時は、こゝに期らかな〔a〕の音があらはれる。普通の日本語の「ア」よりも更に明亮の度が高い。

今述べた前部母音を高低の順に從つて一の系列に組入れるならば、i(y)−e(ø)−ɛ(œ)−æ−a となるであらう。しかしこの際、舌の下降は垂直ではなくして、降るに從つて少しづゝ後方に退く。故に舌の下降の方向をも考慮に入れるならば、上左の如き系列となるであらう。次に〔a〕の位置に於ける舌を稍々後退せしめる時は、暗い印象を與へる類音〔ɑ〕を得るであらう。これより後舌面を、漸次軟口蓋に向つて高めつゝ、次第にその緊縮の度を加へ、口の開きを小ならしめつゝ、兩唇の圓めを加へて行く時は、〔ɛ〕と同じ高さに於いて、英語の dog, walk 等に現はれる〔ɔ〕の開音〔ɔ〕を得、その際、漸次加はり來つた唇の「圓め」を去るならば、同じく



英語の cut, butter, up, come の「ア」音〔ʌ〕が得られる。日本語の「ア」の音も、〔a〕〔ɑ〕より寧ろこの音とすべきであらう。更に原狀に復して上昇するならば、〔e〕と對應する高さに於いて〔o〕を得、遂に〔u〕に至つて熄む。〔o〕は日本語に存在する「オ」の音であるが、「ウ」の音は〔u〕ではなくして嚴密にはその唇の「圓め」を取去つた〔ɯ〕である事は已に述べた如くである。獨り「ウ」のみならず、「ア」〔ʌ〕に於いても同樣であり、又、前部母音の「イ」「エ」にあつては唇の扁平度も一般に緩慢である。一般に日本語は唇の働きが緩慢である。

〔a〕より〔ɯ〕〔ɤ〕に至る後部母音の系列も亦、單に垂直ではなくして、上昇と共に少しく後方に傾く。故にこれを前部母音と同樣にして配列するならば、右の圖の如き表を得る。但しその傾きは前部母音に比して實驗的に著しく些少である。

最後に中部母音は、何れの言語にあつても極めて少なく、日本語佛蘭西語は原則としてこれを有せず、獨逸語にあつても、僅に或る方言(北獨逸)に於いて、或は時々の發音の都合に依つて現はれるのみであり、英語に於いても他の母音の如き獨自の明晰な存在は與へられてゐない。獨り露西亞語のみは、普通羅馬字 y を以て寫される文字の音として、これに獨立性を認めてゐる。發音符號〔ɤ〕、中部母音中の高母音に屬する。葡萄牙語にもこれに似た音がある。併しこゝには中間母音は吾々に親しい言語に稀れと云ふのみであつて、絕對に言語に存在しないといふのではない。南亞弗利加、北亞細亞の言語研究に依つて、次第にこの存在が闡明せられつゝある。琉球の方言にもある。

かくして右の圖の如く、左右に前部後部の兩母音の系列を竝べ、中央に中部母音の一系をおくならば、〔i〕——〔u〕を底邊とし、〔ɑ, a〕を頂點とする「母音三角形」が得られる。已に十八世紀の末葉より不完全ながら提唱せられた古い試みではあるが、今日尙、根本概念に於いて充分なる基礎を持つ有益なる圖表である。

而して何れの母音たるを問はず、發音に際して氣流を鼻腔に通はせる事に依つて鼻母音が得られる。佛蘭西語の不定冠詞(男性) un は〔œ̃〕を、鼻音化したもの、即ち〔œ̃〕であつて、字面に見えるが如き齒音〔n〕は音的には存在しない。

右に觀察した事に依つて明らかな如く、兩唇の「圓め」は原則として高部に多く、又後部に多い。舌の緊縮即ち舌を固くして發音する事も高部後部に多い。即ち四つの母音區分原理には事實上或程度まで平行してゐる所がある。母音の理論的可能性は無數とも稱し得るに拘らず、實際の言語にあらはれる母音が、各言語を通じて大體一定の限度を守つてゐるのはこのためである。言語に依つては佛蘭西語の如く、常に舌の緊縮を守つてゐるものがある。佛蘭西語の母音の發音の明晰なのはこのためであつて、弛緩した舌を以て him を宛も hɛ̃m、book を宛も bok の如くに響かしめる英語の如き事はない。獨逸語丁抹語にあつてもかゝる英語に近い現象が多い。この點に於いては日本語は稍々佛蘭西語に近いであらう。

以上は主として日本語を中心としての音韻個々の研究の概觀である。音韻それ自身空氣の振動としては物理學の中音響學の扱ふ所であり、發音作用それ自體においては生理解剖學の分野である。しかし言語の音韻及びその發音作用は單なる物理的存在でもなく、また生理過程のみでもない。言語の音韻は言語の外的部分である。從つて言語學に於ける音韻研究は、物理學生理學或は解剖學の研究とは自ら方向を異にしなければならない。單なる音ではなく、言語

の音といふ意味に於いて佛蘭西學派はこれをフオネーム phonème と稱する。正書法に拘泥せず、專らこのフオネームを寫す符號が種種發明せられ、こゝに用ゐたのは巴里の音聲協會の定めた萬國音標文字（signes phonétiques internationals）であり、慣用として右の如く括弧に約して使用する。

第三節　音韻聯合

右の如く、個々に就いて考察した音韻は、實際の言語に用ゐられる時は、個々獨立にあらはれる事は稀れであつて、普通相互に聯合して時間的連續の姿に於いてあらはれる。言語の音韻としては寧ろこれを自然の狀態と稱すべきものであるから、個々に分割分離した音韻は却つてこれより析出せられた抽象的第二次的の存在と稱すべきものであらう。また音韻は個々に於いて用ゐられる可能性が少いのみならず、一方嚴密に一個の音韻の範圍を決定する事は、後に述べるが如く、比較的困難な事に屬するものであるから、最近の實驗的音聲學者、――全く物理學生理學等に依存して言語の音を單に音としての方面のみよりして考察する自然科學的な音韻研究の一派――の中には、例へば漢堡のパンコンチエルリ・カルツィア（Panconcelli-Calzia）の如き、個々の音韻なるものは單なる虛構のみと極言するものもある位である。しかし少くとも心理的には音韻を個々に指摘する事は決して不可能ではなく、たゞ實驗音聲學者の使用する物理的實驗裝置にあらゆる場合を通じて明確な境界を取つてあらはれ難いといふのみであるから、彼等の唱へる所は稍々極端に馳せた傾があり、その云ふ所に從つて直ちに個々の音韻なる概念とその存在を否定し去る必要はない。

例へば吾々が〔apa〕と云ふ時、はじめ〔a〕の位置を取つた發音器官が、次の〔p〕に至るには、唇を開放より次第に密閉に移し、顎間角を漸次狹窄し、聲帶の運動を靜止せしめる等の複雜無數の階段を經なければならぬ、〔p〕より〔a〕に到るについても今の手續を逆にして無數の段階を經て行はれる事は同樣である。即ち、〔a〕より〔p〕に至るのは、普通に考へられる如くに單なる飛躍ではなくして、前後兩端の二音韻によつて決定された一定の中間段階の音がある。この中間音をはじめの〔a〕に關しては「はなれ」（off-glide, Abglitt）と稱し、これにつゞく〔p〕に關しては「かゝり」或は「わたり」（on-glide, Anglitt）と稱する。この〔p〕と第二の〔a〕についても同樣である。もし〔upu〕なる場合であるとすれば、〔u〕と〔p〕との間には自ら〔a—p〕とは異る中間音があり、從つてこの〔p〕の「かゝり」及び「はなれ」は〔ᵉ—p〕の場合に於ける〔p〕の「かゝり」「はなれ」とも異なる所がある。しかし吾々が同一の〔p〕なる音を認識するには何等障碍をなすものではない。單に前後に母音を有する場合のみならず、〔ampa〕或は〔apma〕の如く子音を前後何れかに有する場合を取つても、〔m—p〕或は〔p—m〕の中間音は聲帶の振動の有無と鼻腔の修飾作用の有無がその主要なる變移過程であり、唇の位置は少しも變化せしめる事を要しないが、〔p—m〕〔m p〕二つの中間音は相互に決して同一ではなく、元より、〔apa, upu〕の中間音とも異なる所がある。しかも吾々の〔p〕の認識は依然として明瞭である。即ち〔p〕なる音韻の本質は前後の「かゝり」「はなれ」とは獨立であり、少しもこれに依存する所はない、「かゝり」と「はなれ」が却つて前後兩端の音韻に支配決定されてゐるのである。普通の發音にあつては中間音は兩端音韻間の最捷路を瞬間的に通過する發音器官の過渡的狀態によつて起るものであるから、吾々の耳はこれに依つて特別の印象を受ける事はなく、從つて吾々の意識には重要な位置を占めるに至らないものであるが、精密な實驗音聲學の物理的、裝置に於ては、前後兩端の音韻をつなぐ一連の複雜な線としてその時間の長さだけ現實にあらはされる事が出來る、而して一音から他の音へは決して飛躍をしないものであるから、中間音の線を何處に於いて分割して前後兩音韻の領域と定むべきかゞ極めて曖昧である、二音韻はこゝに聯合でなくして融合してゐ

る。聯合に於ける音韻は分割し得ざる一連の發音作用であり、個々の音韻は虚構であるといふのは畢竟この誇張であつて、單なる自然過程としてはその云ふ所は至當であるが、心理的には歴々として個々の音韻例へば「pm」の音を指摘する事が出來る。前後兩端の二音韻は山の巓であつて、中間音は谷である、吾々は言語作用としては巓を認識する。況んや自然過程の測定器たる或種の實驗裝置のあらはす圖式に於いても、吾人の音韻として個々に認識し得る音は、特異にして一見直ちに判別し得る形をなしてゐるのである。吾々は言語一般の立場より見て、聯合或は融合における音韻全體に特殊の價値を認めると共に、個々の音韻の有する意味を沒却する事は出來ない。吾人の言語意識は個々音韻の認識の上に立つ事も極めて知り易き事實である。

更に右に擧げた〔p〕は、〔ampa〕にあつては〔m〕の唇の閉鎖をそのまゝ繼承する事に依つて改めて密閉を起す事を要せず、〔apma〕にあつては、その密閉をそのまゝ〔m〕に傳へる事に依つて自ら破裂を起す事を要しない。而も〔p〕は依然として〔p〕であるが故に、〔p〕の本質は密閉作用のみにあるのでもなく、その存在の理由が破裂の作用にかゝるのでもない事を吾々は知る事が出來る。即ち〔p〕なる音韻の根本性質は兩唇の密閉とその内部に抑留せられたる外界よりも强き氣壓、及び聲帶の無振動の狀態である。この事實は〔ampma〕に於いて一層明白である。〔p〕の本質は即ち發音器官のあらゆる方面に於ける停止の狀態である、强き氣壓を含んだ休止（ポーズ）である。曾つて舊派の人々にはかくの如き無聲密閉音は音として聽く事が出來ないと唱へられたが、事實吾々がこれと聽き得る事は、恰も白紙上の黑點を見得るが如きものであつて、音響の聽覺的刺戟の中止狀態に對して吾人の認識の積極的狀態が相向ふからである。卽ち吾々はこれに依つて、言語の音韻は單なる物的自然的過程ではなく、從つてその作用の停止に於いてもこれを個々に摘出する事が出來ると同時に、音韻聯合の重要性をも知る事が出來る。即ち聯合に於けるが故にかゝる性質の〔p〕をも認識するを得たのである。個々の音韻とその聯合とは常に相關的に考へるを以て至當となすべきであらう。

無意識的な中間音が時に吾々の意識に上る程誇張せられて獨立の音韻と認められるまでに發達する事がある。〔ti〕の聯合に於いて〔t〕が破裂して〔i〕につゞく際、即ち〔t〕の「はなれ」の音が强くして、〔ʂ〕或は〔ʃ〕の如くに知覺せられ、〔t〕と合して遂に〔tʃi〕(chi) の音となる如きがこれであつて、英語の nature creature の -ture が本來の發音「テュール」〔tju:r〕を失つて今の「チャー」〔tʃə〕に變化し preacher の cher〔tʃə〕と發音上差異なきに至つたのもこの過程の結果であり、日本語のタ行のチが元のティ〔ti〕から〔tʃi〕即ち羅馬字綴りの chi となつたについても同樣の手續きの行はれた事も想像される。勿論この際中間音が〔ʂ. ʃ〕の近くまで發達した事については單に〔t〕のみならず、〔t〕と〔i〕との相關關係を無視する事が出來ない。齒音〔t〕が口蓋音〔tʃ〕の位置まで後退したのはこの口蓋に於いての發音の調節を得る〔i.j〕がその傍にあつて自らに近くこれをひいたからである。この意味に於いて〔ti〕—〔tʃi〕の變化は一面音韻の同化作用と稱する事も出來る。

同化作用。 他の例を以て言へば英語の water(水)の wa の本來の發音はワ〔wa〕であつたに拘らず、〔w〕の發音が日本語の和行のそれと性質を異にし非常に兩唇を圓くして發音せられるが爲に、その兩唇の狀態が次に續く母音に及んで、これを圓母音たらしめ遂に〔wɔ〕となり、全體が〔wɔtə〕と發音されるに至つた如きがこれである。同化作用は聯合に於ける音韻の相隣るものが、一方より一方へ或は相互に作用し合ふものを言ふのであつて、今の場合の如きは先行するものが後行するものに加へた作用である。これを特に前進的同化作用 (progressive assimilation)

といふ。これに對してさきの〔ni—ni〕の如く却つて後行するものが先行するものに作用して己れの近くに引寄せるものがある。今まで一般に後進的同化作用（regressive assimilation）と稱せられてゐるが、嚴密に云へば、〔t〕と〔i〕の二音が已に並列した後、徐ろに〔i〕が先行する〔t〕に作用を加へるものではなく、先行する〔t〕が後續する〔i〕を豫想して未だ自らの發音を完了せざる中に進んで〔i〕の發音の位置に近付くのであるから、事實は却つて先行する音が、後續するものゝ發音の一部を先き取りするのである。故に寧ろこれを先取的同化作用と稱すべきであつて、最近次第にこの名稱が獨佛を中心として起りつゝある、獨逸語ではこれを Vorgreifende Assimilation、佛蘭西でも同じ意味に於いて l'Assimilation anticipante とふ。さて右の二種の過程を換言すれば、前進的同化作用は先行する音の發音作用があまりに長く維持せられて續く音の發音の中までも侵入することであり。先取的同化作用はあまりに早く後續するものゝ發音作用が先行するものゝ中に侵入する事である。この兩方向からの同種の發音侵入を一個の音が腹背に受けて、先行する音と後行する音に共通な要素に近付けられる事がある。例へば獨逸語の nebenbei「傍に」は本來の發音〔ne:ben'bai〕に於いて齒音〔n〕は前後からこれを挾む二つの唇音〔b〕の作用を受けて同樣に唇音に入り〔m〕となつて全體が、〔ne:bm'bai〕と一般に發音されるが如きがこれであつて、特に兩側的同化作用（獨逸語 doppelseitige Assimilation）と稱せられる。兩側的同化作用は普通に所謂相互同化作用（reciprocal assimilation）とは別物である。後者は相接續する二つの音韻が相互に作用し合ふ事によつて中間の一音に合致する事を指すのであるが、兩側的同化は三個の相連續する音韻の中、前後兩端の同種の音韻が中央の一個に對して同種の作用を加へてこれをして己れの種類に一致若しくは近付ける事をさすのである。從つてその作用は同化作用中最も强烈であるのも自然の勢であつて、例外を以て破られる事も比較的少ないものである。

相互同化といへば聯合にある音韻は何れも中間音を通じて相互に或程度の同化を行つてゐるのであつて、前進的乃至先取的同化作用も聯合に於いて前後相關的關係にあつて行はれるのであるから、當然一の相互同化の一つであり、特にこれを取出して他の同化作用と並べて置くにはあまりに概念が曖昧である。相互同化の例として提出せられるものはダィ（大）がデイ、デエとなる如き〔ai—ei, e:〕の變化に於いて、〔a〕と〔i〕が、相互に作用して互に相手を自らの發音の位置に近寄せた結果、遂に二音が合してエとなつたとせられるものであるが、個々音韻の同化力は音韻に依つて必ずしも一定しないが、彼等の間に强弱の差のあることは事實であるから、かゝる同化が同時妥協的に行はれたと信ずるよりも、〔ei→i〕の前進的〔ei←i〕の或は先取的同化が一時主として行はれて或程度の近似が實現せられて後、他の一方が行はれ、結果より見て相互同化が行はれたと認められるのであると考へる事も可能である。かゝる二音より、一音を構成する相互類化の特殊の場合は寧ろ融和と稱するを適當とするであらう。

普通の同化作用は相連續する音韻間に行はれるのが常であるが、時に作用が中間に他の一個乃至數個の音韻を置いて、比較的距離を隔てた音韻間に行はれる事がある。本來の Orang-Utan（猩々）が獨逸語に於いて末尾の〔n〕が前部の ng〔ŋ〕に同化して Orangutang となつてゐる如きがこれであつて、日本語に於いてもヨモヤマは本來のヨモヤモ（四方八方）の末尾の母音 o が先行するヤの母音 a に同化したのに結果する形であるとも稱せられる。但しこれには尙考ふべき餘地はあるが、兎に角かくの如き現象を一般に協和或は調和（harmony）と稱する。蒙古語土耳古語及び北アジア一帶の諸語には、母音を强弱二種に分類し、語根又は語幹に存する第一母音の强弱に依つて後續する語尾の類に

含まれる母音の種類が決定せられる文法現象がある。所謂ウラルアル・タイ語族の母音協和（vocal harmony）であつて、この語族に屬すると認められる朝鮮語にも古語にあつてはその痕跡が認められるといひ、日本語に就ても從來種々論議せられたが未だ有無を確言し得るには至らない。

同化の現象を母音間に於けるものと子音間に於けるものとに分つて論ずる人もあるが、吾々が今迄の一二の例に就いて見た如く、母音と子音との間にも著しい同化が行はれてゐるのであつて、分類の標準は子音母音の區別よりも寧ろ子音母音を通じて發音調節の箇所であるべきである。

また同化に際して作用するものが作用せられたものを全く自分と同一の音に化する場合と、單に或程度まで引寄せるに止まつて類似性を增すのみの場合がある。即ち前者は完全同化であり、後者は一部同化であるが、この區別は單に程度の差であつて質的に何等軒輊する所はない。

音韻の長短　〔ampma〕の〔p〕は、發音器官が當該發音の位置を維持してゐることに依つて認識せられる。かゝる維持の時間的長さが音韻の長短である。故に音韻の長短は單に母音に限られたものではなく、子音、殊に瞬間的として長さを認められてゐなかつた〔p, t, k〕等の破裂音にも、その發音器官の狀態が維持される限りの長さがある。破裂音が長音となる時は近世日本語に多い促音をなす。促音の場合にはさきに述べた如く聲門の一時的閉鎖を伴ふのが常であるが、その主原因は破裂音の長音の場合が多い。閉鎖、即ち發音の中止狀態の長引くと共に唇內氣壓が高まるのが常であるから、その破裂は普通若しくは短音に於けるよりも遙かに强烈である。普通に促音が强い破裂であると考へられてゐるのは單に結果のみを見た論である。

萬國發音符號は長音をあらはすに〔ˈ〕の如き點を用ゐ、短音には何等特別の符號を加へない。半長音には〔ˈ〕のみを用ゐる。音の長短は概ねこの長、短、半長の三段に分つのみであるが、更に詳かに分つ時は、極短、短、半長、長、極長の五段に分つ。これらの兩種の書法を〔a, m〕に就いて書けば次の如くである。

極短	〔ă, m̆〕	或は〔 ˘ 〕
短	〔a, m〕	
半長	〔aˈ, mˈ〕	〔a., m.〕
長	〔a:, m:〕	〔aˈ, mˈ〕
極長		〔aˈˈ, mˈˈ〕

五段分法の極長の點は音の長引くと共に無限に打ち連ねる事が出來る。音の長さは決して長短の二つのみではなく、また長音は短音の二倍とは限らないのである。しかし普通に發音された音には大體平均値が定まつてゐるが、それが語頭に來る場合、語中に來る時、語尾に立つ時に依つて同一の音ながらそれ自身の中に於いても著しい長さの相違があり、子音についてはこの外、その前に立つ母音の長短に依つて更に影響せられる。例へば英語の〔p〕について實驗的裝置に依つて得られた長短を百分ノ一秒を單位としてあらはせば次の如くである。

	語頭	語中		語尾	
		長母音の後	短母音の後	長母音の後	短母音の後
	一一・五	一二・六	一四・八	八・〇	一〇・二

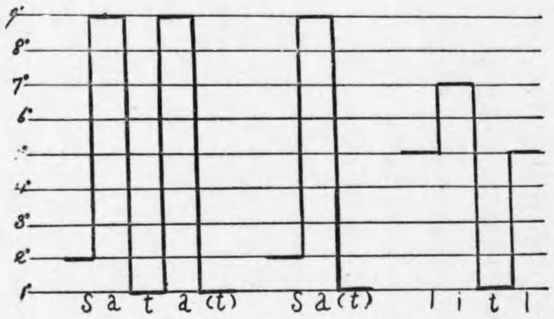
特に著しいのは〔l〕〔n〕の有聲子音がその後に續く有聲無聲の子音によつて左右される長短であつて、英語 mend

の〔n〕は ment の〔n〕に比して凡そ百分ノ七秒強ほど長い（一九・四對一二・二）。日本語に關しては未だこの種の詳細な報告に接しないが大約これに相應した數値が得られるであらう。

音節

個々の音の聯合の最小單位として音節なるものが擧げられる。〔sa〕〔sat〕は一音節であり〔sata〕〔satat〕は二音節である。しかしかくの如く音節の單位を決定するには個々の音韻の亮度（sonority）、即ち朗らかさを知らなければならない。音韻の亮度は子音と母音の分類の標準となつた發音器官調節の中、主として口腔の開狹に比例し、音の最も遠方まで聞える程度である。從つて一旦口腔を密閉する事を前提とする破裂音は亮度最も低く、口腔を廣く開く〔a〕は亮度最も大である。而して有聲音は無聲音に比して朗らかなのは勿論である。乃ち最小より最大に至る亮度を次の如く凡そ九度に分つ事が出來る。括弧中の例は必ずしも全部を盡してゐるわけではない

一度　無聲　破裂音　〔p, t, k〕
二度　同　摩擦音　〔f, s, ç, ʃ〕
三度　有聲　破裂音　〔b, d, g〕
四度　同　摩擦音　〔v, z, j, ʒ〕
五度　同（イ）鼻音　〔m, n, ŋ〕
同　同（ロ）側音　〔l〕
六度　同　卷音　〔r, R〕
七度　同（イ）　〔i, w, u〕
同　同（ロ）高母音　〔i, u, y, a〕



八度　同　中高母音　〔e, o, ø〕等
九度　同　低母音　〔a, ɔ, ɛ〕等

これに依つて「sa, sat〕〔sata, satat〕の亮度表を描けば前の二つは一つの頂點を有し、後の二つは二つの頂點を有する。即ち音節の數は一連の音韻聯合に包含される亮度の頂點の數である。故に英語の little〔litl〕の如く、實際の發音上母音は一個を有するのみの音韻聯合も亮度の預點を二箇有する事に依つて二音節と認められる。しかも最初と最後の〔l〕は共に五度なるに拘らず、一は音節構成の中心となり、一は中心と認められないのは、頂點をなすと「谷」をなすとの相違に基く。即ち音節の數は亮度の相對的頂點の數である。

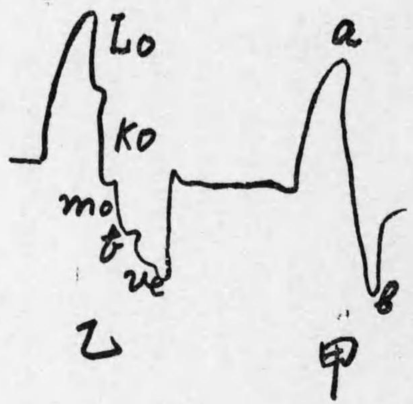
從つて子音と雖もその兩側に位する音より亮度高き時はその一群の音は音節を構成し、反對に母韻と雖も他より亮度低き時は獨立の音節を構成するに至らない。たゞ母音が亮度概して最も高き部に屬するが故に、普通にこれが音節の中心と考へられるのみである。梵語やスラヴ語に〔krt〕〔brk〕の如き音韻聯合が明瞭に一音節と認められ、時にこれが獨立の意味を有する一の單語と認められるのは、六度の〔r〕が前後の一度二度の音韻の間に介在して著しい頂點を形式してゐるからである。七度又は八度の母音が九度の母音と並存する時は亮度及ばざるが爲に、後者の構成する頂點に附隨する谷、或は中腹を形成するに止ま

り、獨立の音節をなす事が出來ない。所謂二重母音（diphthong）はこれである。

二重母音には英語の eye〔ai〕の如く、亮度の高きものより低きに及ぶ下降的のもの、yes〔Ies〕の如く度低より高度に及ぶ上昇的のもの、前後兩音が同一亮度に屬して何れが頂點を形成するや不明なる水平的のものゝ三種がある。日本語にあつても、サイ（骰子）カヒ（貝）等は歌謠朗讀を除く普通の發音にあつては單に一音節をなす下降的二重母音である。コヲ（メ）（小雨）の如きも通例の發音には、上昇的二重母音である。〔baai〕又は〔bʌʌi〕（場合）の如きを水平的を稱する事が出來るが、多くは長音と化し或は中間に低度の母音〔i〕又は子音〔j〕を入れて「バヤイ」と發音せられる。しかし語原的意識の働く時は故意に二つのアの間に glottalstop を置いて〔ba'ʌi〕と切つて發音する事も多い。日本語には少ないが、三つ又は四つの母音が一個の高き亮度の下に統一されて一音節を構成する三重母音又は四重母音（triphthong.tetraphthong）がある。西班牙語、伊太利語に多く、他の言語に於いても特殊な音韻現象として偶發的に現はれる事がある。

要するに音節の構成要素は母音たると子音たるとを問はず、長音と短音の別を問題としない、關する所はたゞ各々相連續する音韻間の相對的亮度の差異である。故に同一の音韻も或組合せにあつては音節の中心であるが、他にあつては單に他の音韻の附隨的要素にすぎない。單に〔i〕や〔u〕は母音に近いから子音ながらこゝでは音節構成的であるといふが如きは未だ音節の說明ではない。而もこれは今日に於ても尙發音學の書物に屢々見出される所である。音節の研究には亮度を明確にしなければならない。

獨逸語の Lokomotive（機關車）なる五音節語を發音する際、胸廓內の氣壓が呼氣と共に減少する次第を帶狀肺量計を腋下に卷いて檢すれば圖中甲の如き a—b の何ら特殊の變化なき降下曲線を描くのみである、特に一音節宛區切つて Lo—ko—mo—ti—ve 發音する時のみ乙の如き階段形を描く。これによつて實驗音聲學者の中には、普通の發音には音節なるものなし、單に故意に發出される場合にのみ認め得るに止ると稱するものもあるが、これは音節の原理が各々の音韻の本質的な亮度の對比に依存する事を忘れてゐるのである。呼氣作用の狀態と亮度の高低とは自ら別の範疇に屬する。



音節の構成について今一つ注意すべきは、母音＋子音（こゝには母音を假に音節構成音の代表として）の連續關係である。先行する母音が發音し切られない中に續く子音の發音が侵入する時と、充分母音の發音が行はれてから子音に移る場合がある。獨逸語、英語等のゲルマン語は短音のあとでは一般に前者の傾向があり、日本語、スラヴ語、佛蘭西、伊太利語等は後者の傾向に屬する。故に英語獨逸語には音節の分割線が子音の後まで來る場合多く、後者、殊に日本語は分割線を母音と子音との間において、子音を次の音節に算入する。即ち音節は必ず母音を以て終り、子音は音節のはじめに來るのみである。日本語は原則として一語が子音を以て終る事がない、かゝる音節構成を開音節といひ、前者の閉音節と對立せしめる。日本語が音節文字たる假名を使用して特に不便を感じないのは一つにはこのためもある事と考へられる。母音＋母音　の場合にも同樣の傾向が認められる、即

ち二つの母音の連續には幾分疎遠な所がある、從つて日本語の二重母音は英獨語程に緊密な一體を構成しない。

【註】 skuks の如きは兩端の s がその内側の k に比して亮度が高いから前に述べた所に從へば三つの峯をなし、從つて三音節となる筈であるが、依然として事實上一音節である。それは別の實驗的方法に依つて證明せられる。即ち音韻聯合を發音する際の喉頭筋の緊張弛緩の狀況を特別の裝置によつて圖の上に山と谷の形で寫すのであつて、谷の最底の部分を音節の切目とすれば、skuks も明らかに一の音節である事が明瞭にせられる。即ち音節の標準を喉頭筋の努力に置く最も正確な方法であるが、普通にはより簡單な亮度を以て充分とする事が出來、事實に於いても〔s〕と〔k〕の如き一度と二度の差は極めて小さいものである。

またアルフベットを使用する西洋に於いても、教養の低い人々は一聯の音韻を一箇一箇に分つ事に困難を感ずるが、音節に分割するには何等誤を犯さないのが普通であるのを見れば、音節が吾々に對して音韻聯合に於ける自然的單位である事は確實である。文字の發達についてもアルフベットよりは日本の假名のやうな所謂音節文字の使用が早かつた。

アクセント　音韻聯合に於いては、亮度の峰の數に依つてその音節の數が定まり、音節の範圍分割はこれを構成する各々の音韻の連續性に依存する。亮度はそれ〴〵の音韻に附隨する本來的性質であるから、如何なる場合にも一の音韻聯合に音節が構成せられるのは自然の勢である。即ち聯合に於ける音聲單位は音節である。單語或は文を音節よりも高次の音聲單位とする事が屢々行はれるが亮度(の峰)に依る統一に關する限りかゝる主張は不可能である。一語或は一文を音聲的或は發音的に統一するものは音節の上に落ちるアクセントである。發音符號に於いては〔ˈ〕の印を當該音節の前に附する。

吾國の標準語に於いてはアキ(秋)のアクセントはアにあり、アキ(飽き)はキにあり、此れに對して英語の fellow, meadow は第一音節にアクセントがあると稱せられる。しかし日本語の所謂アクセントと英語獨逸語その他一般の西洋語のアクセントとは必ずしも同一ではない。西洋語のアクセントは所謂力點であつて、その部分に特に力を入れて強く發音する。即ち音の強弱のアクセント (dynamic accent) である。發音器官全體を緊張せしめて強き呼氣の下に強き障碍を與へて發出する。西洋語の強弱に對して日本語は調子の高低を以つてアクセントとする。聲帶の振動數の多少であつて必ずしも呼氣の強弱ではない (musical accent)。「秋」のアはキよりも調子が高く「飽き」のキはアよりも調子が高いのである。高い調子の音を弱く歌ふ事が出來る如く、低き調子を強く誦する事も出來る。高低と強弱は別物であつて、アクセントなる概念にはこの二種のものが含まれてゐる。從來日本語のアクセントの研究について種々の障碍を蒙つたのは、強弱と高低を區別せずに、直ちに西洋語の強弱のまゝを該當せしめんとしたからであつた。

しかし明治の中期にあつても山田美妙齋の如きは、日本語に調子の高低を認め、上下の二段に分ち、二音節の語について上より下に降るもの、下より上に登るもの、及び上上、下下二つの水平的(彼は全平といふ)のものゝ區別を立てたが最近九州大學の佐久間鼎氏は、これを以て稍不充分なりとし、例へば「明き」の如きは直ちに下より上に登るに非ずして下位より中位までに至るものであると精密に測定せられた結果、上下の外に中を認めて、上中下の三段の高低を設けてゐられる。西洋語の強弱についても單に強弱の二段のみではなく強中弱の三段を認めるのがより實際に適つてゐるのは周知の事實である。勿論右に述べたのは標準語のアクセントであつて、東京語は大體これに合致してゐるが關西及びその以西の地方はアクセントの位置に關して反對の場合が相當に見受けられる。カキ(柿)とカキ(牡蠣)は

その著しいものであつて、標準語にあつては柿のキ、牡蠣のカにアクセントを置き、關西以西は大體に於いてこの反對である。名古屋地方は兩樣のアクセントが竝存してゐるのが認められるが、カサ(傘)の如きは標準語と同じく、カにアクセントを置いて發音されるのを曾て聞いた事がある。柿、牡蠣また塡が意味的に區別されてゐるのは一に、アクセント、卽ち高低配置に依る。英語に於いても 'absent (形容詞)と ab'sent (動詞)、'conjure (呪ふ)と con'jure (切願す)の如く、力點の位置に依つて意味の分化を來す事があるが、日本語の如く根本的に別の意味範疇に入る事はない。概して强弱よりも高低の方が語の意味に關してはより根本的な關係を持つてゐる事はこれに依つても明らかであるが、更に著しいのは支那語である。支那語の四聲には勿論强弱の要素も入つてゐるが、主としてその中心をなしてゐるのは音節の高低の變化である。支那語は一語一音節の言語であるから、一語內の高低の變化は一音節內に於ける高低の變化である。聲樂に於いては原則として一音節は一音符內、卽一高或は一下を以て歌はれ、一音節が二高下三高下にわたること時は變則であつて、これを特にグリサンドオ glissando と稱するが、普通に發音される言語は多少ともこの現象を呈しないものはない。しかも支那語は却つてこれを以て音節發音の原則としてゐるのであつて所謂かの四聲(南支那には八聲)はこの著しいグリツサンドオの四(八)分類である。

右の如きアクセントは高低にせよ、强弱にせよ、何れも慣習或は傳統的のものであつて、吾々が同一言語團體內に理解せられんと欲する限り自由にこれを變改する事が出來ない。この傳統的不可變的アクセントに對して、東西何れの言語に於いても、吾々の論理的要求、感情的衝動に依つて自然的に發音の上に齎らされる心理的可變的のアクセントがある。可變的アクセントも一定の言語においては、一定の心理性に對して一定の平行性を取るのは明らかであり、吾々が言語を通して對者の心的傾向を思惟し得るのは一にこの平行性のためである。文アクセント、語アクセントと稱せられるものはこれであつて、傳統的アクセントに强弱を有するものと高低を有するものとを問はず、一般に論理的要求は强弱に、感情的衝動は高低に現はれる樣に考へられる。しかし調子の高低感は同時に吾々をして力點の强弱感を抱かしめ、從つてこの刺戟は必然的に音韻發音の强弱に及ぶのは心理上自然の理であつて、曾て傳統的に高低アクセントであつた西洋諸語一般の祖語が次第に今日の强弱アクセントに化したのもこの故であるとせられてゐるのであるから、かゝる場合嚴密に二つのアクセントを引離す事は出來ないが、大體に於いて、右の如き可變的アクセントの用法的區別は行はれてゐると見る事が出來る。

例へば文中、甲と乙とを對照せんとする時、對照せられる部分に置くアクセント、或は文中未だ述べざりし新しき事柄(特に對者に取つて)を述べる時、自己の思想の中心點乃至頂點を示す時に用ゐるこれらの價値的アクセント、又は熟語或は連語等の或る一の論理的單位を發音的に統一する時の統一アクセントの如きは日本語のみならず、廣く各言語に用ゐられる現象であり、かゝる論理性は力點、卽ち强弱による事が多い。日本語には曖昧を惹起し易い場合特に亘爾乎波等に「力を入れて」文法的關係を明らかにする如きは日常吾々の經驗する所であつて、かゝる場合西洋語では傳統的强弱を無視して新たなるこのアクセントに地を讓らなければならないのが常である。しかしかゝる場合事情によつては强きアクセントのみを連續して發音する事は必要であつても、心理生理上困難であるから、こゝに强弱のアクセントを一定の間隔をおいて交互に配置して所謂文章のリズムを構成する。リズムの成立には强弱のアクセントが音系列の中に交互に連續して來なければならない。汽車の響き、時計の音が吾々の耳にはリズムをなして聞える如

く、リズムは吾人の心理上音感覺の必然的一條件である。

此れに對して吾々の表現の下に忍ばせる心持感情は主として高低卽ちトオンに於いてあらはれる。喜怒哀樂はもとより、感情の高躍と沈靜は音調の高低に著しい平行を示す。一の表現單位においても、云ひ終つた感じの音調は、對者に問ひを發する依存依賴或は充足を求める感を抱く音調とは自ら異なつたものがある。前者にあつては語又は文の最後に至る程トオンは低くなり、疑問においてはその反對である。しかし形式は疑問であつても內容に於いてはその反對である場合は自からトオンの置き方に相違がある。疑問にせよ、應答にせよ、云ひ切つた感じを抱く時は調子が下降的であり、未だ次に云はんとする事がつゞく時、或は對者に待つ所がある時は上昇的である。從つて普通の一表現內に於いても暫時の云ひ休みの前、挿入句の最後は輕く上昇的であり、說話の最後は他意なき限り著しく下降的である。一般にこの現象をイントネイシヤン（Intonation）と稱する。心理學的研究に依つても吾人のアクセントの强弱に對する感覺は、高低に對するものに比して、到底比較にならない程發達しないものである。吾々が無數に複雜な高低の段階を明瞭に認識し、言語の表現に無限の感情的色彩を附し得るのは一に高低に依るのであり、音樂が吾人の感情に訴へるに職として高低に依つてゐるのも理由ある事である。この音樂にあつても高低の區別の多樣複雜である に對し、强弱をあらはす術語は極めて極限された數に止まつてゐる。この高低の或る規則的連續が卽ちメロデイである。言語に於いても、一の表現には必ず一定の感情性が隨伴し從つて獨自のメロデイが內在することが、最近獨逸のズイーフアース（Sievers）一派によつて主張せられてゐるが、未だ確たる客觀的業績を擧げるまでには至つてゐないと。

アクセントを有する音節は、强弱高低を問はず、そこに特殊の努力が加へられる事に依つて、幾分長音化せられる事があり、或は逆に長音はそこに同一發音狀態の維持があるために强弱高低のアクセントを受ける事がある。獨逸語は今日この傾向の著しいものであり、日本語にもこの傾向は自然的な發音には耳にする事が多い。從つて「アクセント」の中には强弱高低にこの長短を加へて三種の概念が含まれてゐる。このために從來種々の混同と誤解惹起をし、傳統的アクセントに關しては、その研究をして無爲に終らしめた事が多かつたが、文なり語なりの或音節に特別な取扱を加へるといふ意味に於いては、アクセントは使用の柔軟な極めて便利な名辭である。たゞ吾々はその時々のアクセントの種類を無視してはならない。

音韻は個々に於いては單なる音響にすぎない、それが言語活動に對して眞に重要なる價値を獲得するのは聯合においてゞある。こゝに至つて內的心理性一般との間に重要な契機を構成するに至るのは右に稍々考察した如くである。

第二章　言語の內的構機

第一節　內的言語

吾々は音韻を連ねて言語を語り、これを聞く。單に語り、單に聞くのみならず、吾々はまたこれを理解しこれを感ずるのである。最も外部的な客觀的な音韻の外に、言語には內面的な、主觀的な意味と價値の世界がある。吾々が對者に向つて或目的を以て言語を使用するのは、對者がかゝる內面性を理解すべき事を豫想するからである。同樣に對者も亦吾々に向つてこれを豫想する。しかもここに於ては相互の間に單に對者の云ふ所を聞くのみならず、耳にする

所を自らまた能動的に使用せんとする交互作用がある。言語は廣い意味の對話である、ダイアローグである。言語が個人をはなれて、語を換へて云へば、多くの個人の間にあつて言語としての社會的獨立性を維持してゆく事の出來るのは、かくの如き個人間の相互性と、言語自體に於ける聞く話すの交互作用との上に立つてゐるからである。而してこの交互作用は理解の介在を俟つてはじめて可能である。

吾々が書く時、吾々が話す時、單に筆が運び、口が動くのみではなく、吾々の內部よりして筆を運ばせ口を動かしめるものがある。吾々の意識內の音として次々に云ふべき事、書くべき事を命ずるものがある。我々の實際外部的に使用する言語に先立つて內部に開展する「言語以前の言語」がある。通常吾々の言語活動が自由に障害なく進行する時は、吾々の思想は直ちに客觀的外部的な言語の形を取つてあらはれるが故に、かゝる內的言語の存在は意識せられないのが常であるが、表現に際して或る困難に遭遇する時には明らかにかゝる言語の內部にあつて努力しつゝあるのを識る事が出來る。話す事をやめ、書く事をやめた時にも、吾々の心性の內部にあつて內部言語は不斷に語りつゞける。內的言語は言語活動に於ける外的言語の誘導者である。また吾々が思考を廻らし計畫を立てる時、吾々が心の中自ら問ひ自ら答へるのもこの內的言語である。內的言語は思想を言語の形に整理し、これを外部的表現に向つて用意するものである。勿論言語はなくても思想はあり得るであらう。しかし言語なくして思想は明確な姿を取つて定着し得ないのは事實である、しかもこの言語は必ずしも外的言語たる事を要せず、吾々に於いては一般に內的言語の姿でありまたこれを以て自然の過程とすべきであらう。所謂思想は內的言語に整理された心的活動の結果に外ならない。吾々の精神活動が言語活動に關する限りすべて內的言語を通じて行はれる。讀む事はそれが理解せんとする意志を伴ふ限り、視覺に映する文字を內的言語に移す事であり、同樣にして聞く事は聽覺に觸れる音波の一定の系列を同じくこの內的言語に飜す事である。讀むにつれ聞くにつれて吾人の內部にもこれと竝行して開展する內的言語がある。言語の理解はこれであり、言語使用と受用の交互作用の連關し得るのもこのためである。對者の理解を豫想するのは對者に同樣の內的言語を豫想するのである。言語を聞いてはじめて言語が成立理解せられるのではなく、各々の吾人には己にはじめより所有する內的言語がある。たゞこの內的言語が、外的言語の作用の下に自律をすて一時他律的に聽く者の內部に流れるのみである。日本語、支那語、英語等、大小種々の言語團體の存在するのは、口を衝いて出でる外的言語によるのではなく、一に該言語團體に屬する成員の各々の內部に不斷に存在する內的言語の廣布による。

吾々が、未だ習得せざる外國語を聞く時は單に一定の音韻と靜謐の系列が、時間的に吾々の聽覺にふれるのみであり、對者の音調態度によつて、その志向の大體を推測する事は出來ても、言語それ自體としては吾々に何物をも理解せしめる所がない。吾々にはこれに對應して流れるべき內的言語がない。たとへ吾々がその外國語の語彙の全部を記し、今の音系列中に一々これを充當せしめる事が出來たとしても、文法或は文章法即ち該言語の活動樣式を知らない限り吾々の內的言語は斷絕固定して流動する事が出來ない。即ち眞に正しき理解を得る事は出來ない。理解は活動である。內的言語は作用である。聽く事も活動する事であり聽かれた事物に作用を加へる事である。內的言語は、決して普通に考へられるが如き固定した辭書ではない。活動しつゝある文法である。丁抹の言語學者イエスペルセンは言語の研究には言語活動の瞬間瞬間の個人の言語的努力の新しき事を忘れてはならないと唱導しつゝ、文法に Living grammar（生ける文法）なる概念を導入した。今吾々はこれを內的言語に於いて理解する事によつて彼の唱へる所に

更に深い意味を賦與する事が出來る。曾て獨逸の偉大なる日耳曼言語學者ヤーコブ・グリム Jacob Grimm（一七八五――一八六三）は言語が時と共に常に新しき形に變化しゆく過程を見て、言語は造られ了つたものではなく、作用である、エルゴン ergon にあらずエネルゲイア energeia であると云つた。吾々はこれを吾々の內的言語にあてはめて益々その適切なるべきを思ふ。言語は活動的である。その活動的なるは一に內的言語の活動性による。文法の基礎の由つて立つ所もこゝであり、言語活動に材料と原理を供給するのもこゝであり、言語の變化が時には企圖せられ、その結果の蓄積せられるのもこゝである。吾々はイエスペルセンの云ふ所を利用して、言語の研究には內的言語とその活動性を忘れてはならないと云ふ事が出來よう。兒童が言語を獲得し、成人が外國語を習得するのも、その過程こそ異なれ、何れも內的言語の養成である事は同一である。

こゝに注意すべきは、この內的言語は純粹に內面的な吾人の心性內に開展するに拘らず、明瞭な外部的音韻の姿を取つてゐる事である。吾々は通例これに注意しないが、病的に注意が內的音韻に集中せられる時は、內的言語昂進症 Hyperendophasie なる精神病の一種である、內的言語が音韻と密接不離の關係にある事は、吾々の思考が集中された時無意識に獨り言を云つつ外部に發表してゐる事があるのに依つて知る事が出來る。從つて音韻とその意識を有しない聾啞の人々に於ける物の考へ方は當然吾々とは異なつてゐる筈である。かゝる方面に關しては心理學の詳しく研究する所であるが、彼等は特殊な教育と優れた才能を有しない限り、吾々の如き言語心象を持ち得ないものである事は、有名なこの不具の天才ヘレン・ケラーやローラ・ブリッヂマンの告白に徵しても明らかである。勿論、內的言語の音韻は外的音韻に比して、聲量、音色等に於いて變化に乏しく、又外的音韻の如く場合に應じて行はれる意圖せざる發音の特殊化（驚愕、憤怒等）も行はれ方が弱いのが常であるが、この比較的齊一性を保ち、云はゞ外的音韻より內を除いた骨格をなしてゐる性質こそ科學としての言語學の考察に堪える所であつて、第一章に於いて吾々の考察した外的音韻も內的言語に反映する限りに於いて、吾々言語學の立場に立つものゝ省察に値するものとせられるのである。從つて日本語の音韻組織と支那語の音韻組織、或は英語のそれが互に異なる如く、內的言語に關する各々の音韻組織も互に異なり、夫れ〳〵の內的言語に反映する音韻組織の異なる事に依つて外的音韻の組織の相互の差異と、自己維持が行はれるのである。吾々が外國語を學んで正しき發音を獲得維持するに苦しむのは、その言語に關する內的言語が未だ確立されてゐない事である。所謂博言家が多くの言語を發音に於いても何等混同する所なく使用するのは、彼が明晰に區別された、幾つかの內的言語を所有してゐるからである。內的言語に定着してゐない音韻は自由に驅使する事が出來ない。何れの言語に屬するに拘らず、その言語の音を正しく認識し得るためには、自らその發音が出來る事を要すると極言する一派の發音學者の存するのも、要するに內的言語に定着した音たる事を要し、內的言語に定着せしめるには自ら發音し得る事が捷徑であり兼ねてその證憑であるといふ謂に外ならない。しかしながら內的言語が外的言語として表現せられる場合、常に正しく正確に行はれるものとは限らない。圖案を了り釉藥を塗られた壺が必ずしも豫期の姿を酬つて窯を出るとは限らない如く、生理的器官と作用を通じた時の內的言語は、そのまゝ外的言語となると斷ずる事は出來ない。言ひ間違ひの多くはこれである。卵をタガモと云ふ時は、何人と雖も心性內に於いては正しくタマゴと考へてゐるであらう。從つて言ひ違へたタガモを卵より他の意味に取る事はない、かゝる現象は心理學の關する所である。言語學はこれが內的言語に反映若しくは定着した現象について考察と取扱ひを與へる。

これに對し體をカダラと云ふ人は單純に前者の如き誤た犯してゐると考へる事は出來ない。カダラは幾分その人の內的言語に定着してゐるに相違ない。本來語原的に「荒(アラ)」「粗(アラ)」に關係あり、これと同類と目すべかりし「アラタシ(イ)」が古くより音韻が錯置せられて「アタラシ(イ)」「新」になつた如きに至つては、內的言語に定着を過ぎて固着してゐる。アラに「新」の意味のある事は今日尙俗語に「アラニスル、アラニツクル」等の表現に見られる通りであり、「荒物」も本來この意味に解すべきものではあるまいかと思ふ。

吾々には右に述べた如き思想——內的言語——外的言語、或はその逆の方向の二つの他に、取るべき表現と認識理解の手段のある事は事實である。しかしそれが言語であるか否か疑問である。また假に手と目に訴へる書があつても、書は音的言語の記載にすぎず、且つ常に正しくその時々の言語を表現してゐるとは限らない。書以前にも言語はあつた、又文字なき人々にも言語はある。言語學はこの言語の現象を音韻、文法、轉化等あらゆる方面についてそれが內面言語に反映關係する限りに於いて考察する。內的言語は思想が言語の形に整理せられこれが時に應じて外部的音韻の姿に發表せられ得る可能狀態である。又外部よりの言語の刺戟に作用を加へ、これを思想に理解せしめる機能の體系である。一方に於いて思想に關係し、一方に於いて音韻に關係する。この關係を可能ならしめる細微なインレクテュアル・アクト即ち叡智的作用については言語學の關心する限りではない、たゞ吾々に於いては習慣によつて、この三段の過程が順逆兩方向に、無意識に行はれ得るまでに直接的關係を構成してゐるを認める事が出來る。而してその中心は內的言語である。

內的言語は長き「說」である、佛蘭西で云ふデイスクール discours「說」である。說は文よりなり、文は語(單語)より成る。しかし文や語を定義する事は、普通に考へられるよりも遙かに困難な事業である。すべての言語が構造を等しくしないからである。たゞ文と語との關係については一個或は一連の語が相互に機能的に融合して一の意味的統體の單位をなしてゐるものが文であると云ふ事が出來る。故に文は必ずしも、點より點まで、或はキヤピタルよりピヤリオツドまでと外面的に限定するは不可能である。內面的決定に俟ち、內面的決定は時と場合と個人により極めて多樣不定である、對人的な表現の必要の外に、個人的な表現の慾望或は情熱の充足が文單位の決定に加はるからである。語と文との決定には諸言語の構造を見なければならぬ。

第二節　諸言語の構造　(その一)

吾々は前節において言語活動一般における內的言語なるものゝ重要なる事を考へた。音韻も當該言語の內的言語に定着してゐない限りはその言語の音韻體系に存する實際的のフオネームと稱する事が出來ない。而してこの音韻を乘物として行はれる吾々の言語活動の樣式が即ち文法である。換言すれば文法は或言語に關する內的言語の野に描かれたる吾々の言語活動の樣式である。言語が異なるにつれて內的言語も亦異なる如く、世界に存在する種々なる言語の文法も亦同一ではない。言語の構造がすべてに通じて同一ではあり得ないのである。この間の消息は日本語と英語とを簡單に對照することによつても已に明らかである。日本語は普通の文章では主語—客語—述語の順を以て文をやるに對し、英語は主語—述語—客語の順を以てするのが普通である。最後の二要素がその位置を相互に顚倒してゐる。「人が犬を見る」が日本語では通例の表現法であり、これに對して A man perceivcs a dog が英語に慣用する表現法である。勿論詩語、間投詞的用法、命令疑問にあつては時に此の順序も守られない事があるが、それは一時的な、極め

て特殊的な場合であつて、すべての場合に通ずる普遍妥當性を有たない樣式である。即ち日本語と英語とは同種の內容を盛るに對して文章構成上、語順を等しくしない。

かくの如き語順の外に今一つ相違してゐる重要な點として、日本語の文章は右の例についても明らかな如く、「人犬、見(る)」等の支那、文法家の所謂實辭の外に、「が、を」等の虛辭を有し、これが一定の法式の下に相交錯相關聯して文をなしてゐるに對し、英語の文章は、a man, a dog の如く、冠詞を有してはゐるがしかもそれのみを以てしては主語、客語の別を何ら外部にあらはさないものが、日本語の如き虛辭的要素の介在を俟つ事なく單に一定の順序を以て配列して文をなしてゐる事實を擧げる事が出來る。A man, a dog は何ら文章的機能に差異ある事を示す徵象を示さないのみならず、中間に介在する動詞（これも支那文法家に從へば同じく實辭である）perceives も、三人稱の現在形なる事を語尾に接着するsに依つて示すのみであつて、a dog, a man 何れをも自らの主語となし得るものである。故にこの英語の文例の三要素を個々文外に抽出したならば、そこには何らの文章的要素を認める事が出來ないであらう。日本語の「犬を」「人が」の已にそれのみにて、或る文章的位置を多少もと明瞭に示してゐるのに比して、大いなる相違である。日本語の文章には虛辭即ち助辭動詞の類が大いなる勢力を振つてゐるに對して、英語の文は單に語順にまつ。故に語順を逆に返して、a man の場所に a dog を置き、a dog の位置に a man を据ゑるならば、語順の顚倒と共に文章全體の意味も亦逆轉せしめられるであらう。即ち見るものは人に代つて犬となり、見られるものは却て人となる。英語の文章において一方が主語となり、一方が客語となるのは、今の場合について云へば、perceives なる動詞を挾んで、二つが對立する前後の位置そのものに依存するのである。これに反して、日本語にあつては、たとへ前後の位置をかくの如く轉換せしめても、「が」「を」の助辭の用法を謬らない限りは、かゝる全體的意味の變化を來し、また誤解を招來するが如き事はない。「犬を人が見る」の語順はやゝ慣用に遠ざかるが故に、普通ならざる感じを抱かしめるが、その論理的意味に至つては、始めの文章と特に軒輊する所を見出さない。日本語の文の構造においては、語順よりも助辭である、虛辭の介在である。語順はむしろ第二であり、その一定さはむしろ慣習的のものである。英語の如き、その顚倒が直ちに文全體の上に重大なる意味の相違逆轉を伴ふ事はない。その代り、虛辭の位置を元のまゝとして單に實辭のみを入れかへ、或は實辭の位置をそのまゝとして虛辭のみを入れかへるならば、虛辭を中心として、英語に於ける語順の顚倒にも等しい意味の逆轉が惹起せられる。これは、助辭の文章法的重要性の高い日本語においては當然の事柄であると云はなければならない。文章構成において英語は語順を第一とし、日本語は助辭、即ち虛辭の用法を第一とする。英語が語順で示す所を日本語は虛辭を以てあらはす。英語が語順を易へる所を、日本語は虛辭を据ゑかへる。英語の語順と日本語の助辭とは文章法的價値において相等しい。而も助辭はそれ自身の音形を持つ有形の存在であり、語順は、實辭が一定の規約の下に集合するのを俟つてその相互の關係中に發生する一の無形なる關係的存在である。而も何れも文章的要素として機能的重要性に關しては容易に輕重を問ふ事を許さない。內的言語を異にするにつれて、言語の活動の樣式にはかくの如き差異がある。

さて今、日本語の文章は所謂助辭を中心として構成せられたが、この文章法的乃至文法的要素を除外して考へた「人」「犬」の如き實辭それ自身は、單にそれ自らにあつては「人たる事」、或は「人間存在一般」及び「犬たる事」、或は廣く「犬」の概念若しくは觀念を意味するのみであつて、何ら文章的或は文法的要素を含有しない。文法的關係はすべて自

らに附隨する虛辭たる助辭によつて示される。然るに助辭は職として文章の文法的關係を示すのみであつて、それ自身また實辭の如き明確なる概念或は觀念を有しない、意味が不明瞭である、單に實辭に附隨してその文章的位置を明示し、その文的法機能を全からしめ、實辭間相互の關係を規定するのみである。簡單に云へば、實辭は專ら意義を示すもの、虛辭は文法的關係を示し、文章中の實辭に文法的形態を與へるもの。故に吾々はまた他方よりして、實辭を意義質とすれば、虛辭は形態質と稱する事が出來る。日本語に於いてはさきの助辭が形態質にあたり、英語において は無形の語順である。假に意義質をAとし、形態質をbとすれば、さきの場合、意義質と形態質の關係は、日本語にあつてはA+b、英語にあつてはA+0を以てあらはす事が出來る。即ちbは有形の形態質であるが、英語の形態質は無形にして、形態質としては顯現しない。別の表現を藉りて云へば、形態質が全く無い（この場合は單にAのみを以てあらはす）のではなくして、文章中には零度に於いて存在し、文をはなれては消滅する事を示す。

又日本語についても助辭が形に影の添ふ如く常に有形的に附隨するを、例外を許さゞる程度に於いて要求するものではなく、例へばさきの文を「人　犬を見る」としてもよく文として全きを期するに妨となるものではない。「人」は單に意義質で形態質を伴つてはゐないが、しかもその一文の主語たる事は、「犬を」との對比によつて明らかである。吾々こゝに、形態質間の對比の現象によつて形態質的機能が充足されるのを見出す事が出來る。故にかの「人」も、それが文中にある限り、單なるAのみではなくして、英語の場合と同じく、A+0を以てあらはされなければならないであらう。こゝに形態質を、文との關係から切り離して考へ雜い事情が横はる。然るに「見る」も、その意味する視覺認識作用の行はれる過程が主として現在時稱に關するもの、或は時稱を超越して一般に「見る」動作を示すものであると知るのは、同一の內的言語內に存する「見よう、見た」等の同一種の範疇に屬する所の作用を示す他の文法形との對比による事も元より多いであらうが、しかも主としてその原因となつてゐるのは「見る」の語形そのものである。云はゞ「る」にあると稱する事が出來よう。しかし「人が」「犬を」から「が」「を」を取り去つても、「人」、「犬」は實際の言語活動上のみならず言語意識の中にも十分な存在を持ち行る獨立的言語要素であり、「が」「を」も亦意義質から意義質へとわたり歩き得る自由なbでゐるに對し、假に「る」を抽出し去つたあとの「見」は如何なる場合にも言語的獨立の存在を保つ事が出來ない。「見」が存立するためには必ず「る」が附隨しなければならぬ。或は他の形「た(り)」、「よう」の如き何れかの要素が「見」に附かなければならない。而もかゝる「る」は極めて不自山なる存在である。何人も「見る」の「る」、「歸る」の「る」を「犬が」「人が」の「が」と同一に相通的な分子と觀ずる事はないであらう。「見＝る」と分ち得べきものではなくして、「見る」が一體として吾人の內的言語に獨立性を主張してゐる。從つて、「見る」は、「犬を」の如き單純なる意義質＋形態質　即ちA+bではなくして、AとbとがA・bである。是れに對して英語のperceive-sは$_s$が助辭「が、を」の如く、文法的要求ある所、自由に他の如何なる動詞に附隨し得るものであるから、全體は明らかにA+bとする事が出來る。

言語の構造は極めて複雜である。單に相異なれる言語間に於いて相異するのみならず、同一の言語內にも構成原理を一にしない事は、吾々が最も簡單なる場合として擧げたさきの日本語と英語の單純なる文章の對照によつても窺ふ事が出來る。而して構成樣式の異なる原因の主なるものは形態質の性質とその作用が相異なるによるのであつた。言語の構造を考察する場合には形態質を度外に附する事は出來ない。今少し進んで先づ言語一般における形態質のあら

はれ方を稍々詳細に見よう。

第一に形態質は日本語の助辭の如く、形に大小の差こそあれ音韻的にそれ自身の姿を取つてあらはれるものが多い。換言すれば意義質と如何に密接に接合してゐても分析すれば、或音形を以て拆出され得るものである。英語の perceives の s もこの場合に屬する最も明らかな一例であり、日本語の助動詞も同じくこの類に屬する。s はそれ自身で音節を構成し得ないだけ、日本語の助辭等に比して、音韻的獨立性が稀少であるが、英語にも、更に獨立性の高い形態質がないのではない。cf. for, to などの所謂前置詞がこれであつて、機能的に見ても、或場合には日本語の助辭よりも強い獨立性を示す事がある。獨立性の有無强弱は今別として、兎に角こゝに注意すべきは、英語の前置詞は、意義質の前に附添するに對し、日本語の助辭はその後部に附隨する事である。しかも形態質としては共に同樣の働きをなすものとすれば、位置の先後の如きはさして重大なる意味を持ち得るものではない。故に吾々は日本語の助辭の如き形態質を、英語のそれに對して、簡單に後置詞と稱する事が出來る。また英語の冠詞の如きも、文章の主客の關係の決定には干與する所はなかつたが、やはり意義質に對しては a は單數であり、不定稱である等の或る文法的規定を賦與してゐるのであるからやはり一の有形的形態質である。

古代希臘語の動詞「教育する」について、その變化を見るに、「私が教育する」は paideu-ō「汝が教育する」は paideu-eis「彼が教育する」は paideu-ei、又「私が教育した」は pe-paideu-k-a 或は少し意味合を變ずるが同じく e-paideu-on, 又 e-paideu-s-a、私が「教育せられる」は paideu-o-mai。尙多くの形をあげる事が出來るが、僅か一部について見たのみであつても、「教育」なる根本的意味に種々の修飾的意味が附せられるに從つて、それに對應する希臘語の語形にも種々なる變化の起されるのを見る事が出來る。而して、これらに多くの變化する形の中、常に共通の中心分子として不變の姿を持して座を占めてゐるのは paideu である。即ち、これら一聯の相互に同一ならざる語形が何れも教育に關した意味を持ち得るのは一に paideu の介在による。paideu はこれらを意味的に統一する意義質であり、その前後に附着する e-, -ō, -k-a, -s-a, -on, -e-mai, の如きは何れも形態質である。故に希臘語の動詞の形態質も有形であるが、たゞ paideu は單にかゝる連合中のみにおいて活動し得るものであつて、それ自らでは分析の結果拆出せられた要素として、抽象的な存在を言語意識の中に保ち得るにすぎない。從つて右の形態質も、必要に應じて自由に意義質をはなれて他に移り得る日本語の後置詞、英語の前置詞と異なり、固く意義質に附着してゐなければならない。日本語の「見る」についてと同樣である。見る、見た、見ず、見よう等の一連の形に共通の「見」が意義質である事は明らかであるが、それだけを引出して實際の言語活動中に獨立せしめる事は出來ないを同樣に、今分析によつて云はゞ暴力的に拆出せられた「る、た、ず、よう」なども意義質との接合をはなれては獨立し難き事は助辭よりも甚だしい。かく形態質自身も獨立性がないのであるから、これを分割する事は文法的手續として行はれ得るのみであつて、實際の言語活動に於いてする時は双方の破滅を招來する。かくの如く密接に接合した形態質を、前置詞に對して接頭辭(prefix)、後置詞に對して接尾辭(suffix)(また語尾(ending, désinence))と稱する。或は單に、形態質の側から見て、その獨立性が極めて低いために、自然接着性の高度ならざるを得ない前置後置詞的要素をも、かく稱するのが普通である。勿論これらが前置詞後置詞と語原起原を同じくするものなりや否やについては、當該言語について、個々綿密な歷史的研究を必要とするが、こゝにはかゝる歷史的の點は別とし、單に横の軸に從つて、現在當時のみの平面にあら

はれる言語現象一般に關し、接着度の高低に從つて文法的機能を果すに於いては性質を同じくする形態質をかく分つたのみである。(但し希臘語及びそれと親近關係にある一群の言語を研究する學者は ἐκ, ἐπ の みを接尾辭とし、ἐ は右に一寸附言した如く、語尾と稱して二つを區別してゐるが、單にこの分野の言語の歴史研究の結果とその都合を考慮して名付け分けられた迄であつて、一般に言語なるものゝ構造を見る今の場合には、意義質の後部に密着して文法的諸機能を果すといふ意味に於ては、何れも接尾辭と稱して差支へない)。他の言語においてはこれが意義質の內部にあらはれるものがある。印度北東部のムンダ munḍa の動詞 dal.「撲つ」の中央に出現して dag-p-al「相撲つ」となり、相互性の意味合を與へる p の如きがこれであつて、吾々は普通に挿入辭 (infix) と稱する。dal は、paideu の如く、b の侵入を俟つてはじめて實際的獨立を得るのではないから、勿論希臘語の接頭接尾辭の如き融合力はないが、形態質自らに獨立の力なきは何れも同樣である。接頭、接尾、挿入の三辭を汎稱して接辭 (affix) といふ。日本語のお(御、語原的には大)、み(美、眞)も現在形式的には接頭辭であるが、これを文(章)法的機能を示すを本領とする形態質と稱するのは如何なるものであらうか。接辭の中には單なる意味的修飾分子に墮して、或ははじめよりそれとして、文章全體に對して又は意義質間の文法的關係を示すべき機能を有しないものも含まれてゐるのは注意しなければならない。吾々がこゝに扱はんとするものは形態質たる事を標準とする。

支那語は所謂漢文の文面よりしても明らかな如く、文中の語の位置によつて相互の文法的關係の決定せられる事、英語にも等しいものがあるが、併し他に、特に形態質として抽出し得べき音形を有しないのではない。支那語は一語一音節の語であり、從て一々の音節に概念的に明瞭な意味を盛り、字面では一字を以てあらはすが如く、形態質として指摘せられ得るものも字面よりすれば同じく一字を以て充てられてゐるのである。側へば「了」は本來「結了、完成」を意味する實辭即ち意義質であるが、今日にあつては(北京官話)、はじめ「完了結了」の意味を有した所から、遂に動作的意味を有する他の語の(直)後に附隨して、その動作の完結を示し、延いて單なる過去時稱を示すにすぎざる形態質即ち虛辭として使用せられてゐる。音形にも亦省削が加へられ、はじめの了(アクセント上聲 liao³)に對してそれは單なる了 (la) となり、支那語特有の語アクセントをも失つてゐる、即ち無アクセント atone である。來了 三箇人は「三人の人が來た」、雨去了は「(さき程からの)雨が降り熄んだ」の如くである。のみならず、動作の發源地即ち主語よりも動作そのものを意識の中心に置いてこれを強調して云ふ時、「了」を重ねて、去了雨了の如き表現法も用ゐられるに至つては「了」も亦日本語の助辭助動詞に劣らざる明確な有形の形態質であらう。了・了何れも同一の文字に寫されて現在の官話に同時に存在するものであるから、從つて時には了了「完成した、終つた」の如き場合も起り得るわけである。了は實辭より虛辭に入り、形態質として作用するに至つてから次第に支那語の持徵たる語アクセント(了は北京官話で上聲)を失ひ、音形の上に削除が加へられたのであつた。同樣に的(ti, ti)も亦形態質として日本語の助辭「の」に等しい用法を來してゐる。先生的話は「先生の話」、幾千年的書は「幾千年來の書」の意である。古くはかゝる場合「之」を用ゐるか、單に語の並列のみに止めた所である。支那語にも助辭的用法の存在してゐる事、少くとも次第に發達して來る事は認める事が出來る。

右の如き種々の形態質は何れも何らかの音韻形を具へてゐたが、自らと同種一聯のものとの對比によつて、何等の音韻形を有しない事が却つて形態質となる事があるのは前にも日本語に關して少しく觸れた所であるが、今一つ現在

埃及に行はれる亞剌比亞語について更に適當明瞭な例を出して置く。

Kasar-i	私が毀した
Kasar-t	汝（男性）が毀した
Kasar-ti	汝（女性）が毀した
Kasar-	彼が毀した
Kasar-et	彼女が毀した
Kasar-na	吾々が毀した
Kasar-tū	汝等が毀した

即ち「彼が毀した」の形は何ら形態質を有しない事が、有するものとの思合せによつて形態質となつてゐるのである。形態質零度。有すべき要素を欠いだ所に積極的な言語意識がはたらくのは、さきに音韻連合の項で述べた〔amp ma〕に於ける〔p〕が、前後を自らと同じ發音手續（兩唇密閉）による〔m〕にはさまれてゐるに依り、敢て自らのために兩唇を閉ぢ又開く事を要しなかつたが、依然としてその存在は、兩唇を閉ぢて休止せる消極狀態に吾人の積極的な認識作用が向ふ事によつて、認められたのと同樣である。音樂に於いてもメロディーの休止はメロディーの進行と同樣の効果を有するものである。言語においても形態質の休止はその進行と同樣に雄辯である。

第二に形態質は意義との關係に於いて疎密の差こそあれ、何れも何らか自らの音韻形を有してゐた第一の場合に對して、直接に意義質そのものゝ內部に或る變化を與へる事によつて、形態質が表現せられる事がある。英語の man の複數は、dog－dogs の如く mans ではなくして中央の母音を轉換した men である。同樣に foot（脚）の複數は feet であり、動詞 hold（把握する）の過去形は held である。單に意義質內部の母音が變ずるのみであるが、文法的機能に於いては敢て複數を示す -s や、動詞の過去形を示す普通の語尾 -(e)d (love-d) に劣るものではない。形態質は母音そのものにあるのではなくして、母音の轉換そのものにあるのである。この種の形態質は直接意義質に內在するものであるから、その意義質との關係は最も密接であると稱すべきであらう。かゝる性質が非常によくあらはれてゐるのは亞剌比亞語である。例へば

fa§ala	彼は分割した
fu§ila	彼（其）は分割せられた
fu§ilā	彼等（二人）は分割せられた
fu§lu(n)	分割する事
fa§lu(n)	分割しつゝ

の五つの語形が「分割」なる意味を中心として、譯語の示す如き夫れ〳〵の文法的性質を帶び、而も相互に區別せられてゐるのは、全く子音の周圍に介在する母音の組合せの變化に依る。即ちこゝには母音を種々組合せ又變ずる事が形態質であつて、强ひて意義質を求むれば [f§l] の三子音を擧げ得るのみであらう。「分割」なる根本的意味がこれらの諸形を通じて一貫した存在を保つてゐるのはかくの如き三つの子音の或組合せが、一貫して殘つてゐるからである。單に母音のみならず、第一形の中央の子音を重ねて fa§§ala とするならば、「彼は幾度も分割した」或は「切れ

〳〵にした」の意を有する別の文法範疇に入る形が構成せられる。名詞についても同樣に、kalbu(n)（犬は）の複數は kilābu(n)、rāgulu(n)（ラジュルン「人は」）の複數は rāgu(n)（リジャルン）である。意義質中の音韻轉換（特に母音の）には形態質として重要なるものがある。

第三は本節の最初に、日本語の文章と比較しつゝ、英語について述べた文章に於ける語順が、形態質として働く場合である。即ち形態質はそれ自身何等特別の姿を積極的にあらはす事なく、單に意義質自身間の文章法的集合或は配列の關係から生ずるものである。從つて文章を解散して要素を個々に還す時は、かゝる形態質は、群集心理の如くに消滅する、殘るものは何ら文法的の關係を身に示さない意義質ばかりである。かゝる現象を最も純粹に近くあらはすものとしては、第一の場合に述べた如き多少の例外は有するものゝ、依然として事實は英語よりも先づ支那語をあげなければならぬ。國王（kuo² wang²）は國が王の前に接する事によつて、王を形容限定する事が出來るのである。反對に地をかへて王國とすれば限定せられるものとするものも亦忽ち飜轉し、從つて全體の意味も亦反對である。而して國・王共にこれに應じて自から語形の上に變化を來す事はない。すべては語順である。更に他の例を以て云ふならば、我不怕他は「我は彼を怖れない」の意であり、これに對し、我と他の地をかへて他不怕我とする時は、それのみを以て全體の意味を逆轉せしめ得るに充分なる事は、はじめに考察した英語の例におけるよりも明らかである。勿論語順以外の他の文法的原理を有するものにあつても、自ら一定の語順が成立してゐるのであるから、支那語、英語のこの例のみを語順即形態質の唯一の場合とする事は出來ないが、他の言語にあつては語順の變更が感情的に衝擊するのみで、論理的理解の上には根本的な相違、況んや反對の結果を來すが如き事は稀であるに對して、こゝでは語順の變更が直に論理的理解の根本に對して反對若しくはそれに近い結果が來されるのである。而して吾々が今、形態質の一種として考察しつゝあるものは、かの如き文章文法に對して直接決定的に關係せさる語順ではない、その變改が直ちに形態質の變化乃至破壞を伴ふ如きものである。

尙右の三種の外に、形態質として一般に副次的ではあるが、アクセント殊に高低アクセント卽ち調子の抑揚を擧げる事も出來る。日本語のみならず、西洋語一般についても、語尾或は文末の揚げ下ろしによつて、その表現の心理的意味に大いなる變化のある事は何人も日常經驗する事實であるが、今云ふかく所はの如きむしろ主觀の分野に屬すべしとすべきものではなく、明瞭な形態質として用ゐられてゐる場合である。例へば亞弗利加の黑人の使用する一群の言語に見出され得るもの。アクセント（高低の）を揚げる時は肯定に對する否定を示し、複數に對する單數、對者に對して、話す自分を示すのである。例へば、右の一群の言語の一つ、パウル語（le peul）について云へば、ミ・ワラタ（mi warata）を最後のタにアクセントを置いて云ふ時は「私は殺すまい」の意となり、タを他の音節ミ・ワ・ラと同樣の高さを以て發音する時は却つて「私は殺す（であらう）」の意となる。アクセントの高低が英語で云へば、not の存否に該當してゐるのである。そしてかくアクセントに形態質的價値のある事が反面、なきものにも對比の理によつて同樣に形態質的價値を獲得せしめてゐる事は明らかである。言語においてはすべてについて對比の理は非常に重要である。要するにかゝるアクセントの現象は場合も少ないのみならず、これを有する言語は、實際に於いて右にあげて何れかの過程をむしろ第一原理として踐んでゐるのが常であるから、言語の構造の特異點を論ずる今の場合には暫く度外に附する事も出來る。

廣く一般に言語を見て、そこにあらはれる形態質を看る時吾々は右の如く、(一)自らのために實質的音韻形を有して意義質と並んで明らかに顯現するもの、(二)意義質自體内の音韻、主として母音の轉換そのものが形態質なる場合、(三)語順がそれに該當するものの凡そ三つの場合を擧げる事が出來る。アクセントが特にこの計算に算入せられないについては右に述べた通りであるが、この三つの形態質的原理の何れもすべての言語について共存してゐなければならないとは限らないと同樣に、また言語はこの中の一つを以て自らの唯一構造の原理としなければならないと斷定する事も出來ない、事實複雜なる現象を有する言語は、何れを取つても右の方式の何れをも多少ともに包含してゐないものはないのである。而も一々について仔細に點檢する時、錯綜した現象中に、或る一の傾向が、特質としてあらはれ來るのを見出す。これをたとへば言語は管絃樂の如きものである。表面種々なる現象が相錯綜し相融和し、遂に收拾すべからざるにも似た相を呈して流れてはゆく、しかもその基底には一の基調音の、全體を統制しつゝ一定の歩みをつゞけゆくものがある。基調は各々の言語に從つて決して同一ではない。すべての言語の構造の特異性はこの基調音に依てゐるものであつて、基調音これ自身は明瞭に顯現するものと容易に見出し得ないものがあるが、吾々が種々なる言語現象を通じて、言語の構造的分類を試みんとするのは、この基調間の類似を追つてゞある。英語は for. to の如き前置詞を有する事に於いては第一類に加はり、文章の構造に關しては、主客その他の區別及び文法的機能の決定を殆ど語順のみに俟つ事に於いては第三類に屬し、foot－feet, take－took の意義質内部の音韻轉換に依つて文法的機能即ち形態質があらはされる點を見ては第二類としなければならない。また支那語について見ても、語順の最も嚴格なる事に於て、英語の疊を摩するものがあるによつては正に第三類の形態質を有するが、なほ日本語の助辭に似た第一類に屬すべき形態質を有しないのではなかつた。獨り英語支那語のみならず、世界中何れの言語と雖も、程度の多少こそあれ、かゝる事情の下にあらざるものは決してないであらう。日本語自身も、第一類に屬すべき助辭助動詞の用法の外に、用言の活用なるものについては、些少ながら母音轉換の姿もあらはれてゐる。のみならず文章をやる語順にも、助辭を有するとは云へ、なほ一定の拘束がある。しかしこれら夫夫の、現象の當該言語に對する價値を測定し、その基調音を定める時、支那語は當然第三類の言語であり、日本語は第一類の言語である。たゞ英語は全體の姿よりしては當然支那語と同じく第三類に屬すべき言語ではあるものゝ、支那語及び延いては第三類と目すべき言語のすべについて最も許すべからざる意義質の音韻轉換なる實辭それ自身の文法機能的變形なる第二類現象を有する事によりて、姑くこれを支那語から切りはなして、第二類に置く。第二類現象は英語に關しても量的に特に著しいといふ事は出來ないが、その性質が言語構造上決定的な効果を有するからである。

言語の構造は複雜である、種々の構成の原理があらゆる配合を以て交錯してゐる。これが世界の言語を構造上から分類するに際して著しい困難を齎らし、延いてそれを曖昧ならしめ、時にはその不可能をすら呼ばしめた原因であつた。しかしこの瞬昧さ、この不一貫性の原因にこそ、却つて世界の言語多樣性の下に構造上の或る一の重大なる一樣性若しくは共通性のある事を暗示し、廣く言語現象なるものゝ一般的研究を可能ならしめ、且つその興味を高からしめるものである事を忘れてはならない。

さて意義質をA、形態質をbとした所に從つて、第一類の如く形態質がそれ自らの形をあらはすものは A＋b、第二類の如く意義質中に包含せられてゐるものは Ab、第三類の如きは意義質は直接それ自らにおいて少しも外部に

あらはれないものであるからA+0を以てこれを示す。然るにこれら三つの圖式は何れも意義質と形態質の方面、即ちその顯現の仕方を標準として描かれたものであるが、言語の構造には單に意義質と形態質との形式的關係のみではなくして、更に進んで二つの機能的關係、即ち簡單に云へばその親疎の關係を考慮に入れる必要がある。かくして第一類のA+bは、圖式は同一でありながら、bが日本語の助辭、英語の前置詞の如く自由にAと接合離散し得る場合と、希臘語 paideu-ō の一群について見た接辭の如く、固くAに融着してゐる場合がある。即ちA+bはAとbとの關係の親疎についていふとき、bがAより離反し得る性能を有する眞のA+bの場合と、全くAと運命を共にするとでも云ふべきA+(b)の場合とがある。bの周圍に附した括弧は第二のbのかゝる性質を示す。而してA+(b)はこの意味に於いて自然第二類のAbと同一の範疇に入つて來なければならない。第三類は依然變化がない。かくしてAとbの機能的關係については夫々に〔一〕A+b 〔二〕A+(b), Ab 〔三〕A+0の三種を打建てる事が出來る。言語の構造は意義質と形態質との機能的關係に成立するのが眞實なのであるから、かゝる分類も亦當然の歸結であるのみならず、却つて形式的の圖式よりも一層自然的であると稱すべきであらう。言語の複雜交錯した相の下に吾々が見出し、言語分類の標準とせんとする基調音はこれである。――〔一〕のA+bなる構成を主とする言語は意義質に取り合せて二つを一定の規約の下に押し列べるのが原則とするが故に、かゝる構成の一群の言語を接續語即ちconnecting languageと稱する。〔二〕の如きはA b何れをも音形の上に明瞭に有しながら、何れの要素をもこの關係より引き出す事の出來ないものである。意義質のある所必ず形態質あり、從つて文の構成要素、即ち(單)語は直ちにそれ自らに於いて文章法的關係を示現する。語は他の援助をまつ事なくして文中何れの個所にあつても相互に他に對する文法的關係が明瞭である。語は自律してゐる。かくの如き構成の言語を汎稱して自律語と呼ぶ事が出來よう、英語では autonomic 或は autonomous language とすれば適當である。從來〔二〕の種類の言語については、語(語と意義質は從來あらゆる場合に區別せられてゐなかつた)それ自身の內部の(母)音が右に左に轉換せられ、語尾(接尾辭)の音韻が種々の方向に變化せしめられるのを以て屈折語(inflectional language)と稱したが、かゝる名稱は單に單語の構造を示すのみで文章全體の構成に干涉した概念をあらはす事が出來ないから、吾々は今右の自律語なる名稱を以てする事にする。――こゝに〔一〕〔二〕〔三〕の分類の各々に名稱を與へる標準としてゐるのはすべて文全體に對する關係に統一するのを便とするからである。〔三〕にあつては、Aは文全體に對する關係を自らにおいて少しも表はさない、單に孤立的に並列せしめられるのみである。かくの如き構造を原則とする一群を孤立語(isolating language)と稱する事が出來る。

右に述べた所を明瞭ならしめる爲に簡單に表示すれば次の如くである。但しA bは必ずしもこの順である事を必要としない。bAの順である事もある。

	A b形式的關係	A b機能的關係	
第一種形態質	A+b	A+b	接續語
		A+(b)	自律語
第二種形態質	A b		
第三種形態質	A+0		孤立語

第二節　諸言語の構造（その二）

孤立語として第一に擧げらるべきものは上來已に明らかな如く、かの支那語である。支那語の構成原理は一語一音節であり、その一語は個々に取る時は單一の意義質である。この意義質が文中に占める位置によつて種々の形態質を關係的に獲得する。故に同じ「大」もその占據する場所により或場合は「大いさ、大なる、非常に」或はまた「大ならしむ」等の意として解さなければならない。また同じく「好む愛する」の意であつても、「好」は人好利と好利之人の二つの文においてはその位置によつて、文全體に對する文法的關係は必ずしも同一ではない。然るにこの好は北京管話の四聲の中、去聲に屬するものであつて、はじめアクセント高く次いで著しく低く下げて發音する音であるが、これと反對にはじめ低く、次いで語尾を著しく高く、即ち上聲に發音する時は、「善き」又は英語のgoodの意味となる。逆に云へば、後者の意味の時には、後者の如く發音するのである。例へば他是好（彼は善き人なり）。支那語は單音節であるから、從つてこの他にも同音にして異義なるものも多いのは當然であるが、その混同は一部はかくの如くして回避せられる。他の例を取つて云へばヒュエ、正しくは〔ɕyə〕を上平聲を以て（稍高き調子を一貫して上下せしめる事なく）發音すれば、「靴」であり、下平聲（二種あるが右の調子にてはじめのみやゝ低く發音するのが普通である）の時は學となり、上聲は雪、去聲は穴或は血である。單音節語であるからこれ以上に語を分析する事が出來ない、全く不可能である。語それ自身卽ち言語の最小單位にあたると見れば卽ち根である。語根である。故に支那語を孤立語の中でも特に語根的孤立語（root-isolating language; 獨逸語 Wurzelisolierende Sprache）と稱する。このタイプに屬する言語としてはこの外極東海岸一帶の安南語、暹羅語、緬甸語、及び中亞の西藏語がある。然し西藏語はやゝ變化を來して虛辭が發達し、それが實辭に融着して一部分 A+(b) の如くにもなつてゐる。

大體これと同樣の構造を有しながら、支那語の單音節に對して多音節の語を有するものがある。南大平洋の東部、ポリネシヤの一群島サモアに行はれるサモア語（Samoan）がそれであつて、文の構造は原則として述語を先頭におき、主語、客語をの順を追ひ、形容限定するものは形容限定せられるものゝ後に附隨する。例へばfuŋa-fuŋa-pala'ai（海鼠——軟かき）は「軟かき海鼠」の意、itu taua（徒黨——戰爭）は「戰爭の徒黨」即ち甲軍乙軍の「軍」の意である。語それ自身は決して變化しないが、元來數音節よりなるだけ、時に更に小なる要素に分解出來る事がある。

tafa「寢る」——tafaŋi「寢所・寢臺」
ta'ele「浴する」——ta'eleŋi「浴物」
fai「造る」——faiŋa「建築」

を比較すれば、第二列の三語の末尾に見出される共通要素ŋaは、たとへこれに明瞭な具體的意味を付する事は出來なくとも或る抽象的な特別な意味の含まれてゐるのを思はせ、從つて語の分解の可能を意識せしめるに充分である。サモア語の一語一語は支那語に於ける如き「語根」ではなくして、これに或る要素の加はつた「語幹」である。吾々はかくの如きタイプの孤立語を特に語幹的孤立號（stem-isolating language; 獨逸語 Stammisolierende Sprache）と稱して語根的孤立語と形態的に區別する。但しサモア語には支那語にもあらはれてゐる如き虛辭が非常に發達してゐるために、語順に對する規約は非常に寬大である。故に、時に吾々をしてむしろ A＋b の言語にあるかを疑はしめる事

がある。

このA+bの言語、即ち接續語に屬するものとしては、第一に日本語であることは、今改めて云ふを俟たない所である。たゞ注意すべきはbは常にAの後に來り、原則としては決してその前に來る事もなく、またAとの間に他の要素、例へば他のA、他に屬するbの介在を許さない事であるが、同じ構造の樣式に屬する土耳古語、蒙古語には更にこれが嚴重に行はれてゐる。下の土耳古語の例を日本語に比すればこの事情は明らかであらう。el「手」、elim「手—私の」、el-im-de「手—私の—に」、el-im-de-ki「手—私の—に—ある(所の)」、el-im-de-ki-n「手—私の—に—ある(もの)—の」、「私の手にしてゐるものの」。而してまた日本語ではbは常に如何なるAに附隨しても自らの形をかへる事はないが、土耳古、蒙古等の言語には、Aの母音によつてbの母音にも或種の變改が加へられる現象がある。土耳古語(小亞細亞のオスマンリトルコ語)について云へば、母音は所謂强母音(即ち後部母音) a, o, u, ɯ とこれに對應する弱母音(前部母音) e, ö〔œ〕, ü〔y〕, i の二種に分たれ、意義質の主母音の强弱に從つてそれに後續する形態質の母音が强弱に變化する。例へば a—e は强弱相對する故に、複數を示す形態質は、强母音の時 lar、弱母音の時は ler である、從つて ot(草)— ot-lar に對し、さきの「手」の複數は el-ler であり、否定を示す形態質は mak/mek「に於て」を示すものは da/de が對立してゐる。是れが所謂母音協和の現象であつて、單にAにつゞく一個の形態質のみならず、一の意義質に附隨するものはすべて母音協和の現象を呈せなければならぬ。强弱何れでもない中性の形は存在しない故に、日本語に比して、Aとbとの結合は遙かに緊密なのも自然の理であつて、Aに附隨するbの數は場合により著しい出入あるに拘らず、一の母音協和現象の行はれる單位を目して一體と見、これを一語と彼等は觀じてゐるのである。換言すれば、形式的には全くA+bであるに關らず、協和の行はれるためにbが幾分(b)と化し、機能的は全體がやゝA+(b)の性質を帶びて來てゐると云はなければならない。かくの如く接續語の中にあつても、bが從屬的性質を示す型のものを特に從屬的接續語(subordinate connecting language; 獨逸語 unterordnend-konnektierende Sprache)と稱する事にする。しかし土耳古語のすべてのbがかく從屬するのではなく、中には iib「と、共に」の如く全く協和の現象から獨立して、日本語の助辭に似たものもある。却つてこの現象が歷史的に見て古き狀態を示すものであるから、土耳古語も本來的には純然たるA+bであり、後次第にA+(b)の如き意義質+形態質を一體として觀ずるものに變化して來たものと見るべきであらう。同じ系統に屬する親族語の匈牙利語についても事情は同じであるが、母音協和の細部に至つては必ずしも一致しないのは已むを得ない。b自身間の順序にも夫れ夫れに於いて一定の規約があるが、同一のものを同一語群中に於いて無意味に二たゝび繰り返す事を許さないのは何れにあつても同一である。

これに對して同一の形態質を繰り返す事を以て原則とする接續語がある。亞弗利加の中部より南部にかけて行はれる一群のバントウ(Bantu)語がそれであつて、この言語には、代名詞の外、すべて文の言語となり得るもの即ち名詞を幾つかの範疇に分ち、各々の範疇に對して夫れ夫れの音韻的符牒が與へられてゐる。換言すれば日本語で物を算へる時、匹といひ箇といひ人(ニン)といひ束(タバ)といふ如く、また支那語で一位(ウエイ)先生(一人の先生)といひ、三箇(コ)人といひ、また二隻(チ)船といふ如く、算へられる名詞に種類の別を立てゝ夫れ夫れに特種の助數詞を使用すると同じく、バントウ語に於いても名詞を人に關するもの、動物に關するもの等方言、によつて必ずしも一致しないが、大凡十七より二十一まで

の範疇に別ち、人に對しては單數 mu- 複數 ba- 動物に關しては單複共に in-を付する如くして、各々の範疇に夫れ夫れ特殊の接頭辭を與へてゐるのである。例へば今の「人」の範疇に屬する、人の單數はムントウ mu-ntu 即ち英語の man にあたり、その複數は ba-ntu バントウ即ち英語の men にあたる。吾々がこの言語の一群をバントウ語と稱し、この言語を使用せる一群の民族（人種ではない）をバントウ族と稱するのもこれを取つて名としたものであるが、獨りバントウのみならず、蠻族が自らを指示する名稱にはその土語において單に「人」を意味するにすぎないことが未だ明瞭にあらはれてゐるものが多い。また同じく「人」に屬する少女は單數 mu-kazana 複數 ba-kazana 。「動物」に屬する蛇は in-zoka である。この範疇的接頭辭は單にかくの如く名詞に附屬するのみならず、一文の中これを主語として戴く他の言語要素、例へば日本語でいふ形容詞、動詞、副詞、或は前置詞とも稱すべきものゝすべてに對しても冠せられるのである。「美しき人」は mu-ntu mu-lotu (lotu は「美しき」) 及び ba-ntu ba-lotu.。「美しき蛇」は in-zoka in-dotu (dotu は lotu の代り。l が d に變つたのはその前に d と同じく後部齒音に屬する n があるからである——前進的同化作用)。また「行く」enda に關しては、「人々が行く」ba-ntu ba-end'、「少女等が行く」ba-kazana ba-enda である。今少し長い文章について述ぶればこの間の事情は一層明瞭であらう、バントウの一方言、ヴリクトリア湖の南岸一帶に行はれるケレウェ (Kerewe) の例。abantu babi banu babili bakamugambira bati. これを逐字譯すれば「人々—惡しき—これら—二(人)—云へり—斯く」卽ち「これら二人の惡しき人々は斯く云へり」の意であるが、單に文主の abantu (人々、abantu の aba は ba に同じ) にかの範疇的接頭辭 (a)ba が接するのみならず、形容詞(惡しき bi) 數詞(二人 bili) 指示代名詞（これら nu)動詞(云へり kamugambira) の外に、副詞とも稱すべき ati (斯く) にまで及んで、これを bati (ba-rati) ならしめ、以てすべてが (a)ba-ntu の管到する所なるを示す。英語の of にあたるものはこゝでは a であるが、バントウのスピアの方言に於いて、これを用ゐて「村の人々」といふ場合には ba-ntu ba(=ba-a) mu-si (村)、「人々、の、村(「村」の屬する範疇は mu- を以て示す)」といひ、a 即ち「の」にまで「人々」の範疇がかゝつてゐるのである。かくの如く、バントウ語にあつては吾々の所謂副詞前置詞にあたるものは、英語の so 或は of 佛蘭西語の ainssi (斯く) 或は de (の) の如くに色彩の淡いものではない。一つ一つ範疇がその前にも繰り返されるのはそれがバントウの語の言語意識に於いて一個一個明晰な、獨立的な一體を意味してゐると見なければならない。而してこの現象は單に ba- のみならずすべて範疇が異なる毎に、繰り返される接頭辭も亦相應じて變化し、文法的關係の變改を明らかにするのである。卽ち文中の要素の文法的相互關係は、この範疇を示す接頭辭を以て示され、從つて接頭辭自身が形態質たる外に、他の言語にあつては當然純粹な形態質と目されてゐる助・辭前置詞・副詞の類までが、更に形態質の修飾を受けて、あだかも自ら意義質なるかの如き觀を呈してゐる。事實バントウ語が範疇的形態質を更に他の形態質と目すべきものに加へるに至つては、後者は明らかに意義質と觀ぜられてゐるに相違ない。從つて、こゝでは意義質の範圍が更に著しく擴大される。（これらの點については、佛蘭西のゴティオ R. Gauthiot著、「印歐語に於ける語末」La Fin de Mot en Indo-européen 一九一三年巴里出版、二七頁にも同じ樣な事が別の立場から述べてある)。バントウ語はかくの如く、獨特ではあるがかの廣義の意義質と目すべきものに範疇的形態質が繰り返しつゝ流れてゆく A+b の接續語であり、形態質と意義質がゆるやかに並列してゐるのみであるから、又特に並列的接續語 (anreihend-konnektierende Sprache) と稱する事が出來る。日本語の如

きもこのAとbの關係の離合自由にしてゆるやかな點では同じく並列語であるが、他の點では、全く異なつた事情にあることは言ふを俟たないであらう。バントウ語はかくの如く、文法的關係は範疇子によつて比較的明瞭であるから語順はそれに比例してゆるやかではあるが、全く無視せられてゐるのではない事、宛も日本語に於けるが如きものである。

かくの如く副詞前置詞と目すべきものをも意義體の一つと見るバントウ語に對して、同じく接續語に屬するものゝ中に、他の言語にあつては當然意義質と認めらるべき形容詞動詞の用言の他に時には名詞自身をも單なる形態質として後置詞若しくは接尾辭の形において一の意義質に附屬せしめるグリーランド語の如きものがある。例へば siku-minek（こゝに掲げる音形は便宜上非當に簡單化されたものである）は通常「雲片」と譯すべきものであるが、日本語（若しくは支那語）の「片」はそれのみを取つてもまさしく獨立した姿を言語意識中に持つのであるに對し、グリーランド語においてこれに相當する minek は必ず siku-(siko雪) その他の意義質に依存しての外には決してあらはれない、強ひて日本語で云へば「暑さ、寒さ」の「さ」の如きものである。その他更に著しいものとして擧げらるべき、sila（土地）に對する sila-mio「土地に住む人、住民」の -mio, また illo（家）に對する illu-tok「潰えたる家、倒壞したる家」の -tok についても亦、同樣に、これらはすべて、こゝではAに對するとbしての取扱ひを享けてゐる。このbは一のAに對してかくの如く單に一個のみ止まらずA-b—b—b……と連續してゆくのがこの言語の著しい性質である。例へばAなる okak「舌」に對し、bとして「(惡)用」の意味合ひを有する -luzpok を加へ oka-luzpok とすれば「彼は物語する」。更にbとして「特異性、一定性」の意味合の -tuak が加はる事により oka-lu-ttuak は「一定の物語」の意となり、これに -ssak が加はつて oka-lu-ttua-ssak 即ち「一定の物語に適ひたるもの」の意となる。これに形態質-karpok を加へて oka-lu-ttua-ssa-karpok とする時は「彼は何かある物語に適はしきものを持てゐる」の意味にまで發展し、これを今一段 -jjlak なるbを加へて oka-lu-ttua-ssa-ka-jjlak とすれば、意味は反轉して、「彼は何かある話に適はしきものを少しも有しない」「彼は全く話の種を持ない」、又は「彼には話の種となるやうなものが出來なかつた」の意となる。この長い okaluttuassakarnilak において根本となつた意義質は僅か最初の okak「舌」一個であり、他はすべてそれに屬する形態質である。これらの形態質は okak の如き獨立性を持たない。從つてこのこの長い一とつゞきの表現は最初のAに支配統一されてゐる一體であり、全體は一の統一體をなしてゐる。換言すれば、同時に文であり又語であるのである。しかしグリーンランド語は常にかゝる表現法のみ取るのではない、中には日本語、支那語にも似た表現樣式をも有してはゐるが、しかしその特質と目すべき最も著しい樣式はこれである。

出來得る限りあらゆる表現要素をbとして一のAの下に統率し、一語の中に抱入抱合せんとするこの言語の樣式を抱合語（incorporating language 獨逸語 einverleibende Sprache）と稱する。亞米利加の土語の多くも概ねこのタイプに屬し、更に長い一聯の音形が、未だ英語の動詞 +ing 即ち「何々しつゝ」の意にすぎない事もある。このbと日本語のbとは元より意味、性質を等じくしないが、自由に離合し得る點は似てゐる。且つ右の例の示す如く、bにbが加はる時はb本來の音形が省略變化されるのは、日本語の助動詞 + 助動詞の場合に似てゐる。しかし、日本語のAに屬するものがこゝでは全くbに化してゐる事をも忘れる事は出來ない。しかしAのみを析出する事は決して困難ではなく、sila. okak の如きは獨立の形においても言語活動に用ゐられるものである。

第三の構造樣式としては自律語、或は從來の稱呼に從へば屈折語。このタイプに屬する言語としては上來希臘語の例

をあげて來たが、その動詞 paideuō に屬する一聯の形が示す如く、意義質と形態質は必ず密接な關係にあつて、二つを個々に引はなして而も尙實際の言語活動中に存立し得る形を得る事は出來ないのである。これと同じタイプに屬する拉丁語について更に他の例を述べるならば、名詞ルプス lupus は「狼は」の意であり、ルピー lupi は「狼の」、ルプム lupum は必ず「狼を」、又ルポー lupo は「狼に、狼より」の意味であつて必ず狼には文中の位置を示すべき形態質が不離の關係に於いて融合してゐる。のみならずその他、右の形には、それが單數である事、男性名詞である事が全體的にあらはれ、吾々が日本語において日常經驗し、また使用してゐる如きこれらの「混雜物」から淸められた純粹な「狼」そのものゝみを意味する形は得られないのである。右の形は更に複數においてまた別の形別の語尾を取る。たとへそれらの中から分析的に不變的なる lup- を抽出してもそれは實際の使用に堪へない抽象的產物にすぎない事は希臘語の paideu- と同樣である。

またこのタイプに屬するものとして先に亞剌比亞語の事を少し述べた。その時例としてあげたファサラ faṣala（彼は分割した）も同樣に、その形には單數なる數觀念の外に、男性の三人稱にして完了形に屬するてふ事が不可離的に融合してゐる。「彼」を倍にして「彼等二人が分割した」とする時はファサラー faṣalā 普通の複數形はファサルー faṣalū である。同じ範疇に屬するものとして共に擧げた名詞「分割（する事）」を示すファスルン faṣlun はそれ自身男性名詞であり、單數形である事の外に、格より云へば「分割（する事）は」即ち主格である事を示しファスリ faṣli は同樣の條件の外に「分割（する事）の」の意であり、ファスラ faṣla(n) は同じく「分割（する事）を」を意味し、何れの形についても、「分割（する事）」それ自身を何の關係、何の係累もなしに考へる事が不可能なばかりでなく、またかくの如き要求にかなふべき語形は事實において存在しないのである。もし敢てこれを求めるならば、右の諸形の中の不變化要素、即ち三つの子音 f—ṣ—l を取つて來る外はないであらう。この三つの子音は單に名詞形にのみ共通であるのみならず、動詞形にも含まれてゐる。即ち動詞的にもあらざる、また名詞的とも限られざる、最も純粹な「分割的なる事」をあらはし得べき三つの子音である。しかしかゝる子音を露呈したまゝ言語の實際に使用し得ないのは明らかな事實である。吾々はこの三つの子音を抽象して意識の中に考へる事は出來る。しかしそれはあたかも、直角三角形にもあらざる、鋭角三角形にもあらざる、また鈍角三角形にも符合せざる「純粹な」たゞの三角形を腦裡に考へる事を得るが如きものであつて、實際に臨んで紙と筆を持つてこれを描くにあたつては、直角、鋭角、鈍角、何れかの三角形の一つしてあらはされなければならない如く、かの三つの子音も、最も抽象的な姿を以て、具體的語形の原動たり得べき力を持して吾々の言語意識に存在し、內的言語の野の中に潛勢的に働いてゐるのではあるが、具體的表現の姿を取る時は、たとへ內的言語の上に浮ぶのみの場合にせよ、何れかの範疇の何れかの種類或は格に屬する一形としてあらはれざるを得ないのである。かの三つの子音は文字通りの意味において根である、三つの子音をこれ以上分割する事は出來ない。語根である。かくの如く語根が根本的には三子音を以て構成せらる現象は亞剌比亞語の三根主義（triconsonantism, 獨逸語 Dreiwurzelsystem）ッ稱する。有のものであつて、普通にこれを亞剌比亞語の三根主義（triconsonantism, 獨逸語 Dreiwurzelsystem）ッ稱する。（勿論稀に二根即ち二子音が根の本質を構成する場合もあるが）。かくして語根を中心としてこれに或る種の第二次的修飾が加へられ、具體的語形として夫れ夫れ獨立に文法的關係を自らにおいて示しつゝ種々に使用せられる。具體形としては必然的に自律的である。故に亞剌比亞語の如きを汎稱して語根的自律語（獨逸語、Wurzel auton omische

Sprache) と言ふならば、支那語に對するサモア語の如く、時にbを除いたA内に於て尙それ以上の分析をゆるす可能性を事實に於いて有する希臘語、拉丁語の如きを語幹的自律語（獨逸語 Stammautonomische Sprache)と稱する事が出來るであらう。

歐露の南方、高架索の一部に行はれるヂョルヂヤ語も、希臘語、拉丁語或は亞剌比亞語と同じく自律語に屬する言語である。例へば動詞 v-t'ser は「私が書く」t'sers は「彼書く」を意味し、この前後の要素を除いて不變の t'ser を取る時は所謂對比の理によつて忽ち「汝が書く」の意となり、而も單純に書く事を意味する形を引き出す事が出來ない。更にこの「私が書く」の意味の v-t'ser に da を冠して da-v-t'ser とする時は「私が書くであらう、我書かん」の未來形となり、「汝書かん」はさきの t'ser「汝書く」に同じ手續を施した da-t'ser である。即ち未來現在の文法的差異を示す形態質bなる da は必要に應じて自由に取つ離し或は取り付け得る所がやゝ希臘語、亞剌比亞語と異なつてゐる。これらが Ab 又は A+(b) なるに對し、幾分 A+b の傾向がある。換言すればAとbとの接合が幾分ゆるやかである。更に v-t'ser「私が書く」について、その間にiを入れて vi-t'ser とする時は、同じく「私が書く」の意味ながら、やゝ「私が私の利益のために書く」に似た意味合を得、aを入れて va-t'ser とする時は「私が誰か他の人のために書く」の方向に意味合が拡げられる。即ち、利益を得る人の種類に從つて、介在若しくは挿入される母音（その他にuもある、夫れ夫れ特別の意味を有するがこゝには擧げない）は自由に變改される事が出來る。すべての羈絆を脫した單純な「書く(事)」を意味し得るものは上述の如く之を見出し得ない事は他の自律語とも一般であるが、しかも語の構成要素の結合は近代語においては次第鞏固になりつゝありとは云ふものゝ、未だ希臘亞剌比亞語ほど緊密ではない。名詞に於いても事情は略々同樣であつて、時々その形態質が游離する事がある。即ち、語は自らの文法的關係を自らに帶する事を得て、この點に於いては正に自律的であるが、語自身の結合はゆるやかである。吾々はかくの如き言語を、希臘語拉丁語をその例として擧げた語幹的自律語、亞剌比亞語を以て代表せしめた語根的自律語に對して、これらと區別すべき稱呼を付するならば、語の要素が未だ單なる群の域を脫せずと云ふ意味に於いて(語自身の集合、例へば「熟語」の如き意味に於いてゞはなく）語群的自律語（Gruppenautonomische Sprache）と稱する事が出來よう。

以上を約說すれば

一、孤立語　（例）
　（一）、語根的……支那語
　（二）、語幹的……サモア語
二、接續語
　（一）、（純系）……日本語
　（二）、從屬的……土耳古語(オスマンリ土耳古)
　（三）、並列的……バントウ語
　（四）、抱合的……グリーンランド語
三、自律語
　（一）、語根的……亞剌比亞語

(二)、語幹的……希臘語、拉丁語
(三)、語群的……チョルヂヤ語

第四節　諸言語の構造　(その三)

言語の構造は誠に多樣である。吾々はこの多樣性の中に、意義質と形態質との關係、及びその文章全體に對する位置を標準として、こゝに分類を行ひ、前節に見た如き結果に到達した。しかし言語は、已に吾々の知る如く、如何なるものと雖も自らを他と區別すべき特色を有すると共に、一面他と判然これを別ち難い共通的色彩を有してゐる。連恒する二つの山は頂によつてこれを區別する事は出來ても、二つを繫ぐ谷は何れの點を境界として右と左に分つべきや、遽に判定する事は困難である。音韻聯合においても、甲乙相連なる二音の間には何れの領分とも定め難い「わたり」、「はなれ」の中間音があつた如く、言語の構造に於いても谷であり、「わたり」と目すべきものが存在する。甲乙二つの音を別々に認識するのは「わたり」「はなれ」を姑く無視して山頂をのみ視點においてゞあつた如く、吾々が言語を構造に關して分類したのも姑く谷を度外に附してゞある。事實孤立語と接續語との間にも、それ自身全體の性質よりしては前者に屬すと認むべきものでありながら、なほ後者の性質を著しく示してゐるサモアの言語の如きがあつた。接續語に屬する土耳古語も、かの母音協和によつて形態質をbよりもむしろ(b)ならしめる性質よりすれば一面、A+bの接續語よりもむしろA+(b)の自律語にも近い性質をあらはしてゐる。また接續語の純粹なるA+bの形を明瞭にあらはしてゐると吾々の普通に認める日本語にあつても、その一部分例へば用言の變化(活用)の如きにあつては、母音轉換の現象も見られる事は已に右に觸れた所である。自律語にあつても最後のチョルヂヤ語の如き、Aとbは相互に獨立し得ない關係にあるに拘らず、bは時に游離性をあらはし、接續語に近い性質もほの見えるのである。吾々が考察した言語は、言語の種々なタイプを能ふ限り克明にあらはした代表的なものを選んだのであつた。しかしそれにも拘らず、事實はこの例についてもなほこれだけの分類的不透明さを暴露してゐる。こゝに考察する事の出來なかつた他の鉅多の言語の一つ一つについてその構造を比較する事があるとすれば、その多樣性は如何なる程度まで上り得るであらうか。已に東京の方言、關東の方言と關西の方言を比較するのみに於いても、二つの間に全く同一の構造が行はれてゐると稱する事は出來ない。活用が異つてゐる、造語法が別である、文のやり方が同一ではない。即ち二つにおいては、その言語の精神が異つてゐる。——世界の言語をこの立場に據つて見る時、その構造的多樣性は全く收拾の外にあるべきは寧ろ當然である。吾々はその基調音を追ひ、それに或る種の通有性を僅かに求めて分類の標準とした。云はゞ全的としての言語個々に暴力を揮つて、基調音以外の第二次性を姑く度外に付したのである。從つて右の表に對しては大いなる飛躍と、多くの保留がある事に注意しなければならぬ。しかし吾々をして、全體に對する明晰にして簡捷な鳥瞰を得しめ、これにつゞく研究の方向を發見するを容易ならしめる分類なるものゝ一般的効果は、必ずしもこれによつて失はれるものではない。

自律語においては原則として、意義質と形態質が相依つて實際上分つべからざる一體をなし、文の構成單位となり、兼ねて一の單語を成すに對し、純粹な孤立語においては意義質のみが文の構成要素であり單語である。しかし自律語と孤立語、何れにあつても單語なるものゝ意味が非常に明瞭であるが、意義質と形態質が原則として離散し得る狀態にある第二類の接續語に於いては、意義質を單語と認めるならば、同樣の理由を以てする限り形態質を單語と目

する事が出來ない。例へば日本語に於いて、「犬」を單語と認めても「を」一個をそれと看る事には何人と雖も躊躇せざるを得ないであらう。文の構成要素であるといふにおいては何れも同一ではある。しかし假令、文の要素なるの意味において「を」を單語とするとも、その場合同樣に「犬」を單語と見るを以て吾人の言語意識は果して滿足するであらうか。一の言語單位が單語であるか否かの問題は一に言語主觀が、それを言語作用に於いて充分獨立的なる一體と觀ずるか否かにかゝつてゐる。こゝに嚴密に客觀的なる標準を立てる事は出來ないが、「犬、見(る)」等の意義質は吾々の言語主觀に對して、「本來的の單語」であるに反して、形態質たる「を」の如きは「文法的道具」にすぎないのは事實である。しかし、形態質は言語構造の骨であり、これなくしては言語の構造は直ちに破壞せられる。意義質は言語の肉であり、これなくしては言語的表現も無意義無意味の存在と化するのは明らかである。何れも重要缺く可からざる要素ながら、二つめを同一の標準を以て單語と目する事が出來ないのである。何れを棄て、何れを取り、以て單語の牙城を固むべきか、吾々は直ちにこの問題を解決し去らうとはしない。言語主觀それ自身がこれをなす事を欲せず、この未解決、未分明の間に、日本語のAとbによる言語作用の特殊性があらはれるからである。要するに日本語においては單語は極めて拙劣にしか定義し得られないと云ふ外はないであらう。獨り日本語のみならず、同樣の事情は英語の所謂前置詞 of, to 佛蘭西語の de à を中心としてもあらはれる。しかも一方には時に母韻協和の現象によつて形態質bを(b)となし、Aと(b)との間により進んだ接合度を認めて、全體が一の單語として觀ぜられ扱はれてゐる彼の土耳古語の「單語」の特異性。また他方には文と語との區別もわきかねるグリーランド語に於ける單語の有樣。——要するに單語の定義は最も困難であり、またその姿が最も不統一である。而もその最も明瞭な孤立語と自律語についても、單語なるものゝ意味內容は兩者において全然異つてゐる。

吾々は本章の第一節の末尾において單語の決定の困難なる事を豫測した。寔にすべての言語に通じ得る單語の具體的定義を求める事は困難であり、不可能である。例へば庖丁を水に入れるにも等しい。强ひて定義せんとするならば、最も抽象的に次の如く言ひ得るのみであらう——「單語とは、それ自身一定の意味を有し、一定の條件の下には一定の文法的機能を果し得べき一定の音韻聯合である」。

單語の具體的不統一性に比例し、一方形態質の種々性に依つて、文の姿にも一定性を認める事の出來ないのは當然である。從つて吾々が全く同一の印象乃至經驗を得たとしてもこれを表現する言語樣式は言語によつて全く異らなければならぬ。大きく云へば諸言語の構造が異つてゐるのである、文法が同一でないのである。何處よりしてかゝる多樣性が起つたか、それは「未來の心理學者の解決してくれる大いなる問題」であらう。

言語の構造はかくの如く諸言語についてその横の廣がりと共に多樣なるのみならず、同一の言語に就ても時間の縱の軸と共に構造に變遷を來してゐる。英語はこれを遡れば、遂に希臘語拉丁語とも親族關係を有し、共に同一の祖語に發するものであるが、希臘拉丁の古語が自律語として著しい性質を示現してゐるにかゝはらず、今日の英語は母韻轉換による形態質の外は、孤立語の支那語に酷似した構造を有してゐるのは前に述べた所である。英語は本來かうした構造を有してゐたのではなかつた。序論に於いて少しく觸れて置いた如く、英語も古語へ遡るに從つて、次第に希臘拉丁語に等しい自律的傾向を漲らせて來るのである。換言すれば英語は時と共に、綜合的な自律語から分析的な孤立語へと近付いて來たのであつた。この綜合より分析への過程變遷が言語の進歩なりや否やは別としても、兎に角か

ゝる傾向が英語と同一の祖語を有する親族語の何れに就ても認め得られるのは事實である。例へば東方に於いて波斯語の如きは特にこの傾向が著しい。而して西方の英語、東方の波斯語がかゝる分析的傾向を取る過程に並行して、前置詞後置詞の如き「文法的道具」の類が非常に發達して來たのであつた。否或る場合には前置詞の發達が却つてこの孤立語化分析型化の第一條件であつたのである。即ち英語は始めの自律語より前置詞の類を有する接續語、語順による孤立語に傾いて來たのであつた。然るに孤立語の中心と目せられる支那語も、有史以前に屬する時代には現今の如き單音節ではなく、他の多くの言語が然るが如く、自らまた多音節語であり、形態質が（ㄷ）として意義質に服屬してゐた事が近來の研究に依つて次第に闡明せられてゐる。即ちこれも亦曾つては一の自律語であつた。のみならず現今においては「了」、「的」等の日本語の助辭に等しい形態質を發達せしめつゝあるにおいては、些少とは云へ一の接續語的傾向の芽をも萠しつゝある事は否定する事が出來ない。支那語が自律より孤立を經て現に接續語への進路を追はんとするかの如き有樣を示してゐるとすれば、接續語に屬する土耳古語及び同系統の芬蘭、匈牙利等の諸語は形態質が意義質に融著する事によつて自律語たらんとするかの如き傾向を呈してゐると稱する事が出來る。言語は現在横の廣がりについて自律、接續、孤立、種々なる構造を示してゐる如く、時間の縱の軸についても同一の言語は同一構造の形態に留まつてはゐず、またゐなかつたのである。

曾てかくの如き現象を見て、言語の最も未發達の段階は形態質としては「單純にして原始的」な語順の外を知らざる孤立語であり、次いで接續語を經て自律語に到達するを以て言語は最高の完全性に到達する事を得と信じ、かの英語波斯語の如きが始めの自律的性質を失つて接續語孤立語となり來るは從つて言語の墮落であると考へ、自律的傾向の最も著しい古代希臘語の如きを最も優秀な言語と看做して最も孤立的なる支那語の如きを最も劣等なる言語と見下し、一方また言語の構造樣式が時と共に變化するのは孤立――接續――自律の輪をめぐる輪廻の現象であると主張したのは舊派の言語學者であつた。しかし言語の構造それ自身は、しかく簡單に解決し得べき問題ではない。もし丁抹のイエスペルセンの云ふ如く、分析的傾向は綜合的傾向に優るとするならば、支那語は却つて希臘語の上に立ち、英語の孤立語化は、言語の墮落ではなくして却つて進歩であらう。また言語はその何れを取つても吾々がさきに述べた如く、何れの構造原理にも屬し得べき傾向をすべて多少ともに具へてゐるのである。時と共に構造樣式が變化するといふのはその中の基調となるべき傾向が變化若しくは交替する謂に外ならない。本質的に甲より乙、乙より丙への轉換若しくは飛躍ではないのである。たとへかゝる事實が認められたとしても、未だ世界の言語についても、それが完全なる自律より發して接續、孤立を經て再び完全な自律に歸着したといふ如き事實は目擊觀察せられた事はないのである。英語は自律語を脱して他のタイプに入つたと稱せられても、變易は接續孤立までに止まり、自律に發すと認められる支那語も孤立をへて接續に至らんとするのみである。一は自律――接續――孤立の道を辿り、一は自律――孤立――接續の道を踏まんとする。この三つの點を一の圓周上に描くならば、二つの言語の辿る方向はまさに正反對である。輪廻論者の云ふ如く、言語構造の進展の過程は必ずしも英語に見る如く、自律――接續――孤立の方向のみとは限るを得ないのみならず、未だその三つを完全に一周したものはないのである。これを目して輪廻と稱するは、三つ巴のあやを見てその各々を直ちに圓周と看なすに等しい過りと云はなければならない。

要するに言語は構造的に多樣である。唯に言語間に然るのみならず、同一の言語に就て時間的にもこれが認められ

る。この客觀的事實を輕々に價値判斷し、或は不用意なる他の先主的範疇又は觀念(輪廻の如き)を以て掩ひ、延いて實際の姿に歪みを加へる以前に、よく事實そのものゝ性質を見なければならない。吾々は必ずしもこゝに結論を急ぐ必要はない。觀察され整理されたる事實それ自身が結論となるであらう。

言語は意義質において言語活動の意義的材料的方面を表現し、形態質において言語の作用的骨格的方面が明らかにせられる。言語要素を意義質的價値から見たものが該言語の語彙をなし、形態質的價値より見たものが言語作用の樣式即ち所謂文法である。英語の foot, feet は純粹なる脚の意味として意義質の方面より見れば英語の語彙の一部を形成し、foot は單數、feet は複數の形として母韻の轉換による形態質的方面より見る時はまた一の文法の構成因子である。拉丁語の lupus は單に「狼」の意として見る時は語彙に屬し、單數、男性、主格にして、この資格において文中に作用すると見る時は、當然拉丁語の文法に屬する。動詞においては行爲內容そのもの例へば「見る事」の意味それ自身が語彙の方面に屬し「見る」の時稱人稱等が文法に屬する。換言すれば、單語をその文法的機能から抽象して考へたものが語彙をなし、文法的機能より見る時は文法を構成するのである。日本語の如きは、この英語拉丁語等の例に反して、言語要素の語彙と文法の兩面は各々別の音形を以て表現せられるのが常である。かゝる差異の由つて來たる所以は今まで述べた言語の構造樣式によつて已に明らかである。

文法と語彙は言語の內的機構を組織し、吾々の所謂內的言語の野に活動する言語の材料と樣式である。これに對して、外的に表出する手段としての音韻或は發音が存在する。音韻はその根を內的言語に下ろしつゝも、職として掌はる所は言語の外的表出である。故に音韻を言語の外的要素と稱する事が出來る。音韻と文法と語彙の三つはすべての言語に於ける不可缺にして且つ充分なる構成要素である。

第五節　文法の現象

言語の文法的機能は意義質に對する形態質の作用によつて遂行せられる。從つて例へば日本語或は英語希臘語といふ如き、一の續體としての或る言語の文法とは、その存するすべての形態質とその作用樣式とが、相互に矛盾排擊する所なく統合的に纏め上げられた總體である。形態質には、日本語において著しくあらはれる如く、意義質とは別個獨立の音形を有するもの、或は英語について見る如く、單に音韻轉換の關係的存在を保つにすぎないのも、又は語順に依存するもの、即ち何れもそれ自身の音形と稱すべきものを有しないものがあり、更に土耳古語に見た如く意義質に對して原則的に從屬的なもの、これに反して日本語、英語の後置詞(助辭)前置詞の如く比較的意義質より自由な關係に於いて立つものがある。吾々はかくの如き形態質の文章中に於ける機能的性質とそのあらはれ方に從つて、諸言語の構造を論じたのであつたが、今これら形態質を更に內容の方面より見て、名詞動詞の單數複數の別を示すもの、時稱の過去現在未來を明らかにするもの、或は一般に西洋語の名詞、亞剌比亞系諸語の動詞の男性女性を區別するもの、又は肯定を示すもの否定を投げるもの等があるのを認める事が出來る。英語の foot——feet の形態質は諸言語の構造を論じた際の機能的方面より言へば A.b のbであるが、その內容より見れば、脚の單數複數の別を示す。故に形態質はまたこれを全く別の立場に立つてその意味的方面より分類觀察する事も可能である。言語の文法を構造する

形態質の內容意味的方面にあらはれる右の如き現象を吾々は今文法の現象と呼ぶ事にする。

文法の現象は有形にせよまた關係的のものにせよ形態質の存在に依存してゐる。形態質の豐富な言語は從つて文法の現象が多樣であり豐富である。古代の希臘語の如き、今日の露西亞の如き何れもこの例である。所謂文法の豐富なる言語とはかゝるものを指すに外ならない。文法の現象は形態質の存在に依存してゐるが故に、一面、該當する形態質のなき文法の現象は存在しない、例へば日本語の名詞には、希臘語拉丁語或は佛蘭西語或は亞剌比亞語等の名詞(亞剌比亞語の如きは動詞の一部に於いても)等に見る如き、性の區別を示すべき手段乃至形態質が本來的に缺如してゐるが故に、日本語の內的言語には、品詞にあらはれる性別の觀念は存在しない。文法の現象が該當する形態質の存在に依存してゐる事は、希臘語にあらはれてゐる如き動詞の「希求」をあらはす形と「假定想定」をあらはす形との區別が、同じ系統に屬する他の言語(拉丁語の如き)にあつては失はれて二つは單一の形に合一してゐるが故に、この言語を使用する人々には右の意味的區別は想像すらも得せざるものとなり、比較的廣い單一の意味にしか解せられないやうになつてゐる事實によつても知る事が出來る。たとへ用法の複雜さによつて、本來の區別の俤は殘してゐても、形の單一性のために依然單一の文法の現象と觀ぜられてゐるのである。中には一旦かゝる混同混化が惹起せられながらも、後再び別の手續によつて元の區別が回復せられる事がある。今日の英語、獨逸語、佛蘭西語等の親族的共通祖語にあたる言語にあつては、「現在かくかくの動作をなし了へた所」の意味を有する完了形と、單に動作そのものゝ過程を示す形が混同せられて一時完了形が沒却せられた事があつたが、今これら三つの語は後、別個の形成又は言ひまはしによつて完了形を再興し、再びその區別をやゝ回復してゐる。動詞の所謂過去完了形に「持つ」の意味の動詞を添へた *I have loved* (英語、私は愛した)、*Ich habe geliebt* (獨逸語、同意)、*J'ai aimé(e)* (佛蘭西語)の如き完了形がそれである。かゝる再興は同じ系統に屬する他の多くの言語にも見る事が出來るが、中には一旦失はれたまゝ再びこれを興さず、今日に於いても尙完了形なるものを有しないものがある。こゝに於いては他の動詞形の用法の擴張によつてその意味は補はれてゐるのであるが、當該言語意識に對して特に完了形、若しくは完了形の代用として認められる事はない。

これに反して時に同じ形に合一しても、二つの意味的區別が特別の事情によつて維持せられる事がある。日本語の「行かぬ」は最後の「ぬ」nu が u を脫落して n となり次いで全體が今 〔ikan〕 即ち「ゆかん」ともなる一方、助動詞の「む」が「ん」となり、文語に殘る古形「行かむ」は今日讀誦に際しては同じく「ゆかん」と發音せられるに至つて、二つは同じ音韻形に落ちたのであつたが、一方は口語であり、後者は口語としては現代に屬せざる古形(の現代的發音)であるといふ特別なる事實に基づく意識に於いて充分區別せられてゐるのである。かゝる例は廣く世界の言語について容易に實例を增加する事が出來る。

文法の現象の數は一の言語の有する形態質の數と種類に比例する。支那語の如く、何よりも先づ語順を形態質とする言語にあつては、當然文法の現象も單純稀少であるが、中には驚くべく多數の現象と種類を擁してゐるものがある。文法現象の簡單にして單純なものも、別の手續によれば、複雜多樣なものゝ有する意味を再現し得ないのではない、西洋語の單數複數の區別は、本來その觀念を有しない日本語に於いても、新たに「ら」の着脫、或は「國國」の如く同語を反復する事によつて或程度までは表現する事が出來る。現代の如く西洋の文化との交涉の頻繁な時にあたつて

かくの如き用法は日本語の文法の一部を改造せんとするまでに至つてゐるが、一面如何にしても再現する事の出來ないものがある。希臘語、拉丁語、獨逸語、佛蘭西語、露西亞語に見る如き名詞の性の區別である。獨逸語においては名詞「山」は男性であり、「町」は女性、「家」「船」は中性である。日本語には如何にしてもこの文法現象は移しあらはす事が出來ない。出來ないのみならず移すことは無意義である。吾々がこれらの外國語を學ぶまでは想像する事も不可能であつた文法現象であり、事實又これなくしても充分言語活動を遂行し得られるからである。單複の區別は日本語の文法を或點において精確ならしめんとする所があるに對して、性の區別は全く移し得ないのは、一はそれに近き値を有する文法手段即ち形態質があるに對して、一は日本語にこれをあらはすべき手段が全く缺如してゐるからである。もし、日本語に冠詞なるものがあり、それが獨逸語、佛蘭西語における如く、男女(中)それぞれ別の形を取るとすれば、日本語にも適當なる無理を加へる事によつて、これらの言語の文法的性別をあらはし得たであらう。形態質の有無と文法現象の存否との間にはかくの如き深い關係がある。勿論性の概念或は觀念が現實性に對して重要な關係を有するものであれば如何なる手段を睹してもこれを再現するに吝なるものではないのは言ふを俟たない。

あらゆる言語の有するあらゆる文法現象をその意味合若しくは餘韻の別をも考慮に入れて通算すれば、その總和は殆ど無限に上るであらう。吾々は次に多くの言語にあらはれ、若しくはたとへ少數の言語に限られてはゐても言語學上比較的重要にして興味あるもの二三について稍々近くより考察を加へて見よう。

數の現象　こゝに云ふ數の現象とは、英語の man に對する men、或は動詞 do (爲す)に對する三人稱單數 does の如き文法にあらはれる單數複數の區別であつて、普通の數詞ではない。數の現象は、次に說く名詞(時に動詞)の性の如き、當該言語以外の言語意識に於いては全く無意義なる存在として映ずるものもある諸種の文法の現象中にあつて、最も合理的にして又現實性の高きものである。

普通に數は單數と複數に分たれ、一箇に對しては單數即ち例へば man 二箇若しくは二箇以上に對しては複數をあて、從つて複數は單數の n 倍であると考へられてゐる。同じ事物を或は一體的にまた統括的に、或は個別的に觀ずるのは言語言語の意識主觀の左右する所であり、同一のものが時には單數に、時には複數として取扱はれ、その間全くの一致は求め得られないにしても、本來人類一般に共通的な算へる事に多少ともに基礎を置かざるを得ない數の現象に於いて、複數は單數の n 倍であると見られてゐるのは一應非常に基礎のある事である。しかし嚴密に云へば、單數の單純なる n 倍としての複數はあり得ない。今假に日本語における「生徒ら」を生徒の複數として英語の pupil に對する pupils にあたるとすれば、已にこの「生徒ら」は決して單一の生徒の n 倍ではない。「生徒ら」は甲の生徒、乙の生徒、丙の生徒の集まつて構成する所である。即ち、全くの同一物ではなく、當該言語主觀によつて同一の種類範疇に屬すると認められるものゝ n 個の集りである。これを假に式示すれば、

生徒甲 ＋ 乙 ＋ 丙 ＋……＝生徒ら

の如くである。生徒甲と乙、丙、等は全く同一のものではないから、複數なるものは常に或種の微差を豫想してゐる。全く同一物の複數例へば甲生徒の n 倍は實際上のみならず、論理的にも不可能である。

この事情の一層明瞭にあらはれてゐるのは、英語の forty(四十) fifty(五十) 等に對するその複數形 forties, fifties

に於ける場合である。即ち forties, fifties は單に「四十」「五十」夫夫の n 箇の集りではなく、四十、四十一から四十九、或は五十、五十一から五十九までに至る所謂四十臺若しくは五十臺の數の總稱である。式にあらはせば事情は更に明白である。

40+41+42+……+49 = forties

50+51+52+……+59 = fifties

かくしてこの複數の下に一括せられたものは相互に「一」づゝの微差をあらはしてゐる。

獨逸語佛蘭西語等の西洋語には、或る個有名詞を複數形に用ゐて、彼に屬する人々、例へば家人家隷一切、或はその人のタイプに歸し得べき人々を總稱する事がある。ゲーテ Goethe を複數に用ゐて die Goethe とすれば、その家人、或は自らゲーテと自負する人々を統括的に意味した形である。資才に於いて到底比肩し得べからざる人々を總括して die Goethe といひ、佛蘭西語で les Périclès（ペリクレスの如き人々、自らペリクレスの才能を誇る人々）といふに至れば最初に掲げた複數的微差は益々擴大せられてゆく。しかしあまりに擴大せられて當該言語意識乃至主觀に於いて同一の範疇に統合し得ざるに至れば、言語は最早これらをまとめて如何なる複數に於いて表現すべきやを知らない。生徒と書籍、林檎とその味を加へて如何といふ如き問題は、全く數量なる唯一原理を以て推してゆく數學すら解決し得ないのである。言語は勿論これを表現すべき文法手段を有しないのが常である。これらは文法現象としての數の考察の外にあると云はなければならない。

動植物、微生物、或は物質の如く、著しく個性の減却せられてゐるものゝ複數はさきに擧げた場合に比して非常に純粹の n 倍に近付く。しかし決して n 倍そのものとはなり得ない。純粹の n 倍は單に論理上數學上にのみ認められた計算過程の範疇である。日本語は本來數の現象の稀薄な言語であるから、複數が純粹の n 倍か否かの問題に關しても與る所は一般に比較的少いのであるが、他の數現象の著しい言語には、斯の如き場合は一括して單數で表現する事も普通に行はれる。その根源的理由は別として今日英語の fish, sheep が何れも魚、羊の單複何れをもあらはす事の出來るのは、これらに特出すべき個性の乏しき事も一因でなければならないやうに思はれる。所謂集合名詞と稱せられるものはこれである。しかし個性の大小有無は視點の高下に依る。極めて高い見地よりすれば、人類も亦一括して單數に表現せられるのが常である、「人は死すべきものなり」の命題は man is mortal 或は homo mortalis est 即ち英語に於いても拉丁語にあつても「人」(man, homo) は單數であるのを常とする。換言すれば、複數は微差を通じて事實を個別性より見たものとすれば、單數は微差を減し、個別性を忘れてすべてを一體として觀じたものである。

然るに今の命題を日本語で表現した時の「人」は、吾々には特に單數であるといふ感じを與へない。英語には man は men を控へるが故に、また拉丁語もホモ homo は必然的に複數形ホミネース homines を豫想するが故に、何れも單數なりとの意識がけさやかであるが、日本語の「人（ヒト）」は特に複數形を豫想しなければならないといふ事はない。「人々」「人ら」は複數として「造られ見做された」形である。必ずしも「人」に附隨してゐなければならないのではない。即ち日本語はさきに觸れた如く、數の現象には本來冷淡なのである。數の觀念の明瞭でない日本語は特定の複數形を必要としない。從つて單複の對比が曖昧である。同一の形が單複の區別なく用ゐられるのが常である。或は本來單複の觀念すら存在しないと稱する方があたつてゐるかも知れない。和蘭のラツペルトンがこの點について、日本語の名

18789

詞は南洋諸語や支那語と同じく、數に關して單複の區別を有しないといつた（日本亞細亞協會紀要 Transactions of the Asiatic Socity of Japan 一九二五年、七八——七九頁）のはこの意味に於いて當然である。しかし彼が更に進んで英語の people（人々）cattle（家畜）は西洋人の觀念に於いては、文法的に單數であるが意味よりすれば、「人々」「家畜（所有せらるゝ家畜總體）」として複數であるといふ事情が日本語の今の場合にあたり、從つて日本語の名詞の第一義は、形は兎も角として、當然複數であると限つたのは、吾々が今述べた所に照して稍々過ぎた憾みがある。

しかし本來數の現象に稀薄で、或點では此れに對して無關心とも、中性であるとも見られ得る日本語も特に單か複かの明確な數的表現を要求せられる場合には、疊語法その他種々特殊の接尾辭を利用してその用を果すことも出來る即ち單なる「人」の中には廣く「人性」「人類」の意味もあれば、また複數の「人」とも單數の「人」とも或は特定乃至不定の「人」とも解することが出來、その何れかへの決定を普通は一文の意味に俟つか、或は全く決定を必要としない場合も多いが、特に「一」に對して「多」を顯著に表現せんとする時は一先づ「人々」と重ね、「人ら」「人たち」と後置詞をそへる。これらは原義において決して西洋の複數にあたるとは云ふ事が出來ない。たゞ現今の合理主義的傾向或は飜譯的傾向の下に次第にそれに近づきつゝあるのは事實である。

蒙古語滿州語の如き、日本語に近い構造を持つ言語には何れもこれに酷似した現象がある。この所謂後置詞をも有しない支那語は數に於ける「中性的」な所が最もよく表はれてゐる言語であり、數の決定は別に數詞を添へない限り前後文章の關係によつて決定せられる事すらも少く、個物に對しながら全般的な宣言を下すのが常である。

一方希臘語拉丁語或は亞剌比亞語の如き自律語は一語一語と數の表現に關する形態質とを引離す事が出來ない。希臘語で aner と云へば必ず一人の人、andres といへば已に二個以上の人といふ意味が當初より不可分離的に含まれてゐる。中性的な所謂一般數 Common number としては文法家が無理に析出した andr- があつても、勿論此れは實際の言語活動中に行はれ得たものではなく、話す人の心にもこの形は獨立な姿を取つて日本語の「ひと」の如くに存在してゐたものではなかつたであらう。數の一般性を基礎にする日本語とは丁度反對の現象である。これも自律語の特性の一つである。

即ち世界に行はれる言語の中には、常に單數に對して複數、複數に對して單數を常に豫想しなければならない文法の現象を有するものと、特にこの區別を必要とせず、却つて數の現象或はその觀念には本來文法的に無關心な日本語、支那語の如きものがある。一方は常に數の意識を有するに對して他方はこれに有しないのを原則としてゐる。たゞ算へる事は吾々の智的乃至實生活に重大なる關係を有し、數の觀念そのものゝその表現は極めて合理的な現象であるから、必要のある場合は、本來吾人の生れながらにして承けた言語の文法現象の一つとして「數」が存在しない場合にも、他の論理的合理的な手段を以てこれを表現する事がある。この合理的手段が常に反覆せられ、それが內的言語にこの新たに獲得した意味內容と共に定着する時は、この「數」も亦新らしい一の文法現象となり、言語の傳統（トライディショナル）の一つとなるであらう。傳統的から合理的（ラシヨナル）へ、而してそれが再び傳統（トライディショナル）の一部を構成するに至る過程は、言語の變化發達の上にも重要なる一の成素であり、この現象は近代社會生活の一般の傾向と合致して東西の言語に廣く反映せられてゐる所である。言語の社會性はかくの如き內的なる部分に於いても觀察する事が出來るのであるが、これは兎も角、數の區別を本來の現象とする言語にあつても、單複の區別がしかく合理的にのみ行はれてゐるのではない。曾ては合

理的であつたものが單なる傳統として言語活動中に殘存し、微弱なる作用を及ぼしてゐる事もあれば、新しく一の言語意識中に起た觀念の變化と共に他よりしては不合理と見られるものが、その言語にあつては第一義的な文法現象として活力を增進してゆく場合もある。言語は合理的存在でもなく、論理的體系でもない。今、單複の數を區別するを本來的に課せられてゐる言語について見ても、その名詞の中には複數のないものも少くない。複數を有しないものは、自身の性質上、個別化不能のものか（水、風、或は忠義、勇敢等の抽象性存在）、又は個別的價値のみとめられないために一くゝり（mass）として見られてゐるものである（魚虫）。風などは何れを取ても同じ形狀或は寧ろ無形であるから個別化せられる事が出來ず、日本語にも「風ら」「水ら」と云ひ得ないのは勿論、現に問題とせる數現象の强いもの、かの西歐語にも複數の「形」を取らないのが普通である。しかし何れまでを單複の區別を設くる限界とし、何れ以下或は以上を單に單複の何れかのみを以て表現すべしとするかは、當該言語自らの表象圈の相違によつて相異するが故に一概に斷定し去る事は出來ない。例へば拉丁語の如く、一見冷酷と思はれるまでに論理性の高い言語にあつては、「風、水」その他抽象的な名詞と雖もその前に數詞がつく時は勿論、單に文章法の簡單なる拘束の下にあるのみにても直ちに複數形を取り、意味よりも形・觀念よりも論理が重んぜられてゐる事が明瞭にあらはれてゐる。一箇の陣營は種々なる要素の合成なりとの論理的考察の下に、「陣營」を意味するカストラ Castra は已に複數形である。

日本語は本來數の制限を知らない「中性數」的言語であるから、右にあげた如き「ら、たち、ども」、或は「人々、國々」の如き重語法を用ゐる時は、中性數を却つて限定的に用ゐる事になり、從つてこの手續は相當個（別）性の著しい對象に限つて用ゐられる傾向がある。故に、ラツペルトンの云つた南洋語の事は今姑く別として、魚、虫等の如きは日本語に於いて「ら、たち」の後接する言語要素を取る事も出來なければ、重語法を用ゐる事もないのが普通である。重語法は特に個別性を要求する。「國々、人々」は、單なる西洋語の意味に於ける複數ではなく、各々の國、どれ〳〵の人、即ち英語で云ふ every 或 several の意味である。以下日本語のこの現象を假に單複の數現象と見做して少しく考察を進めるとすれば、

日本語の文法は、概して細かい無生物に複數を與へないと云ふ事が出來る。「家々、山々」はあつても、「本ら、文法ら」とは云はないのみならず生物でも虫魚鳥などは文法上數の取扱を受ける事が出來ず、（人）體の部分に對しても獨立的生存性なしと見る爲か「頭ら手ら足ら」といふ複數はない。「けものら」は時に聞く事があり、就中特に親しい家畜程多く、次いで召使と漸次タラツスの向上するにつれて、次第に數の取扱も叮嚀になつて來る。（「など」は何れの語にも適用される數的助辭のやうに思はれるが、西洋語の "etc." が數の表現に與るものと認められない以上、「など」も數的助辭と見ることは不可能であり、細かい無生物にはやはり單數（寧ろ中性數）しかない事になる）。「けもの」以上の有生物の中でも特に人間に厚く、ドモ（召使ドモ、舟人ドモ）タチ（舟人タチ、人タチ、友ダチ）は對者が自分と同等以下か、親しいものゝ場合に用ゐられる印であり、「犬ども」はこの用法の擴張である。孤立したものに薩摩のオイドン（オレドモ）がある。子供コドモは已に複數の形であるかも知れないが、王朝時代、枕草紙二十一、「すさまじきもの」には「大人なる子供どもあまた、ようせずばうまごなども這ひありきぬべき人の親どち書寢したる」云々とあるのを見ればこの時代の言語意識には「子供」が一體として觀ぜられ、「ドモ」の意識は特に著しくなかつた事が窺はれる。場所の意味のカタ（方、人ガタ、貴方ガタ）の用法、またハラ（原）ヒロ（廣）に關係のあるバラ（殿バラ、奴バラ）が同

じ用に供せられてゐるのは、かの羅馬のカエサルが微細の穀物を單數で表現したのに對して、畑に廣く散在する穀物を複數に使ひわけたのと相通ずるやうに思はれる。(Caesar ガリヤ戰記 B. G. I. 40 *frumentum* Sequanos, Leucos, Lingones subministrare, iamque in agris *frumenta* matura 穀物(糧食、單數)は……が供給し、且つまた野には穀類も熟し)。獨逸の東洋語學者ポンクラーが「松原(マツバラ)」を松の複數であるとしたのも全く無根な譯ではなかつた。「ラ」は今最も普通な數的助辭である。重に自分と同一のランクにあると認められるものに用ゐられる。語源的にも同類を示すのみのものであつたのであらう。「人ラ、我ラ、者ラ」等。今一つ日本語には個別的價値の最も著はるゝものに對して用ゐるかの重語法がある。自律語の如く、語の形(カタチ)と共生的に數の區別が附隨してゐるものには、この方法はあまりあり得ないが、語形が必ずしも數と不離の關係にあらざる孤立語接續語には殆と到る所に行はれてゐる方法である。「神」に對して「神々」と云ひ、「人」に對して「人々」と云ひ、「山」に對して「山々」と云ひ、「國」に對して「國々」と云へば、何れも著しい個別性を呈して來ないものはない。

こゝに「人」は「人たち、人ら、人がた、人々、(舟)人ども」の如く殆どすべての手段を利用し得るにかゝはらず、神に到つては、萬葉十七、「玉ほこの道の神たちまひはせむ、あが思ふ君をなつかしみせよ」の如く「神たち」の形があつても、一般に近代の日本語では「神々」より外に複數の構成法のない事である。この特定の語に特定の複數を限るのはメキシコの土語に於ても、「人」の複數は語尾の音を長音化せしめるだけであるが、獨り「神」に限てその他に語頭音の重複を行ふのに思ひ合される(Misteli)

人　單數 siwa-tl (女)　複數 siwā

神　單數 teo-tl　複數 te-teō

(-tl はメキシコ語の單數名詞の共通語尾)

數の現象に階級或はクラツスの意識が干渉する現象は、語形に「數」が共生する自律語の外にはよく見受けられ、印度のドラヴィダ、亞弗利加のバントウはクラツスによつて複數の作り方が異りアメリカのあるものには(シウアン語、Siouan) 生物にしか複數をみとめないものがある。日本語の複數的構成法も無性物から有生物、微小物から大形のものに至るに從つて複數的表現法が次第に明瞭になり、同時に精緻になつて來るのは事實である。また以上の助辭の外に、馬來語と同じく助數詞(〃人、〃尾、〃頭)を有する日本語には、クラスの觀念の最も明白なあらはれがある。

日本語のこれら複數の表現に數詞或は數量形容詞を冠する時、複數的構成法は直にやぶれのるが常である。國々を領す——三國に跨る。人々——一群の人(時に、一群の人々)。

これは數詞にふくまれる數量的概念が名詞の數の表現をもはや不要ならしめるからであらう。獨逸語の Zwei Fässer(二樽、複數)は別々の樽二つを稱するに對して、Zwei Fass〔Wein〕(二樽、單數形、〔の酒〕)は樽と樽相互間の區別は沒して樽は單に(酒の)目盛りたるに止まつてゐる場合もこれであり、一般に英獨の言語にダースとか幾人の人の如き數量名詞が複數を要しないのも同じ理であらう。英語は五ダースといふ時、ダースを單數にして 5 dozen といふ事も出來れば、複數にして 5 dozens といふ事も出來る。獨逸語にも船の乘組員が幾人といふ時など人を單數にして例へば 40 Mann といふのが普通である。

抽象的なものは一般的であり、具象的なものは個別的である。前者は數現象の著しい言語にあつては概ね單數に依

つてあらはされ、後者は多く複數に表現せられる。故に抽象名詞が複數として用ゐられる時には具體的の意味に移つてゐる事が多い。獨逸語でも「書くこと」das Schreiben を複數にした die Schreiben はそれに關連した具象的意味「手紙」の事であり、「記念」das Andenken の複數 die Andenken は「贈物」の事である。英語でも writing の複數 the writings は書類の事であり、佛蘭西語でも「生きる事」le vivre を複數として des vivres とすれば「生活のもと」の意となる。文法現象の維持のためには各語の意味をも省みない論理的な拉丁語においても、「勇敢(さ)、勇氣」を意味する virtus を複數に用ゐて virtutes とすれば「勇敢なる行爲」の意である。

かくの如く單數は、當該言語意識において一體と觀ぜられ、或はその含む個別性を姑く無視して一括して考へられた場合に用ゐられるのを常とするのであるが、一方對象が廣漠或は煩雜にすぎて一括の上に出で到底主觀がこれを一體として觀じ得ないものに對しては「已むを得ず」複數が用ゐられる事がある。かゝる場合複數は一時他の數現象との關係を絶して、單に「纏め難きもの」、「究め難きもの」の感じを抱かしめる。文化未だ發達せざる古代人には闇は廣漠としも究め難く、且つ怖ろしきものであつた。拉丁語が暗闇を複數として、テネブラエ tenebrae とのみ稱したのは、獨り拉丁人のみの原始半開宗教的な觀念が言語において表現を見出してゐるのではない。これと親族關係にある他の希臘語梵語等にあらはれるこれら古代人の共通意識の内的言語のはたらきに於ける反映であつた。今日佛蘭西語が闇の事を多く複數に ténèbres とするのはこの拉丁語の言語慣習或は物の見方の名殘である。さきに述べた日本語の原、廣に關係ある海原(ウナバラ)、松原(マツバラ)の「バラ」も、古代日本人のこれに相似た物の見方の名殘を言語の上に留めてゐるのではあるまいか。勿論カエサルの穀物に對する單複の區別もこゝに發してゐるのである。

名詞の複數は、例へば第一の生徒、第二の生徒等の集りが生徒の複數であつた如く、代名詞汝の複數「汝ら」、彼の複數「彼ら」も亦第一の汝、第二の汝、或は第一の彼、第二の彼の集りである。第二人稱、第三人稱には名詞と平行した數現象が行はれ特に問題とすべきものはないが、此れに對して第一人稱の「吾々、我々」は稍々事情が異なつてゐる。「我々」は他の場合の如く第一の我、第二の我第三の我等の集りではない。我は事實一個より存在しないからである。即ち「我々」は類似の「我」の n 箇の集りではなく、一箇の「我」に「汝」或は「彼」、若しくは「汝」と「彼」とを組合せたものである。故に「我々」には

(1) 我々 ＝ 我 ＋ 汝¹ ＋ 汝² ＋ ……

(2) 我々 ＝ 我 ＋ 彼¹ ＋ 彼² ＋ ……

(3) 我々 ＝ 我 ＋ 汝¹ ＋ 汝² ＋ …… ＋ 彼¹ ＋ 彼² ＋ ……

の三つの場合がある。單に日本語のみならず、何れの言語に於いてもこの事情は同一である。印度のドラヴィダ、ムンダー、南亞細亞のモンクメール、高架索(コーカサク)、亞米利加の或る言語、特に南洋の馬來ポリネシヤ語族は、「我々」を(1)の我々と(2)の我々、即ち汝らを含む「我々」と含まぬ「我々」に區別して夫々に特別な語形を與へてゐる。文法家は前者を包含形 Inclusive 後者を除外形 Exclusive と稱へる。第一人稱代名詞には、單なる複數の外に、「二人」の「我々」を示す特別の形、「三人」を示す特殊な「我々」、或は「四人」を示す特異な形があり、それ〴〵、双數、三數、四數形と稱せられてゐるのであるが、この包含と除外の二形の區別は印度のムンダー、モンクメール、南洋のインドネシア以外の南洋諸島語の双數、メラネシアの三數、ミクロネシヤ諸語の四數の「我々」に及んでゐる。

世界の言語の中にはかくの如く、第一の場合の「我々」と第二の場合の「我々」とを區別する形を有してゐるものがあるが、第三の「我々」、即ち「汝」と「彼」とを含んだ「我々」には未だ曾てこれに應じた特殊の形を與へてゐるものがないといふ。亞米利加の人類學者にして未開人種民族の言語に通じてゐるボアス Boas はこれを說明して、第三の「我々」は「我々」に於ける重要なる要素「汝」を包含する事によつて第一の「汝」のみを包含する「我々」と相通じてゐる、從つて何れの言語主觀も、敢て第三を第一から區別する必要を認めなかつたのであらうと云つてゐる。

何れにしても數現象的にやゝ特異なものを有する代名詞は一面名詞に比して單複の區別が嚴重である。「われ、わた(く)し」と云へば必ず單數であり、その複數からは明白に區別せられ、而も。その複數は常に正しく單數を豫想してゐる。形態質と意義質とを離す事の出來ない自律語は元より、日本語、南洋語の如くラツベルトンから數に關して區別を有しないと稱せられたものも、代名詞だけは、比較的嚴重にこれを守つてゐるのである。殊に第一人稱には包含除外の二形がある等、數の區別が最も嚴格なるべきが如くである。然るにこの代名詞には文法上は兎に角、意味において單複を轉換する事がある。演說、講演において講者が、自己を擴大して所說に力を添へ、或は自己を聽衆と同類の中に沒して所說を柔げ、責任を輕からしめんが爲に、「我々」を「我」の代りに用ゐる事は吾人の日常經驗する所である。キケロも屢々この方法を用ゐた。第二人稱にもこの現象が見られる事がある。今日獨逸語、佛蘭西語、英語の「貴方」を意味する Sie, vous, you は何れも語源的には「汝」の複數の形である。第三人稱にはかゝる事は極めて少ない。數の區別の嚴重な代名詞においてはこれらは何れも意識的の轉用である。

動詞にも數の區別のあらはされるものがある。佛蘭西語のイ(ル)マンジュラ il mangera（彼は食ふであらう）に對するイル・マンジュロン ils mangeront（彼らは食ふであらう）は、主語が複數になつたのに對應して動詞の形態質にも數現象的變化を來してゐる。かくの如き現象を動詞における數の現象と稱する。しかしこの數は一にその主語の數に承應依存するものであつて、動詞自らの數ではない。「集まる」といふ意味の動詞は必然的に集まるもの〻多數を要求し、その各々の主語の行ふ集合動作は從つて複數と考へられない事もないが、代名詞或は名詞の場合の數とは非常に趣が異なつてゐる。故に通常「數」といふ時には動詞を入れないのが普通であるが、今もし論理的に考へるならば、同じ動作が時間的に繰り返して行はれる事を示す動詞の形、即ち文法家の所謂イテラティイヴは動詞そのものゝ複數として扱つても或は差支へなさゝうである。古代の梵語にはこの形は何れの動詞についても自由に作成せられ、極めて活潑な形態質であつた。拉丁語にもやゝ狹い範圍においては行はれてゐたが、亞剌比亞語は三子音の中央のものを繰り返す事によつてこの意味があらはされる事は前にも少し觸れた所である。又この現象は今亡んで單に往時この現象の行はれてゐた事が語彙の中にのみ殘つてゐる場合がある。英語の chatter（無駄口をしやべる）獨逸語の Schwätzeln（ガタガタゆすぶる）などのL・Rはもとこの意味を與へる要素、即ち一の形態質であつたが、形態質としては死滅して、今は僅に昔の佛を語彙の中、動詞の意味の中に止めてゐるのみである。日本語にもツク(突)に對してツツク(啄)、ツヅク(續)、或はカク(掛)に對して、カカグ(掲)等の形が語彙現象として殘つてゐるのを見れば、曾て重韻法が動詞のイテラティイヴとして用ゐられてゐるのではあるまいか。萬葉集卷五、貧窮問答の歌に、「綿もなき　布肩ぎぬの　海松(ミル)の如(ゴト)　わわけ下れる襤褸(カガフ)のみ肩に打かけ……」とある中の「わわけ」も重韻法によつて「分け」のイテラティイヴを形成してゐるものと見る事は出來ないであらうか。もし然りとすれば、當時尙この方法が、時に利用

され得た一の證左とする事も出來よう。「わけ」に對する「わわけ」は詩人の効果をねらつた適切な技巧と云はなければならない。他にこれに類似した現象を多く有し得ざるによつて、確な事を斷言し得ないにしても、或はさきの複數名詞の重語法と觀念において相通ずるものがあるのではあるまいかと思はれる。今イテラティヴは日本語においても西洋語においても一般に忘れられ、その意味は普通の動詞に適當な副詞をそへてあらはされる。

數の現象は今までに述べたやうに單に單數と複數が對立してゐるのみではない。希臘語の osse、梵語の aks、（何れも「兩＝眼」の意味）のやうに、或る言語にあつては、その他に表はされる事物の二つ若しくは一對なる事を示す特殊の双數形なるものがある。この現象は、今日に於ては次第に消失せられて今存するものは極めて少いのであるが、曾て、希臘、梵語の古典語がこれを有してゐたのみならず、これらと同一語族、卽ち印度歐羅巴語族に屬する古代スラヴ語、ゲルマンの古語なるゴート語、或はセルトの古語、「或ひは愛蘭土語にも專ら普通の文法現象として行はれてゐたのであつた。拉丁語が古典語に屬するに拘らず、これを有しないのは、已に早くこれを失ひ去つたからである。しかしその根跡はなほ語彙の中に固着した形として所々に見出す事が出來る。獨逸語においてはそのバヴリア方言について今日もその餘喘を代名詞に保つてゐるのを見る事が出來るが、文章語としては十三世紀の頃に消し去られてしまつた。印度においては、さきの梵語はこれを有してゐたけれども、やゝ時代の下るプラクリツトや巴梨（パーリ）語はこれを失つてゐる。スラヴ諸語の中には僅に意義少なき一二の方言に殘存してゐるのみである。全く系統を異にする芬蘭・匈牙利語族の一族中にも最も文化の進まないオクテイヤク、ヴオグールの方言にはこれを認めることが出來るが、その他においては早く失はれてゐる。双數の現象が何故遲速の差こそ何れにしてもかく失ひ去られたかは當該言語團體の歴史的事情に依存する所であるが、その失はれる原因そのものは双數の性質自身の中にも認める事が出來る。

双數の意味する所は通常考へらるゝ如くに、單に「二箇」といふ意味ではない。單一に二を乘じたものに等しいのではない。二箇の中、一方が考へられる時には、他の一方も必然的に想ひ出されるといふ意味の二であり、「双」である。印度の神ヴアルナは常にミトラと相關的に考へられるが故に、ミトラ（Mitraḥ）を双數の形にして ミトラー Mitrau とする時は、「ミトラ神にヴアルナ神」卽ち Mitrah Varuṇaśca の意味となる程である。芬蘭・匈牙利語と同一系に屬するものゝ双數にもこれと全く同じ現象がある。父と母とは相關的に考へられるが故に、「父」を双數に置くも、「母」を双數に置くも共に何れも「父母」の意となる、たゞその刹那に意識の表面を占領するものが異なるだけである。父は母を豫想して考へられ、母は父を豫想して思ひ浮べられる、二つが相關の關係にあるが故に双數の形がある、双數の眞に意味する所は「一對の中における限り」の何物かである。眼の双數も單に眼二箇ではなく、一對として見られたる限りの眼である。從つて双數は兩手、兩足、その他自然の對象にせよ、人爲の制度習慣にせよ、常に二つ揃つて一體としてあらはれるものに對して用ゐられるのが原則であつた。これが單に何事に限らず二箇相伴つてあらはれるものにはすべて適用せられるに至つたのはその用法範圍に對して明確な限界を立て得なかつたゝめである。古代人の意識においては二箇相伴ふものは二箇が一體として觀ぜられ、これを二つの單位に敢て還元しなかつたからである。今日、或は古代においても文化の發達すると共に、双數が失はれて行つたのは、單位の觀念が明瞭となり、單數に對する複數の外に二單位のものを別個の一單位として取扱ふ必要をみとめなくなつたからである。（佛蘭西の心理學者、社會學者として有力なレヴイブルユール Lévy-Bruhl 氏の「原始意識」に對するこの考は、今言語學界一般の

認めてゐる所である)。亞剌比亞語の一派の所謂セミツト語族においても同樣の過程と現象が認められる。言葉を換くて言へば、双觀なる形態質が漸次文法體系から除外せられてゆくのである。しかしながら、以上吾々の考察して來た如き言語事情は全般において、一面、數の現象が言語の構造を比較的超越して、すべての言語活動に極めて合理的な存在を主張してゐる事實を反映してゐる。南亞細亞、南洋諸島の代名詞の三數、四數も今日相應する數詞「三」、「四」を添へた複數を以て次第に置き換へられんとする傾向がある。

文法的性の現象　佛蘭西語の文法はすべての名詞を男性と女性の二つに區別してゐるのは已に周知の事實である。卓子を意味するタブル Table は女性名詞であり、腰掛、床几の意味のタブレ Tabouret は男性である。女性の名詞には英語の the にあたる定冠詞ラ la を冠してラ・タブルとし、男性の名詞には同じくル le を冠してル・タブレとする。普通の椅子を意味するシエーズ Chaise は女性、これに對して大型の肘掛椅子のフオータウーユ Fauteuil は男性であり食鹽壺のサリエール Salière は女性であるに對して砂糖壺のスユクリエ Sucrier は男性である。佛蘭西語の名詞はその意味する事柄物體の如何なるを問はず常に男女何れかの性に分類せられる。性の區別は佛蘭西語の名詞から分離することの出來ない現象である。

名詞に性の區別を有するのは單に佛蘭西ばかりではない。佛蘭西語と非常に密接な關係にある伊太利語、西班牙語、葡萄牙語、何れも男女二つの性の別を何れの名詞に對しても課してゐる。更に獨逸語について見れば、男女二性の外に、中性が加はり、性の區別は三つになつてゐる、佛蘭西語のタブル「卓子」にあたるテイツシユ Tisch は男性、墨汁インキを意味するテイニンテ Tinte は女性、これに對して書籍にあたるブーフ Buch〔bux〕は中性である。庭の意味を有するガルテン Garten〔garṭəu〕は男性、臺所のキユツヘ Küche は女性、これに對してハウス Haus「家」、トール Tor「門」は中性である。男性女性中性、それ〴〵の名詞には各々異なる定冠詞を冠して性の別が更に明らかにせられる。獨逸語の名詞はその意味する所の何たるを問はず、必ず男女中三性の何れかに歸屬しなければならない。三性の區別は獨逸語の內的言語に課せられた、一の文法體系の壓力である。

かくの如く三性の區別をするものは獨り獨逸語のみではない。東歐羅巴の露西亞語、その西に位する波蘭語を取つても原則として同じ事情が行はれてゐる。露西亞語の卓子を意味するストル stol は男性であり、太陰、月を意味するルナ luna 星のズヴエズダ zvezda は女性であるに對して、太陽を意味するソンツヱ solnce は中性である。月を意味するものにはルナの外、今一つミエスイツ mesyac がある。ミエスイツは男性である。また「光、火」のアゴニ ogon' は男性であり、「蠟燭」のズヴイチヤ Sveča は女性であるに對して、「天」の意味にあたるニェバ nebo は中性である。露西亞語においても性の區別は、意味する所の何たるを問はず、一の名詞には必ず一の性が附屬しなければならない。男性名詞は自然の性別に於ける男性に關し、女性名詞は自然の女性に關するとは限らないのである。露西亞語には佛蘭西語、獨逸語、英語に見る如き冠詞が未だ發達してゐないから、名詞に冠して更に性の區別を明らかに示すべき特殊の形態質を見出す事は出來ないが、佛蘭西語、獨逸語にある如く、各々の名詞に對應若しくは附屬する形容詞、代名詞がそれ〴〵男女中の三性の變化に應じて自らまた形態質的變化をなし、形を變へる事によつて、名詞の性を看取する事は容易である。逆に話す人から云へば、名詞が男女中何れかの性に屬するのを意識するが故に、

形容詞、代名詞を男女中に對應せしめるのであらう。

かゝる性の區別は日本語には見出す事が出來ない。日本語には數の觀念が西洋諸語一般に比して稀薄であつた以上に性（ヂエンダー）の文法的意識に就ては皆無である。光とひ、月といひ、太陽といひ、星といふ、假にこれらに對して神話的に或は擬人的に、時に性の區別を腦裡に想ふ事はあつても、文法上存在の理由となるものは少しも持つてゐない。對應する形態質が全くないのである。本來その意味せられるものに性の區別を認める必要のない限り、文法上性（ヂエンダー）の區別を立てる事はなくとも、言語の成立は極めて容易である。例へば語族的に獨逸語と極めて親近の間にある英語は、前者が男女中の三性を立て、夫々に特別の冠詞と特殊の形容詞代名詞を對應せしめて、その區別は文法の第一義として儼然たる存在を主張してゐるに對して、全く性の區別を有せず、また認めず、しかも言語としては充分の發達を遂げ、如何なる思想を盛るについても、他の言語以上の困難を經驗してゐるのではない。英語も本來、獨逸語と同じく男女中の三性を保有してゐたのであつた。今日これを有しないのは、歴史の流れの中にこれを失つたのである。若しも性の區別が言語と思想について本質的に必要なものであるならば、英語も今日の如く全くこれを抛棄する事はなかつたであらう。換言すれば、性の區別は、今日に於いては殆どその意味を失つてゐるのである。性（ヂエンダー）の現象は言語に對して最早本質的な基礎を有せず、また合理的な存在を主張する事が出來ない。かゝる事實は、一見矛盾の如くであるが、いまだ性の區別を有する今日の佛蘭西語、獨逸語、露西亞語についても已に窺ふ事が出來る。

獨逸語、佛蘭西語、露西亞語も、遡れば、遠近親疎の差こそあれ、何れも一元に歸する親族語である。しかるに、この親近なる言語において、太陽を意味するものは、佛蘭西語ソレイユ soleil 即ち男性であるに對して獨逸語はゾネ Sonne 即ち女性であり、露西亞語は右に擧げた如くソンツェ solnce 即ち中性である。「月」に關しては、佛蘭西語露西亞語は女性のリュン lune〔lyn〕、ルナ luna を有するに對し獨逸語は男性のモント Mond を以てこれに應じてゐる。同一の物體が言語にあつて時に男性となり、女性となり、更に無生物的な中性ともなつてゐる。太陽、月、それ自身に性の區別がないのは勿論、これらの物の見方にも何ら一定した所がないのである。獨逸語は庭を男性とし、臺所を女性とした、佛蘭西語は卓子を女性とし、腰掛床几を男性とした。何故に庭が男性であり、臺所が女性であり、卓子が女性であるに對して床几が男性であるか、これに對しては合理的な解答を要求し期待する事は不可能である。單に言語的傳統によつて文法上かくの如く傳へられ、社會的强制或は必然性を以てかく行はれてゐるのみである。從つてかれを男性とし、これを女性として用ゐてゐるものは、事實その際、性（セックス）の其區別を意識し、一々興味を以て使用してゐるのではない、全く無意識である。ヂエンダーとセックスの多く塩合の矛盾撞着が尙もその存在を維持してゆくのは、使用するもの或は使用する際の無關心からである。獨逸語のヴツヘ Wache 佛蘭西語のサンテイネル sentinelle は文法的には女性であるに拘らず、示す所は男性の「歩哨」であり、同じく佛蘭西語のオルドナンス ordonnance も文法的には女性でありながら、意味する所は、「傳令、軍使」の男性である。ヂエンダーの區別がその內容と何等必然的の關係を有せず、極めて任意的であつて、使用するものに取つても必ずその何れたるべき事を敢て要するのではない事を示す例として、佛蘭西語から次の如き現象を擧げる事が出來る。

佛蘭西の南と北とは方言的に確然として大きい差異をなしてゐるので有名である。南方には古くからの特殊の文化と文學を背景とするプロヴアンサルの言語があり、今日、文章語として廣く行はれ一般の文化の機關語として作用す

るの生命は、日本の上方語の關東語に對する如く、北方の優越と共に次第に失はれてしまつたけれども、今なほ方言としては佛蘭西に重要な地位を占め、近年南方の詩人ミストラル Mistral がこれを文學語として再興し詩語として用ゐた事もあつた位である。南北の方言は、一が他に從屬といふ如き關係よりは、夫々同一根源即ち大羅馬帝國時代佛蘭西の地方に行はれた拉丁語から別々に獨立の道を辿つて發達變化して來た對立關係にある言語である。近世北方が巴里を中心として政治文化的に著しく優越して來ると共に、北方語は次第に南方に侵入せんとし、近世佛蘭西の中部地方は東西の線に沿ふて到る處、兩方言の相克地である。拉丁語のサール Sal「鹽」――男性名詞――から語源を引く北方方言は男性のル・セル le sel 著しくはル・セ lesé であり、南方方言においては一般的に女性のサ・サウ la sau となつてゐる。現今におけるル・セ(ル)、ラ・サウの分布は圖に示す如くであるが、北方ル・セ(ル)の次第に南下しつゝある事は、東西に引く線が中央に於いて著しく下垂してゐる事によつても知られる。たゞ東方においては南下するル・セルを支へた南方ラ・サウは、遂に語形はそのまゝとして性だけをかへてル・サウ即ち男性の南方語たるを餘儀なくせしめられ、西方においては、同じく南下するル・セルを支へた南方のラ・サウは性は維持し得たけれども語形は置換せられてラ・セルなる混血兒を生んだのである。かくして今佛蘭西には鹽を意味するものには、男性のル・セ(ル)、ル・サウ、女性のラ・セル、ラ・サウの四つがある。

何れも「鹽」を意味するにおいては、少しの差異もなく、又性の相違によつて鹽に對する見方が變化したのでもない。特に西方、東方の兩端地方には、本來の男性語形が女性語となり、本來の女性語形が男性語として取扱はれるに至つてゐる。性の轉換は何ら本質的な作用を言語活動に對して致すものではなく、ヂエンダーは數の現象と異なり、傳統的(トラディショナル)であつて合理的(ラショナル)な文法現象ではない。

從つて性は多への場合、變化なく傳へられるのを常とするのではあるが、又時と共に變化するを除外すべき理由を有してはゐない。拉丁語はサール即ち男性であつたものが、南方佛蘭西ではラ・サウ即ち女性となつたのも已に時の流れにおけるヂエンダーの變化である。ヂエンダーの變化は全く外的な事情によつても行はれる。佛蘭西語の夏を意味するエテ été はその語源にあたる拉丁語アエスタース aestas の示す如く本來女性の名詞であつたが、他の春秋冬にあたるプランタン printemps オートンヌ autonne イヴェール hiver が男性名詞であるために遂に自ら男性化したのであつた。のみならず、佛蘭西語の祖語たる拉丁語は男女中の三性を有してゐたものであつたが、それが漸次佛蘭西となるに及んで、中性を全く失ひ、その大多數を男性の部に編入したのであつた。こゝに極めて大きいヂエンダーの變化がある。獨逸語の水曜日の意味のミツトヴオツホ Mittwoch も、その構成の最後の要素ヴオツホ Woch はヴオツヘ Woche「週(間)」なる女性名詞であるが、他のすべての週日が何れも男性であるために、自らまたそれにひかれて男性となり、ヴオツヘ Woche 女性名詞たる事を聯想せしめる最後の e を失つてヴオツホとなつたのである。これらは變化の原因の明らかに知られてゐるものである。吾々の不知の間に行はれて、その原因と還境を發見若しくは想像する事も出來ないヂエンダーの變化も少くはない。ヂエンダーの多くはその名詞と必然的の關係を有せず、多

くの場合單に冠詞形容詞に男女(中)の區別があらはれるだけによつて維持せられてゐるのである。佛蘭西語のミニュイ minuit が「眞夜中」が男性であるとするのは、これに冠せられる冠詞ル le (le mi nuit)であり、これに後續する形容詞の形、例へばプロフオン profond「深き」の女性形プロフオンド profonde である (le minuit profond「深々たる眞夜中」)。テル terre「土地、大地」をして女性名詞たる事を明らかならしめるものは、これに冠せられる冠詞ラ la (la terre)であり、これに後續する形容詞、例へばオート haute「高き」(男性形、オー haut)である(la terre haute「高き土地」)。ミニュイ、テルにはそれ自らにおいて、男性たり、女性たるの必然性は今日の佛蘭西語の言語意識には認められないのである。即ち、獨逸語、佛蘭西語、その他の諸言語におけるヂエンダーの區別は、單に文法上單語を幾つかに分類したにすぎない。この意味においては諸多の言語についても亦、同樣の現象がみとめられる。

高架索の一小部に行はれるタツシュ(Tush)語は、名詞をその意味に從つて有情物の男女性と無性物の三性に分ち、それ〴〵に對して特別の形態質として多くの接頭辭を與へてゐる。濠洲南端のアンダマン島の土語は名詞を同じく有情物と無情物の二とし、前者を更に人に關するのと、然らざるものとに分類してゐる。北亞米利加のインデイアン語の一つアルゴンキンも亦、有情無情の二つに大別してゐるが、人類の肢體の名稱が無情物とみられてゐるに對して、動物のそれが有情物に算へられてゐる如き奇異な文法的分類も行はれてゐる。事實上人類の肢體が無情物と思惟せられてゐるのか、或は單に佛蘭西語、獨逸語に見る如き文法上の傳統的現象に止まるかは明らかではない。北亞弗利加に廣く行はれるハミツト諸語よ更に奇な分類を行つてゐる。これらの諸語は、その名詞を意味する所の價値的高下に依つて二つに分ち、價値高き方には人名、至大なる或は重要なる事物、及び「雄」の範疇を含み、價値低き方には物の名、小なる物件、或は「雌」が含まれる。時には第一のものを複數形とすれば忽ち第二の類に屬するものとして取扱はれる如き奇異な文法的規約が行はれる事がある。男の胸は女のそれに比して小さいから文法上、男の胸の名稱は女性であり、女のそれは男性である。亞剌比亞語の一派、所謂セミツト語族は、すべての名詞を今日の佛蘭西語の如く男性女性の二つに分つのみならず、動詞の上にも男女二性の區別がある(前文參照)。拉丁語、獨逸語、露西亞語の如く、男女中の三性を有するものとしては、また南亞弗利加のホツテントツトの諸言語をあげる事が出來る。たゞ今まで考察した言語にあつては、各の單語が何れの性若しくは分類の單位の一つに屬さなければならないに反して、ホツテントツトの單語は何れも三つの性を體する事が出來るのが著しい相違である。中性(又は共通性)の時は物その物を何らの副次的意義或は意味合なしに表現し、女性とする時は幾分輕んじたる男性とする時は高めたる意味合を付して表現せられる。例へば水は中性の時は單に「水」、女性の時は「用水」(洗ひ水、飲み水)であるに對し、男性の時は「大水、積水」(河湖等)の意味である。

名詞の文法的性分類には即ち、(一)無情、有情によるもの、(二)人性たるや否やによるもの、(三)判斷價値の高下によるもの、(四)に男女二性(ヂエンダー)の區別によるもの、(五)男女中三性(ヂエンダー)の區別によるものがある。ホツテントツトの如きは(五)の男女中の三性別に、(三)の價値の高下によるものを合せたものであり、タツシュ語は、(一)の有情無情或は有生無生による區別の外に、(四)の男女の性(ヂエンダー)の區別を合せたものである。佛蘭西語の祖語拉丁語、更にその祖語なる所謂印歐原語(後段參照)のヂエンダーも本來有生無生の二つを分ち、有生を更に男女の二性とし無生を中性としたものであつた。佛蘭西がこれを二性にしたのは拉丁語――佛蘭西語の變化であり、獨逸語がこれを今日に維持してゐるのはその

「已に無意義なる」保存である。英語は全くこれを破棄し去つてゐる。

併し今日無意義と化したヂエンダーも、その當初にあつては全く非合理的なものではなかつたのは當然である。タツシユの如き、アルゴンキンの如き、ハミツト語の如き、何れも文法的分類とその意味の間には未だ充分なる契機も存してゐる。印歐原語においても原則として無生物は中性、有生物は更にこれを文法上男女の二性に分つたのであつた。「水」、「火」「夢」等を意味する語が時に男女何れかのヂエンダーを以てあらはれてゐるのは、それが、作用の方面より見、或意味において擬人視せられたからである。「水」に關しては、單なる物質としての水と作用としての水は、夫れ〳〵別の單語を以てあらはされ、前者は中性、後者は女性である。「火」についても全く同じ事を云ふ事が出來る。人間を思ひのまゝに壓迫する「夢」は、一の力と考へられ、夢の內容そのものは中性の名詞を以てあらはされてゐるに對して、すべて男性を以て示されてゐる。拉丁語、希臘語、何れも男性の「夢」を中性の「夢の對象、內容」に對立せしめ、未だ印歐原語の儀を傳へてゐる。(果)樹はすべて女性の名詞で表はされ、それに實る果實はすべて中性である。雨を注ぐ「天」は男性であり、五穀を養ふ「地」は女性である。印歐原語のヂエンダーには、この言語を用ゐた古代人の原始的な宗教意識が反映してゐる。性の區別も亦、本來に於いては決して無意義な文法的存在ではなかつたのである。

その後、文化の進展と思想の進歩に依つて、次第に具像より抽象に向つて思考作用が發達し、事物を個々に於いてよりも、論理的な連續統一において見るに堪える事を得ると共に、原始的な宗教意義に發するヂエンダーの區別は最早昔日の價値を失ひ、こゝに單なる傳統としてのみ傳へられる第一歩が始まり、遂に續いて今日に及んだのであつた。しかし論理的には無價値とはいへ、文法上今尙存立する以上はこれをして合理的たらしめんとする作用の起るのは當然である。西洋の近代語において、文法の性が自然の性と比較的合致した場合がみとめられる事實の一部はこの意味に發した變改に由來してゐる。拉丁語の中性名詞ユ！メントウム jumentm「駄獸」が佛蘭西語となつて女性名詞ミ化したのは、その意味する所が「牝馬」となつたからである。また中世一時女性の取扱ひを受けてゐた佛蘭西語のプロフエト proplète「豫言者」、パープ pape「羅馬法皇」が今日何れも男性名詞となつてゐるのは、豫言者、法皇自身の意味から來てゐる。かゝる例は他にも數多く見出す事が出來よう。元來男女何れの性をも帶した拉丁語のルプス lupus「狼」が後、新たにルパ lupa なる形を構成してこれを專ら「雌狼」の意味にあて、元のルプスは全く雄狼に限つたのは、セツクスによるヂエンダーの精密化である。職業或は地位を示す名稱には、從來男性名詞のみで少しも痛痒を感じなかつたが、最近婦人のこの方面への進出を試みるものが次第に多數となり、從つて從來の如き男性名詞のみでは不自由を感ずるやうになつて來た。醫師、教師等の數的に限られた一部の職業については、日本語で女醫、女教師と云ふ如く、一つ一つに「女……」を添へ、その特殊なる事を明らかにするのみで充分であつたが、今日の如く、殆どすべての事業に正常に掌はるに至つては、特殊なる女を意味せずして然も女性なる事を明らかにする名稱を造らなければならない。佛蘭西語のルワ roi「王」(男性名詞)に對するレーヌ reine「女王」(女性)、メートウル maître「主人」(男性)に對するメトレツス maîtresse「女主人」(女性)の如く已に男女兩形の存してゐるものもあるが、醫師即ちメトサン médecin の如く自らに對應する女性形を有しないものも今尙多く、佛蘭西語の四分の三の名詞は文法的ヂエンダーの區別によつてセツクスの差をあらはす事が出來ない。已むを得ず、「女……」の方法によらなければなら

ぬ。佛蘭西の文學者レミ・ド・グールモン Remy de Gourmont が「文體論」において「佛蘭西語の單語に女性形を與へる事は、人權論よりすれば正書法(オルトグラフ)(文字遣ひ)の改正よりも重要である」といつたのはこの事に外ならない。

性(ヂエンダー)は傳統的な文法現象の一つであり、一の言語的體系である。これに對して、その言語を使用する人々の精神志向に從ひ、大小遲速の差こそあれ、自ら合理的と信する方向に向つて是正を加へんとする整理作用がある。はじめの合理的基礎を失つた性(ヂエンダー)は、殘存する傳統と新たなる合理主義の相爭ふ場面である。現在においては同一ヂエンダーの表現はあまりに多くの手段によつてゐる。諸尾によるものあり、全く別の語形によるものあり、而もその語尾、語形も一にしては止まらない。換言すれば、同一文法現象に對する形態質が一定しないのである。一定したる理想の狀態を吾々は近年新たに造られた人造語イド Ido に見出す事が出來る。ホモ homo は單純に「人」そのものを示し、それに -ulo を付してホムロ homulo とすれば「男」-ino を添へてホミノ homino とすれば「女、婦人」である。-ulo, -ino はすべての名詞に對して不變である。イドのヂエンダーに關する形態質は一定してゐる。言語としてはこれが理想の狀態であらうと思はれる。自然に行使せられ、發展する言語には未だこゝまで到着したものを見ない。

數の現象は言語に於ける比較的合理性に富む部分であり、性の現象にはこれに反して少くとも現在にあつては非合理的な所を暴露してゐる西洋の諸言語の如きものがある。文法の現象は或る言語に對しては本質的な要素を構成するに拘らず、他に於ては極めて副次的な要素を構成するにすぎないこともある。のみならず同一の文法現象も、横に多くの言語に互つて濃淡強弱樣々に分布し、一定の姿を呈し難いのみならず、同一の言語についても縱の軸と共に時間的に種々の變化を蒙つてゐる。文法現象は形態質に附隨する簡單なる意味と作用の體系にすぎないが如くであつて、しかもこれを近くより考察するならば、極めて多くの困難なる問題を含んでゐる。

例へば普通動詞について常に口にせられる所の能動受動の現象である。「甲、乙を打つ」は能動態であり、その受動態「乙、甲に打たる」は「甲、乙を打つ」の反對である。而してさきの一文において客語であつたもの(乙)は、第二の文章では主語となり。甲はこゝにはその動作の發源地として別の形において指示せられてゐる。第一の文と第二の文とは形こそ違へ、意味と價値においては何等の相違はない、二つは自由に代替し得られるものである。これが普通の文典のにあらはれる能動と受動の區別についての說明である。しかし、嚴密な意味においては、一の數學式 a=b も b=a と全く同一であることは認容せられない如く、或はまたそれ以上に、言語における能動受動の區別も、單に形の上の差異のみではないのである。「甲、乙を打つ」と「乙、甲に打たる」とは單に主語が形式上轉換してゐるのみならず、この轉換とともに立言の中心も移動してゐる事に注意しなければならない。「甲、乙を打つ」において立言の中心を占め、表現の重點となつてゐるものは甲であり、すべては甲の立場に據り、甲の立場を中心として展開せられてゐる。「乙、甲に打たる」は、乙をこの立言の中心とし、すべては乙の立場を中心とし、この利害を第一とした見地に據つて表現せられてゐる。即ちこゝの文章には第一、重點の相違若しくは移動がある。

甲は乙に作用を加へるものであるから、今打つ事も可能であり、これを將來にのばし、或は取消すことも亦不可能ではない。これに反して作用を受ける乙には、かゝる選擇はゆるされず、打たれてはじめて「乙、甲に打たる」であ

る。乙は打たれる事を將來に延ばし、或はこれを取消し、若しくは現在この瞬間に打たれる事を規定する事は出來ない。乙にとつては、打たれた刹那に「打たる」が成立し、これを過去にして、「打たれた(り)」とする事が可能なばかりである。未來の「乙、甲に打たれんとす」は乙の立場から云つたものではない。觀者の立場である。打つものにはその動作作用に對する規定を變改中止するの力あるに對して、打たれるものは動作に對しては無力である。甲には作用について、意志の自由が認められ、乙にはそれが拒否せられてゐる。能動と受動には第二、意志の自由の有無の差異がある。この二つの相違の外、引續いて第三として、打たれてはじめて成立する「打たる」は已にその折には打つ動作(の初發)が完了してゐる事を豫想する。これ英語等に受動形が「あり」の動詞即ち be に完了形分詞(或は「過去分詞」)を使用する所以であり、過去分詞がそれ自身で「……せられたる」の所以である。日本語にはこの第三の點はあまり重要な契機を構成してはゐない。

新たなる例を取つて、「甲、乙を見る」なる文を考察するならば、一見して直ちに、文は能動形であり、乙は甲の作用を受けるものなることが考へられる。しかしこの場合、「見る」は「打つ」と異なり、乙が他方を向きつゝあつて全く甲の「見る」作用に無關心な事がある。却つて見る甲が、乙の映像によつて網膜を刺戟せられ、乙の作用を受けるのが事實としての觀察である。「見る」作用の結果を蒙るものは甲自身であり、作用は甲より發して甲に歸つたのである。しかも、甲は、乙が現に目前に存在する以上、自ら見る作用を將來にのばし、取消しを敢てする事は出來ない。これを「打つ」の結果が、對者の上に實を結び、打つ作用が甲によつて自由に規定せられたのに比すれば能動よりもむしろ受動と稱せざるを得ない。「甲、乙を見る」は「甲、乙に打たる」と意味と價値において同一である。

しかるに、「甲、乙を見る」はこれを翻して、「乙、甲に見らる」とする事も出來る。「見る」についての立言の重點は乙である。乙は見る作用を受ける事が豫想せられる、乙自身これを自覺するや否やを問はず、第一の文におけるが如くに、「見る」作用に付して冷淡である事は少くとも形式上許されない。且つ乙は「見る」作用の規定を左右する意志の自由を持たない。「乙、甲に見らる」は「甲、乙を見る」に對して明らかに受動である。「甲、乙を見る」は「甲、乙を打つ」に比して受動であり、しかも、「乙、甲に見らる」に對しては能動である。能動受動の區別は決して明晰に打建て得らるべきものではない。「家を燒く」「蠶絲工場燒く」、「甲軍やぶる(敗)」「甲軍、乙軍をやぶる(破)」の「燒く、やぶる」の二つの動詞を、それ自身において他動とすべきか自動とすべきか、遽に決定し難い如く、能動受動の區分も亦、深くこれをさぐる時は極めて薄弱な基礎の上に立つてゐる。「生む」に對する「生ま＝る」は今、自らまた立派な能動形である。

能動受動の區別を明確に立てる唯一の方法としては吾々の問題とする形態質を標準とすることであらう。日本語ならば、「る」、「らる」、及びこれに對應する古事記萬葉の古文にあらはれる形(ゆ)、近世の口語の形がこれである。たゞ、そのためには言語本能において受動の形態質たるの意識が明瞭でなければならない。生む生まるの如きは已に文法を去つて語彙に入つてゐる。「る」がこの意味の形態質として活動しないからである。

直接作用を受けるものを受動の主語とすると考へられる「甲、乙に打たる」の外、日本語には今一つ間接に作用の影響を受けるものを主語とする受動の一形がある。「彼は父に逝かれ、妻に死なれて困惑せり」に見られる「逝かれ」「死なれ」の如き所謂自動詞の受動形である。「逝き」「死ぬ」の直接の作用を遂行するものは自己以外のものであつて、自

らはたゞその利害の答を受けるだけである。言葉を換へて云へば、父が逝き、妻が死するのは彼の利害關係の野の中に於いて行はれたのである。彼がこれに關心を持つが故に、逝きし父、死した妻が意志しなかつた作用を受けざるを得ないのである。

自己以外の人々の自己の意志の圏外にあつて行つた事件の結果が自己の利害に影響する。日本語のかゝる受動法は、他の多くの言語の表現に比して極めて特殊な色彩を有するものであるが受動の形態質「る、らる」が同時にまた、他人とその動作に對する尊敬の意を示すものとなるのは、かゝる利害の關係からではあるまいかと私は思つてゐる。日本語の古き時代には、未だ「る、らる」の用法が歴史時代におけるが如く、受動と尊敬の二つに明瞭に分割せられず、直接にせよ、間接にせよ、兎に角自己に或る作用影響の及ぶものに「る、らる」の形態質が對應してゐたのであらう。言語は時代と文化の進展と共に、その體系が分化し且つ精緻となり、次第に整理せられてゆくものである。

梵語希臘語には、或る動作行爲が行ふものゝ利害に關することをあらはす動詞の一形がある。梵語では「犧牲を(神に)供する」は普通にヤジャティ jajati (三人稱單數) であるが、犧牲を供するもの自身が、それによつて利害關係を好轉せしめられんことを請ふ場合には、ヤジャテ jajate とする。希臘語においても、テュオー thyō「私が犧牲を供する」とテュオマイ thyomai「私が(私のために)犧牲を供する」は全く同じ關係に立つてゐる。ヤジャテ、テュオマイの形を文法家は中聲相 (middle voice) と稱する。同じく希臘語のニズドー nizō (古代希臘語の z を以て寫される音はホメーロスの時代には〔zd〕の音價であつた) は單純に「私は洗ふ」、即ち能動の形であるが、その中聲相ニズドマイ nizomai は「私は私のために洗ふ」、即ち或る時は自らを洗ふ事にもなり、これに「手を」なる目的語ケイラス kheiras がついて kheiras nizomai となつてゐる場合は、「私は(私のために)手をあらふ」、換言すれば「自分の手を洗ふ」意味となる。かゝる能動も中聲相も洗ふものは自らであり、自らが動作の規定者であり、他人の意志に左右せられる所がない。何れも能動的であり、所謂受動ではない。中聲相も亦能動の一つと稱すべきである。この中聲相と日本語の「父に逝かれ、妻に死なれ」は利害關係においては共通する所はあつても、二つは本質的に決して、同一とする事は出來ない。

かゝる文法の組織が梵語、希臘語の本來的な動詞體系であつた。所謂受動はなかつたのである。後、中聲相の利害の一面のみが强調せられ、動作者が必ずしも自己自身なる事を敢て要求せざるに至り、「自分のために洗ふ」——「自らを洗ふ」即——「洗つて貰ふ」——「洗はれる」、即ち中聲形より、そのまゝ受動形が出て來たのであつた。受動は後の發達である。受動には動作者はあらはれない。從つて受動形は動作者を明らかにせずして、單に動作そのものをのみ述べんとする時に用ゐられた。もし近世語の如く、或行爲が「……に依つて」行はれ、動作者が明らかにあらはされる場合には當然普通の能動を用ゐたのである。受動形は本質的には第一に「非人稱的」であつた。拉丁語のディーコー dico「私が云ふ」に對する受動形はディーキトゥル dicitur 直譯的には「彼が、それが云はれる」であるが、本來の意味は「……と云ふものがある」、「……と世間では云ふ」であつて、日本語の「が偲ばれる、と思はれる」の如く、動作者を明示しない表現である。動作者を明らかに示して受動を用ゐるのは、西洋近代語までに至る言語現象の改變の結果である。今主語は無生有生、何れを問はない。表現法が非常に抽象化せられてゐるのである。日本語も今日、西洋文化の流入と共に、西洋語に酷似した受動形が使用せられ、無生物を主語としたものが次第に發達してゆく傾向がある

が、本來は特別な場合を除き主語は有生物、殊に高等な有情物であるのが常であつた。山田孝雄氏の言葉を藉りるならば、「日本語の受動は精神性」である。氏はこれに對する西洋の受動は本來非精神性をも含包すると云つてゐられるが、西洋の受動は本來非人稱的である。例へば獨逸語の踊る tanzen（tantsen）は、我踊る、彼踊る、汝踊る、等常に或る人稱が附せられるのであるが、これを受動として用ゐた文章、例へば Oben wira getanzt は直譯すれば「上に――踊られる」であるが、眞の意味は「上には踊りがある」、踊るもの〻何者なるやは全く度外に附して、たゞ踊る事を陳述するのみである。即ち受動形の非人稱的である事は今日においても尙これを認める事が出來る。タンツエンは自動詞である。よく一般の文法論には西洋の自動詞には日本語の「死なれ、逝かれ」に反して、受動形なしと云はれるのは全く事實にあたつてゐない。

所謂時稱にも文法の現象としては種々な問題がある。日本語の助動詞は意味によつて過現未各々に分たれてはゐるが、所謂過去の助動詞必ずしも過去を示さず、現在の助動詞必ずしも現在を示すのみとは限らない。「ぬ」即ち「な、に、ぬ、ぬる、ぬれ、ね」は過去或は文法によつては過去完了の助動詞と稱せられてゐるものであるが、「平相國太政入道平清盛が一生こそ心も詞も及ばれね」の未尾「ね」に嚴密に云つて時稱の意味があるとは云はれない。「亡びにしこそ哀なりしか」の「しか」（き）と同じく、單に特殊な心理狀態の表現である。或は詠嘆であり、或は回想追憶である。山田孝雄氏、日本文法論また日本文法講義には所謂時の助動詞なるものは廢せられ、何れも用言の統覺作用の運用を助くる複語尾とせられてゐるのは理由あり興味ある見方である。こゝに複語尾といふのは、助動詞は元來用言の活用の發達離立したものにすぎず、且つ未だ自ら獨立の力なきもの〻意に外ならない。而して從來過去に關する助動詞とせられたものは、こゝでは回想或は陳述の確かめをあらはす複語尾とせられ、これらの相似た機能に關する複語尾が多數に存在する中にも、自ら意味合上感情の高下濃淡による差異が認められる。現在形に關しても、それが近き未來を示すことは常々經驗する所であり、過去用法としては普通文法に「歷史現在法」なるものさへ立てられてゐる位である。所謂時の形態質の性質と機能に關しても問題は多い。その他人稱の問題、數詞の問題、否定法の問題、助辭の問題、延いては品詞の問題等、言語學として言語現象上取扱はなければならぬ問題は多い。簡單なる概論の到底よく盡す所ではない。何れにしても、言語現象を見んとするには、從來の文法文典の絆を脫して、自由な見地に立つて嚴密な批判を試みなければならぬ。日本語になき現象と雖も一應考察する事は、日本語の諸言語中の位置と性質を理解するに極めて有力なる手段たるは更に云ふを俟たない。日本語に關する興味ある議論は多くかくの如き比較と對照によつて得られたのである。たゞ、今までは比較の範圍が時間的に空間的に狹小であつたために議論またおのづから狹小たらざるを得ないのであつた。

最後に一言すべきは言語と論理の關係である。從來言語を論理の見地より見、論理の立場から整理せんとしたものは多い。文法は言語の論理を書いたものであると考へられた時代もあつた。しかし吾々が今考察した性或は數の如く、論理的には時に不要なものも、言語においては大いなる勢力を揮ひ、動かすべからざる存在を主張してゐるのである。論理の範疇と言語の範疇とは必ずしも一致しない。

第六節　語彙の問題

次に言語單位について簡單に述べて本章を終る事にする。語彙は意義質として見た言語單位の集まりである。言語單位には支那語日本語の「人」「ひと」、「犬」「いぬ」の如くそれ自身即ち意義質なる事が明瞭にあらはれてゐるもの、土耳古語の如く意義質と形態質との接續或は分離の關係がこれに比して稍〻不明瞭なるもの、或は自律語に屬する希臘語の例へばパイデウオー(私が教育する)の如く意義質と形態質が不可分離的に接合して、言語單位、即ち所謂單語の機構を破壞せずしてはこの二つを分割し得ないものがある。支那語の如きも一語一語に於いては純粹なる意義質であるが、これが文中にあらはれる時は、文章法的規制によつて、さきに考察した如き無形の形態質を受けるのである。從つて文章法における場合に於いては支那語の形態質も意義質内に潜在勢力として存在し、希臘語のそれと同樣に、意義質から分離し得ないものと考へる事も出來る。何れにしても結果が言語活動中にあつて、その作用を果す事の出來るのは文法、即ち形態質の描く作用樣式の體系があるからである。語彙が音韻、文法と並んで重要なる言語の三大要素の一つたる事を得るのは、それが文法の軌道を形態質に搭じて働く事が出來るからである。かゝる言語單位がそれ〴〵の言語における所謂單語である。語彙は素朴なる見方によれば從つて單語の集りと看做す事が出來る。

しかし文法と語彙とは必ずしも一定不變の固定した關係に於いて立つてゐるのではない。單に、語彙は文法によつて言語に於ける活動的要素となり得るといふのみであつて、一定の文法には必ず一定の語彙が對應しなければならないとは限らない。日本語本來の所謂和語に加へて漢語、洋語が同一の文法中にあつて自由に驅使せられてゐる今日の日本語の諸彩交錯の現象は、あまりに親しいために、却つて吾々の注意に上らない程である。印度のヒンドスターニー語の一つに屬するウドルゥ (Ourdou, Urdu) 語は文法的には本來のウルドゥであるが、語彙のみは始より終まで全く波斯語を以て充たされてゐる。アルメニアなる流浪の民チゴイネルの使用する言語の一つは、發音と文法はその住地のアルメニア語的であるが、語彙は大部分に於いてアルメニア語以外の言語のそれによつて構成せられてゐる。本來自らの言語に屬してゐたのではない語彙を使用する事は程度に多少の差こそあれ、今日何れの言語にあつても見られ得る現象である。唯に今日のみならず、今日以前恐らくは人類に文化と交通の起つてゐた限り、最も太古から行はれた避くべからざる社會言語的事實であらう。「水車にかける水は、必ずしも同一の泉より出でたものたる事を要しない」のである。吾々が漢文に返點送假字を用ゐて解讀するのも、要するに、支那の語彙を日本語の文法にかけて働かさんとする水車の試みに外ならない。

今日吾々の使用する日本語の語彙には、漢語洋語が、在來の大和言葉の間に非常な勢を以つて蟠居してゐるのは掩ふべからざる事實である。しかも吾々は實際言語活動にあたつてゐる際には、吾々の使用し、所有する語彙の要素にかくの如き起源的差異のある事を意識しないのが常である。何れも吾々の言語活動に必要なる言語單位として全く同一の取扱同一の顧慮を蒙つてゐるにすぎない。語彙は言語を使用、或は使用しつゝあるものに取つては全體として一樣無差別の統一體である。特に著しい漢語、未だ新しい洋語のほか、和語漢語洋語は相倚つて、一の今日の日本語の平板なる語彙體系の平原を構成してゐる。

ただに構成要素の由來的差異について然るのみならず、一語一語も亦、その語源、即ちその由來を意識する事なく使用せられる。今日「吟味」と稱するものは、それが前代においては「詩句を訓で吟じ味ふ」意義であり、ショージは曾つて襖、唐紙、障紙何れをも意味し得た事を意識してゐるものはないであらう。ウマヤ(厩)は馬屋であり、蚊帳(カヤ)は蚊

屋であり、「上」、「神」、「髪」、「狼」、何れも之は本來「上方」の意からかくの如く分化したものであり從つて、神は髪と語源を同じうする事を意識しつゝ言語的活動の實際にあたつてゐるものがあらうか。言語作用における語彙は語源を意識しない。單にその現時、その瞬時における意味である。從つて神と狼、髪と上は全く區別して考へられる。同音異義――即ちホモニムである。語彙の成立過程と現在の意識は必ずしも一致しない。語彙にはその現時性を注意しなければならぬ。また十年前の日本語、二十年前の日本語、更に遡つて明治初年或は維新當時一般社會に行はれた日本語を思ふならば、時代の遡るにつれて、確に普通に使用せられた洋語の數も少なく、漢語の量と種類も多少ともに少數であつた事は否まれない事實であらう。この事實に平行して、和語の使用の範圍も廣かつた事も亦明らかな事實である。而もこれらの時代時代における人々には、當時の日本語の語彙が全體として何等差別する事を須ゐない統一體、即ち一の體系であつた事は、今日の日本語の語彙が、今日の日本語使用者に對すると同樣である。換言すれば、時代によつて語彙の體系には變化流轉がある。奈良朝以前の日本語の語彙には殆んど和語のみが見出されたであらう。奈良朝に入つてはやゝ漢語の自由に用ゐられるあり、それが漸く日本語の語彙中に確固たる地歩を占め、當時の語彙體系中に融合せられた事が見出される。平安期をすぎ、鎌倉期室町時代の頃となれば、社會・政治の變動と共に獨り漢語と和語との數の關係のみならず、一般に語彙全體の上に、一時代はその前時代との間に著しい差異を示してゐる事が明らかに看取し得られる。しかもかゝる時代に於ては洋語はいまだ語彙體系中に何らの勢力を有してゐなかつた。德川時代は今日の日本語の語彙にあらはれるこの三要素の最後のものをはじめて萠え立たしめた時代である。洋語それ自身もがその時以來種々「國籍」を異にしてゐる。はじめ、葡萄牙語西班牙語系統のものが多かつたに對して續いて和蘭語がこれに易り、明治初年前後より英語が非常なる勢力を占め、現に今日にあつては僅かながらも佛獨の二語がこれを追はんとする勢が見える。同じ內容Aをあらはすに、はじめaなる意義質あり、ついでa′なる意義質があらはれたとすれば、a、a′の關係は二基の石柱を並立せしめた如く、相互に冷淡である事は出來ない。はじめの「ばって(い)ら」に對して英語のボートがおこつた場合の如く、二つは相互に反撥若しくは意味合の擔當區域の分擔を定めるに至る。一時代の一言語の語彙は一の體系である。その一部における變動は直ちに他に波及する。語彙中の一要素が動く時は必ず他の要素もその影響を受けざるを得ないのである。普通の語彙における「着物」は本來「着るもの」全體を意味し、從つて衣服全般を指し、敢て洋服和服の區別を問はない廣い意味であるのが當然である。しかし明治初年前後より世情の變遷と共に西洋の衣服が吾々の實生活に勢力を得來るや、これをあらはす「洋服」、我は畧して「服(フク)」なる語が漸次一般の語彙のうちに融着し、この新らしい侵入者に對して古き「着物」は意味を易へ意義圏を狹めて和服を指すのみとなつた。繰返して言へば同一の事物を示す名稱が二個以上に上る時には、一方或は双方が意味又は意味を易へて全くの合同を避け、夫々特殊の意味合を有するに至る。唯に事物の名稱のみに止らない。動詞形容詞の如きにあつても同樣であり、一般に同一の概念を示すに全く同一價値の意義質が數個共存の狀態を續ける事はあり得ない。語彙の體系中には常にかくの如き「言語經濟」が特に著しく行はれてゐるのである。從つてまた反對に異なる意味の二個以上の單語が偶然同じ語形に落合ふ時は、語形的に何らかの差異を設けて意味上の混同を避ける事も行はれる。例へば新潟地方にはシとスの區別が不明瞭なため「シホ」(鹽)もスオと發音せられ、延いてナシ(梨)とナス(茄子)は何れもナスとなり、二つは全く同じ語形に一致する事になる。今この地方の人々は梨を特にキナス(木梨)とし

て畑のナスから區別してゐる。

さて漢語が勢力を得來つたのは、我國が支那と直接間接に交渉してその文化的支配を受けた結果であり、洋語が近世の日本語彙に勢力を張つて來たのは、南蠻の渡來、耶蘇教の布教以來精神的に、はた物質的に、文化的影響を受けた反映である。印度系のウルドウ語が全く波斯語的語彙を受けてゐるのは優秀なる文化を誇つた古代波斯の文化的支配を蒙つた結果であり、アイヌ語に日本語に語源を發する借用語が相當見出されるのは上代以降アイヌが吾々の古き文化の或方面を輸入し、その影響の下に立つてゐた事を示す。語彙は言語の諸要素の中に於いて該言語を使用する民族の文化的位置を最も明瞭にあらはす部分である。從つて文化的位置が移動すれば語彙も亦相應して變動を蒙らざるを得ない。古代支那の文化的影響の下にあつた我國が近世西歐文化の波に洗はれる事によつて語彙の上にも或る變動が(直接洋語が輸入せられずとも漢語の意義が變つて來た)起り、又起つた事は最も卑近にして何人も認める事實である。遠くは西歐の西端愛蘭土は中世以前拉丁の文化の下にあつたために曾つては著しい拉丁語的語彙を形成し、今尚その俤は偲ぶ事が出來るが英國の支配の下に立つて以來、近世においては、愛蘭土語的な歪を加へられた英語が次第に語彙の重要なる部分を侵しつゝあるのを見る事が出來る。故に語彙を通じて或言語團體若しくは民族の固有文化を闡明する事は多大の危險を包藏してゐると云はなければならない。語彙は言語の中で最も移動し易い部分である。

たゞに右の如き移動し易き文化交渉の外的方面に關してのみならず、内的に見れば語彙は、時に該言語團體の精神史的變遷の一部を闡明する事がある。日本語本來の和語は、古典の文献にあらはれるものによつても明らかな如く、感情若しくは感性的方面或は受動的思惟の方面を示す語彙には豐富であるに反して、理知的推理的、或は今日の西洋、古代の支那印度の哲學の如き能動的思惟の方面を示すものに非常に乏しい。後來佛教を入れ、儒教を輸入し、哲學的思考が行はれるに至つても、その思考發表の手段は語彙としては全く漢語のそれを出づる事は出來なかつた。しかもその漢語の背後には漢文化の反映があり、印度原典の息吹がある。我が古き文化は殆んど哲學的表現にあづからなかつた。又西洋哲學が專ら行はれる今日においても、用ゐられる語彙は西洋の語彙を漢語の形に表はしたものが普通である。概念といひ理性といひ、悟性といひ感性といひ、理知、叡知、唯心論、唯物論――何れもかゝる漢語ならざるはない。純粹の和語は未だ哲學的思惟を行るだけの發達を遂げてはゐず、またゐなかつた。或は當初、漸く哲學的思惟に進まんとした時にあたつて、外國哲學の來訪を受けたために、日本語の哲學的訓練の機會を失ひ、遂に今日に至るまでこの方面における使用を敢て創造するを須ゐなかつたと考へる事も出來よう。要するにしかし當初の日本語は哲學的語彙としては殆んど無頓着、無價値であつたのは事實である。日本語を使用した民族(人種ではない)が本來哲學的概念的思惟に向はず、却つて感性的方面に「開かれたる」精神を有し、後、如何にして外來の哲學によつて次第にかゝる思惟に慣れて行つたかは、各〻の時代の日本語の語彙を檢討する事によつて、たとへ決定的にあらずとしても、大體的に推知する事は出來る。語彙には該言語團體の經過し來つた内面的な精神性の歴史、即ち精神史の重要なる一部分を見る事も出來る。

語彙には文化があらはれる。時の流れの或一點を取り、この點を通じて横斷した語彙の横斷面は、一の體系を構成してゐる。しかし時の流れと共に、語彙の中には或部分において、無意識的な變化或は置換が行はれ、遂に歴史的に距たる二點における語彙は相互に著るしい對照を示す。言葉を換へて言へば語彙には夫れ夫れ一の體系があり、その

體系は時と共に、性質姿を易へて行く。たとへ語彙を構成する單位の或ものが失はれずとしても、それ自身意味を變じ、或は新しく來たもの又は文化の移動のために、使用する人の意識が容易に到達し得ざるが如き言語意識の片隅に追ひやられる。平安の九重の奥深く仕へた上﨟たちが日常使用してゐたツラ(面)は今日では少くともその意味合が變じて、同樣の社會には全く使用せられないのは勿論、普通社會の語彙からも疎んぜられ追放せられんとする傾が充分に認められる。宝町、桃山時代のメシ(召し——飯)も亦同樣である。もし今日メシといひ、ツラといふ人々があつても、彼等は使用するの瞬間においてはかくの如き歴史的事情を考慮においてゐない。たとへこれを意識するとしても、社會的一手段としての言語は、聽く人にこれをまで豫想せしめる力はない。語史的意識は話者對者に通じない、無意義であるのが常である。從つて、キクラゲ(木—海月)は單一のキクラゲであり、オヤ「親」は「老ゆ」に關係ある語であつて元、「老ひたるもの、長老の人」の意であつた事は語學者の外には想像するものもないであらう。即ち、この意味においても語彙はその當時當時における一の纏つた體系として見なければならぬ、現時の活動的語彙には歴史性はない、たゞ現時性、瞬間性が認められるのみである。

例へば吾々が震災なる語を耳にする時、かの大正十二年の關東の大震災を經驗した東京の人々と、單にその報導を受けたのみの京都大阪の人に對しては、その語の持つ意味少くとも意味合は異なつてゐるに相違ない。同一の語「ツクエ(机)」も、學生におけると學者におけると、裁縫師におけると、はた講演講釋の人々におけるとには、必ず大いなる意味乃至意味合の相違がある。相通ずる所は前者においては地の震ひ、時に家の倒れる事であり、後者においては、その上において何事かをなすべき臺であるの一事のみ。同一の「地震」なる語も東京の人々にあつては「怖しかりしもの」を聯想せしめ、京都大阪の人々に對しては「怖しかるべき」ものとして映ずるのみであらう。體驗の有無違相が言語の意味に大いなる變化を來さしめ、その語の周圍にあらはれる副次的意義に大いなる變調を來さしめるのは吾々が日常經驗する所である。同一の單語「ツクエ」も、神官にあつては供物の座であり、學者にあつては學問的勞作を營むべき臺であり、共に何れもやゝ理想的の意味合を持つに對し、裁縫師にあつては衣服を裁ち縫ふべき全く職業的現實的の意味を持つ。學生の机は、本、インク、ペンへと聯想し、裁縫師のそれは鋏、鏝、針へと聯想するであらう。境遇職業によつても語彙の性質範圍は常に同一ではない。語彙には時代時代によつて異なるのみならず、個人により職業により、社會的のクラッスによつても、常に同一であり、合同であると稱する事は出來ない。特殊卑賤なる仲間の使用する語彙は通例の語彙とは全く無關係であり、吾々はこれを理解する事が出來ない。彼等は理解出來ない語彙を故意に造るのである。內的外的の生活が個人個人において統一せられ、その統一せられた生活は他の個人の一の生活統一とは異なる如く個人個人の藏する語彙も性質範圍において相互に決して同一ではない。

かくの如く個人によつて異る語彙は、社會に於ける個人と個人との交渉折衝によつて一定の程度まで相殺せられ、平均せられる。勿論その屬する社會の何れに屬するかによつて、平均せられた標準語彙にも大いなる開きがあるであらう。政治社會、學術社會、實業社會には各〻特殊なる語彙、若しくは範圍を異にする語彙がある。個人の語彙體系を第一次的體系とすれば、社會のそれは第二次的と稱する事が出來る。第一次的と第二次的は大部分において合致すべき筈であるが、全く個人的なるものは第一次的にはあつて第二次的中に存しないのが常であり、全く社會的なるものは第二次的にあつて第一次的中には存しない事も少なくない。所謂感嘆詞、間投詞のあるもの特に未だ發生後間の

ないものは第一次的たるを本質とし、儀禮挨拶に關するものは主として第二次的に關するのは人の知る所である。吾々は第一次的語彙に屬する意義質によつて吾々の個性的方面の表現に資し、第二次的方面に關する語彙によつて、社會的生活の中に沒入し、社會の營みを聞く事が出來る。從つて所謂標準語なるものゝ語彙は種々な語彙よりの社會的相殺平均、若しくはその社會的の總計である。

一般に吾々は或る文人について、その用語の多寡を論じて、その語彙は豐饒であり或は貧弱であると論ずる事がある。シェクスピアは一萬五千語から二萬四千語を使用したと計算せられ、ミルトンは七千から八千語、新約聖書には約四千八百の語數があると註せられてゐる。今新約の場合は別として、ミルトン・シェークスピアの二人について見れば、彼等が作品中に使用した用語中には、作者の實際日常使用する個人の語彙の外に、その作にあらはれる他の諸多の階級に屬する多くの人々の語彙が組み込まれてゐるに相異ない。ミルトン・シェークスピアと雖も、自らと語り、仲間と囁く時には舞臺の臺詞、詩句の用語をすべて使用したのではないのは明らかである。彼等の個人、彼等の屬する社會によつて、彼等の語彙は相當に特殊な方面に局限せられたものであつたに相違ない。彼等の作品の用語は彼等の語彙とはまたおのづから別である。故に或作者の用語集を以つて、その作者の語彙の狀態を直に立證する事は出來ない。奏鳴外の如く用語と語彙の二つながら著しく廣かつた人に對して、古代ローマのカェサル（シーザー）の如きにあつては、その用語例は彼の語彙に比して、故意に著しく局限せられてゐる。所謂標準語なるものゝ語彙もこれを嚴密に云へば、幾多の語彙の相交錯して一の實際的目的に供せられる用語集にすぎない。嚴密なる意味における語彙は個人個人の如き生活的統一者にのみ認められるべきものであり、社會につき、又大小の標準語については、むしろ「用語集」を認めるのが最も合理的であらう。但しかくの如く論ずるのは時に、あまりに嚴密にすぎる事もあるであらう。しかし何れにしても作者の用語集、一社會の所謂語彙（用語集）の範圍には嚴密なる限定を加へる事は出來ない、むしろ無限である。一般に個人の語彙についても亦同樣の事實が認められる。

同一の言語要素もこれを使用する場合と方法によつてその價値が必ずしも同一ではない。否、常に用法と共に價値を易へてゐるものであると稱する事が出來る。同一のフネ（舟、船）なる表現も、「出船がある」、「入船である」、「船荷をおろす」、「黑船」、等においては、嚴密に云つて何れも何らかにおいて內容的若しくは價値的の相違を來してゐる。凡そ吾々が言語要素を使用するのは言語活動中に於けるを正當とする限り、該言語要素は、刻々に異なる言語活動の波間にあつては常に新たなる環境と共に內容と價値を異にしつゝあるべきは當然である。各々の言語要素が、かくの如くその用例と共に常に意義質としての內容を增加しつゝあり、その各々の場合の意義質は決して相互に全く同一にあらずとすれば、これらの集積たる語彙はその廣袤に於いて無限となるであらう。また言語には「ーさ」、「ーて（手）」、「ーや（屋）」その他漢語の「ー人（ニン）」、「ー者（シヤ）」の如き他の語について新たなる語を構成する要素がある。これによつて形容詞「美し（い）」は「美しさ」なる名詞を構成し、動詞「捕（ト）らへる」は「捕り手（テ）」、「爲（ス）」はシテ（爲手）を作り、名詞「本、紙」は「本屋（ヤ）、紙屋（ヤ）」を構成する。而して吾々の內的言語にこれらの要素が未だ充分なる生命を保ち、意義を失つてゐない限り、吾々はこれを已に存する所の例へば「美しさ、白さ」、「書きテ、聞きテ」、等の如き構成語の中に聞き、また語るのみならず、またこれを他の場合に推し及ぼして、例へば「花々しさ」、「熱烈さ」、更に甚しくは傾日新聞に盛に見る「政治屋、利權屋」の如き新構成語をも造り、話し、且つ理解せしめる事が出來る。而もかゝる場合は事實上、

無限大に行はれ得べき可能性ありとすれば、この方面よりしても語彙の廣袤は無限の彼方に延びざるを得ないであらう。活動する言語の語彙は無限である。語彙には事實的顯存的なる已存要素の外に、可能的潛在的なる未然的要素がある。吾々が自らの語彙の擴がりを知り得ない理由の最も大きい原因の一つはこゝにあり、こゝにまた語彙と文法の交錯點がある。

右の如く語彙を構成する要素は常に現時における言語意識の下に用ゐられるのみならず、また用例の刻々に新たなると共に常に價値內容を異にしてゐる。オヤ(親)は已に語源的意識を沒した意味に用ゐられ、フネ(船)も用例を異にするにつれて、相關的に自らの內容色彩も全く同一であるとは稱する事は出來ない。これらの一々の場合の現時性瞬間性より或る共通性によつて一般的名稱としての、オヤ、フネの意味を引き出す時は、これらは已に具象的直接的意義と作用を失つた抽象性における意義となり存在となる。抽象的なフネがあらゆる場合に對して用ゐられるのではなくして、一々の場合の具象的なフネが或共通性(例へばその形、用法における)を有するものに對して擴充的に用ゐられる事によつて、その共通性を有するものがフネなる名稱を以つて呼稱せられ、かくして所謂抽象的一般名稱としてのフネ(船)は成立する。しかしこれは言語における活動的部分でなくして寧ろ靜止的、また具象的場合でなくしてむしろ抽象的場合である事に注意しなければならない。

換言すれば、單語は用ゐられる瞬間に自ら一の全體性として生きる統一體であつて、同一の單語が場合場合に當つて種々適當なる意味を繰り出すのではない。單語は言語活動中に存する限り使用せられる際は常に嚴密に一意的(monosémique)であり、決して多意的(polysémique)ではない。「黑船」のフネと「出船入船」のフネとは使用の異なる如く、內容的に決して同一ではない。二つのフネは云はゞ特殊なる同音異義語である。曾つてフネ(船)とフネ(槽)、アメ(天)とアメ(雨)、カミ(上)をカミ(神)が意義的に分離して夫れ夫れ二つが相關的に考へられざるに至つたのも、本來かくの如き特殊なる同音異義語が文法の變化、文化の推移、思惟方法の變遷と共に、その間の罅隙を擴大せられたからであつたであらう。

即ち一の單語には言語活動中において場合場合によつて起る具象的なる偶發的意義、及び言語活動外に於いてこれらの偶發的意義より抽象せられた靜止的な一般的意義がある。而もその外、各々の單語にはこれを使用し、耳にする人の過去の經驗より發する意義以外の心持或は連想がある。副次的表象である。而も一々の單語は特にある用例に多くあらはれる時、その環境的色彩が自らその背景として特別な味ひを持つて來るのは自然なる過程である。短い句形に豐富な內容を盛る吾國の俳句の如きは、この種の語彙の利用が極めて頻繁でなければならない。畢竟季題はこれの固定、或は固定せざるを得なかつた場合である。持統天皇以來吾國に火葬が行はれるやうになつてから、ケムリ(烟)は自ら特殊の色合を持つ事になつた。涙多いあの吾國の中世史を染める悲しい色調の一つはこれである。鳥邊山の烟は如何に都の空を暗く重くしたことであつたか。或は月といへば中秋の月を思ひ、滿月といへば薄の向ふに浮ぶ柔かい色調の黃な丸い月を思ふ。言語にその言語團體の內面的思惟が反映し、文化があらはれ、國民性が見出されるといふのはかくの如き方面である、またかくの如き方面にかぎられる。言語と國民性の關係をあらゆる場合にわたつて求めんとする東西の多くの試みは、單に大地は礦脈を有すとの理を以て悉ゆる地點を發掘せんとするが如きに似てゐる。語彙の一部にかゝる文化的傳統意識的方面あるが故に、單語には吾々の單純に考へる以上に深くして高き內容の

ある事が感ぜられ、單語に或る神秘性を賦與せんとする傾向が發生し、單語の象徴性なるものがあらはれて來るのである……

未知の人の名を聞く時も吾々は直ちにその人物について或種の想像を働かせるのが常である。實際の人物に比して、あまりに意外な場合ももとより少なくはないとしても、物の名には何か實物の眞髓を摑んでゐる或ものがあるやうに思ふ。はじめて目にし、手にした物體物質について、その性質狀態を訊く前に先づ名をたづねるのを以つて滿足する事も多い。病理の知識のない吾々も醫師の診斷については先づその病名をたづねる。しかも通俗なる名よりも、不可解ながらも精緻な專門の學名を以つて指示せられた時の方が安心が大きい。摑むに摑めないものをせめて名によつて把握し以つてその弱點を握らんとするのである。實際病名の不明は吾々にとり最も不安なもの〻一つである。まことに人生において「名は兆」である。「ノーメンはオーメン」(nomen omen) である。古今東亞を問はず魔法なるものは常に語彙の特殊なるものと關係してゐる。所謂呪文がある。古代印度、古代ローマにおいても言葉を知る詩人と聖者とは同じ稱呼を以つてあらはされてゐる。貫之の古今の序文に所謂「鬼神を哭かしめ」の呪文的の一句も淵源に遡つて遠く支那の古代に至る思想である。今日一般に諷刺詩と譯される英語のサタイア satyre もその起源においてはむしろ宗教的、魔法的な、より隱險隱慘な呪ひであつた。希臘初期の抒情詩人として何れの詩集文學史にも喧傳せられるアルキロコス Archilochos が、愛人を奪つたその兩親を憤つて、遂に愛人の親子三人を憤死せしめたサタイア即ちサテューロスは、譯語に拘泥して單に諷刺詩と稱し去るにはあまりに眞劍である。古代の人々にとつては、言葉は眞に鬼神を哭かしめ、人を呪ひ殺すに足る力を有するものであつた。「詩人」が畏れられたのも亦當然である。今日においてもかかる狀態は未開野蠻の民族の間に普通に見出される現象であり、「文明開化」を誇る吾々東西國家の中央においていくかゝる事實なしとは、誰か斷言する事が出來よう。

語彙を構成する言語要素に於いては、以上述べた如き內容意義的方面の外に、要素そのものゝ音的價値をも考慮に入れなければならない。例へば所謂濁音(有聲音)は清音に比して、輕きものに對する重きもの、快きものに對する懶きもの、澄めるものに對する濁れるもの、新鮮に對する古陋なものをあらはすに適した音價を有してゐるのは何人も感ずる所である。チチに對するヂヂ、パパ(ハハ母の原音形)に對するババ (papa——baba バは音聲學的にパの有聲音であつて、ハのそれではない)の關係には音そのものゝ價値なり感情なりを示す何ものかゝあるやうである。ヂヂ、ババの語原乃至その發生も本來かゝる見地よりして解釋すべきものであるかも知れない。しかし又清音即ち無聲子音及びそれが構成する音節そのものにあつても、Kに對する、Tに關する、及びPに對する音價値及び音感情は、同じ破裂音たる事によつて相似たる所もありながら、而も細部においてはおのづから相違のあるのが感ぜられる。コン、トン、ポンの三つを比較すれば、何れも何ものかの衝突する事をあらはすものでありながら、衝突する物體は第一より第二第三に下るに從つて硬度を減じ、鋭さを殺ぐのが感ぜられる。吾々の有する擬聲語は無意識の中にこの間の微差を用ゐ分けたものが多い。今の三つを何れを有聲音のgdbに於いて發音すれば、かの比例のまま、衝突の鈍度を增し、物體の重量の上る事が直ちに感ぜられる。

またSの音は物の弱く鋭くかすれる音をあらはすに適し、Rの音は音を發する物體の運動が幾分の連續乃至反復を

示すに適してゐる。サラサラは小川の絶えざる囁きをうつし得て妙であり、スルスルは硬體の輕くふれゆく樣を思はせる。ソロソロについても、各人の主觀的感じの差はありながら、やはり根本に於いて、各人に相通じた感情、概念を抱かせるのを否定する事は出來ない。N或は母音の鼻音化は餘韻を思はせる――――

また母音についても、アは豁達にして打開いた感じを、イは尖鋭にして犀利而して幾分女性的な思ひを、オは重厚にして圓滿ウは鈍重な、エは尖鋭にして而もやゝ打開いた感じを抱かしめる。これらの母音を、右の三つの擬聲語にあてはめて見るならば、その差異は或ものにおいては極めて明瞭にあらはれるであらう。擬聲語はかくの如く母音子音の轉換によつて、相互に極めて纖細な感情的差異を持つものが無數に構成せられ得る可能性がある。これも亦語彙の範圍をして無限ならしめる一の要因である。

音の象徴的價値を利用するものは單にかくの如き所謂擬聲語のみならず一般の名詞動詞、特に子供の言語には多數に見出される。汽車電車汽船の如き運動する物體に對する子供の名稱は特にこの種のものが豐富である。大人の使用する言語と雖も、教養の低き階級社會、或は親しき集りにあつては、標準語の普通の語彙にあたるものも、擬聲語的な稱呼による場合が少なくない。例へば臺秤に對する、午砲に對する名稱の如きがこれである。さきにあげたパパに對するババ、チチに對するヂヂも或はこの例として見る事も出來るかも知れない。已にはじめから與へられた名稱も、それを構成する音の組合せによつて擬聲語の如く感ぜられ、若しくはかく感ぜられる事に依つて一層擬聲語らしき姿に變ずる事がある。ラッパ(喇叭)は支那語を通じて始めよりそれとして吾々に與へられたものであるが、吾々はこの音配列を聞く時、爽かなブラッスの響きを聞くやうな思ひがある。サラサ(更紗)もその品物と共に外國より輸入せられた單語であるが、かすつてゆくやうなSの音、打開いたアの音を主要構成分子とするこの語は、已に語音そのものによつて、かの織物の乾燥した心地よい感觸をあらはしてゐるやうである。セミ(蟬)も支那語の「蟬」の音から來たとも稱せられてゐるものであるが、その語源の當否は姑く措き、セミなる音自身に幾分蟬の聲を思はせるものがある所から全く擬聲語として、子供の自然な語彙にはセミセミとして存してゐる。同じ音配列を重ねるのは擬聲語に於いて連續的反覆的な音感をあらはす時の慣用手段の一つである。

かくの如き現象は獨り日本語において認められるのみではない。佛蘭西、獨逸語、英語等にあつても纖細な語感を以つて「生ける言語」に向ふならば、かゝる場合を無數にあげる事が出來るであらう。たゞ吾々の學ぶ外國語はその言語團體の標準語、卽ち理智的慣習的に人工手段の加はりた教養ある社會言語であるが故に、これを以つてこれらの外國語には吾々の擬聲語にあたるもの少し、或は無しと斷定する事が多いのである。標準語は該言語團體の使用する言語の一面にすぎない。社會と個人のあらゆる方面に亙て日常使用せられる言語を捕捉しその語彙を觀察するならば、更に豐富な、これらの外國語に特有の象徴的現象を發見するに至るかも量られない。こゝに吾々の注意すべきは、音の意義に對する象徴的價値も、單に意義と音との間に一致ある場合においてのみ認められるのであつて、あらゆる場合において、すべての障害を排してその象徴性が働くのではない。音の象徴性は語彙現象の中で最も重要なるものゝ一つではあるが、これを過大に適用する時は大いなる誤謬に陷るであらう。印象的な音を連ねつゝ、その意味において何らこれに對應すべきものを見出さない單語がある。かゝる場合吾々は音の象徴性に少しも思ひ到らないのが常である。音の象徴性はそれが意味と相對應する限りにおいて、吾々の意識に浮ぶものである。或は逆に考へてかゝる音

意の一致が感ぜられる場合から習慣的に音に象徴性が附加せられて來たものと見る事も出來よう。

單純と思はれる語彙もやゝ近くよりこれを見るにおいては、吾々が簡單これをに扱ひ盡し得ざるだけの多くの問題を藏してゐる。吾々が今考察した如きは質に於いて範圍において、極めて一部分の問題に答へんとしたにすぎないのである。多くの問題を有する語彙、曲折極まりなきかの文法、及び複雜なる音韻、更にこの三者の有機的な統合の上に立つ言語はその本質に於て、如何なる事情の下にも單一なる存在とは稱し得ないのは明らかである。しかも言語は、吾々がこれを實際の言語活動に使用し、表現、傳達の用に供する時、極めて單一なる、扱ひ易き存在としてあらはれる。內に複雜にしてしかも外、單純なるに於いてこそ、言語が、複雜なる作用を而も容易に果し得る秘鍵があるのではあるまいか。曾つて「言語學的二律背反」Antinomies Linguistiques を書いた佛蘭西の言語學者ヴィトル・アンリ Victor Henri は、その書に於いて、「言語は同時に一であり多である」と云つた。要するにこの意味に外ならない。而もこれら三者の合一して互に純化するは、吾々がこの章のはじめに於いて述べた如く、內的言語の野に於いてゞある。內的言語は言語の統一者であり、開展者である。吾々は次に言語を外的に見なければならぬ。

第三章　世界の言語とその系統

序

吾々ははじめ序論の中において言語の具體的研究法に三つの方向があるとし、第一に個々言語若しくは方言の研究第二、個々方言若しくは言語間の比較或は對照、第三に一般に言語なるものゝ原理的研究を擧げたのであつた。この三つの方法は實際上かくの如く截然と區別せられたものではなく、種々なる程度樣式に於いて互に相交錯してゐる事もその際述べたところである。而して言語學的研究の理想とするところはあらゆる方面の業績をあつめて人間言語なるものを支配する一般原理、即ち言語の大法則 les grandes lois du langage の究明析出にあるのは勿論ながら、現實に言語研究の中心をなし、或る意味においては吾々の言語學建設の礎となつたものは特に第二の方法、即ち殊に重要であると云つた比較の方法である。人事科學或は精神科學の從ふ種々なる方法の中、比較の方法は最も重要なるものゝ一つであり、十九世紀以來言語學以外に法律、神話、民俗、歷史、地理等諸多の精神科學に對して多大の貢獻を與へたものであつた。（ロートハッカー、精神科學の論理及び體系論 Rothacker, Logik und Systematik der Geisteswissenschaften 1927.）而もその中にあつて最もこの方法を嚴密に遂行し、最も確實にして豐富な業績をあげたものは言語學であつた。學としての言語學はこの時を以つて發祥の機としてゐる。言語學において比較の方法、延いて比較言語學が最も重要な基本的一面をなしてゐるのはまた故なしとしないのである。

例へば獨逸語と英語を比較する。現在の姿を以つてしたのみであつては、双方において相一致若しくは對應承應する所は極めて少ない。しかし英語を昔に遡つて一〇六六年ノルマンディの英蘭侵入以前、即ち大體一一〇〇以前の所謂古代英語 Old English（アングロサクソン語 Anglo-saxsn, Angels-ächsisch）について見るならば、今日の「私」をあらはすアイ I はイク ic であり、近代獨逸語のイッヒ ich「ic」古代獨逸語のイク ik に近づき著しい承應のある事實を示す。今日の英語のスピーク speak（話す）も亦古くはスプレカン sprecen であり、近代獨逸語のシュプレッ

ヒヰン sprechen〔spreçen〕に餘程近づく。これによつて(言語の變化は英語の方が速かつたことも窺ふ事が出來る)。獨逸語が動詞の過去分詞にははじめにゲ ge- を冠する如く、英語も古代においては同じくゲ若しくはイェ (ge-, ge-) を冠したのである。從つて今日獨逸語でネーメン nehmen〔ne:m(ə)n〕取る、攝る) の分詞がゲノ (ム) メン genommen である如く、英語も亦同じ意味のニマン niman に對してゲ(イェ)ヌメン ge (ge) numen 、即ちゲ(イェ) をつける事が多かつた。かゝる事例は如何程でも增す事は容易である。要するにかくして英語と獨逸語はかゝる共通性を通じて、究極においては遂に合一し、ことに西部ゲルマン語派を構成する事も已に序論において述べた如くである。西部ゲルマン語はゴート語を含む東部ゲルマン語とスカンディナヴィアの言語を中心とする北部ゲルマン語所謂ノース norse と共に相集つてゲルマン語族若しくは語派を構成する。

このゲルマン語の代表としてのゴート語のイム im (私がある)イス is (汝がある) イスト ist (彼、彼女、それがある)を古代印度語(サンスクリット)、古代希臘語、拉丁語、古代スラヴ語のそれぞれの形と比較すれば

ゴート語	古代印度語	古代希臘語	拉丁語	古代スラヴ語
im	ásmi	eimi	sum	i-esmĭ
is	ási	ei (又は essi)	es	i-esi
ist	ásti	esti	est	i-estĭ

また「母」、「兄弟」、「父については

modher	mātar	mēter	māter	mati
broÞar	bhrātārr	phrātēr	frāter	bratr
fader	pitar	pitar	pater	——

古代スラヴ語の「父」にあたるものは全く別の語根に由づるものによつて代用せられてゐる。近代ロシア語に於けるアティエッツ otec である。

即ち右の圖表によれば、サンスクリットの bh には希臘の ph 拉丁の f、ゴートの b、古代スラヴの b があたり、希臘語の e に對しては古代印度語 a、拉丁語 e、ゴート i、古代スラヴ語 e が夫れ夫れ對應する。かゝる關係は右の例においてのみならず、他の例についても同じく立證する事が出來る、即ちサンスクリット bharami「私が運ぶ」＝希臘 pherō ＝拉丁 fero＝古代スラヴ berĭ(近代ロシア語ベル bery) である。

かゝる規則的な一致對應によつて比較言語學は比較せらるべき言語間の對應の法則を明らかにし、これによつて一方より他方への類推を容易ならしめると共に、延いてはこれらの對應の根本的性質を究明しその起源原因を探つてこれらを統一包含する原本的な語音語形を再構する。右に掲げた諸言語はかゝる手續きの下に、今日吾々の直接には知り得ない同一の祖語から發した親族語なることが明らかにせられ、吾々はこれらを總括して印歐語族と稱する、かゝる點についてはここにつゞく本章の第一節において別の立場から更に說く所があるであらう。

言語の具體的研究の第二種の中には今の比較の外に對照の一法があつた。比較は親族語に對して用ゐられるに反し、對照は系譜的に全く無關係な言語を相互に「つき合はし」、相互の性質を映發闡明せしめるものである。こゝにおいては丁抹のイェスペルセンの企圖に注目すべきものゝある事に觸れたのであつたが、かの比較にせよ、この對照に

せよ、何れにしても豫想する所は言語の種々性と多數性である。かゝる人間言語の多樣性と多數性こそ、言語學の根本的動機であり、實證的言語學の中心としての比較言語學のシネ・クッ・ノン sine qua non 即ち若しこれなくんば自ら亦ある能はずの必須不可缺の條件である。

十數年前に歿した亞米利加の小說家、マーク・トウエイン Marc Twain の名で知られたサミュエル・クリーメンズ Samuel L. Clemens の傑作の一つ「ハックルベリー・フィン冒險物語」(Adventures of Huckleberry Finn) の一齣にはこれに關して興味ある挿話がある。單純にして知見の未だ狹隘な亞米利加印度人のジムには自ら直接所屬する小團體の使用する言語の外に世界に多樣の言語が多數に存在する事が分らない。たまたま彼等の話題に上つた佛蘭西人の事から、話は更にその使用する言語佛蘭西語の事に及んだとき、彼は佛蘭西人は「人間語にて」話すや否やの疑問に逢着する。ジムに取つては自己の言語團體の言語が即ち人間語であり、人間語はそのまゝ直ちに彼等の言語である。蠻族の自己を呼稱する名辭には意味的に云つて單純に「人間」を意味するものゝ多い事は已に前章のはじめにおいて述べた如く、蠻族は言語に關しても亦自己に屬するものを以つて直ちに「人間語」となし、人間語一般と特殊個々言語との二つの大小概念の間に何らの間隙矛盾を認容する餘裕がない。ジムは佛蘭西人が人でありながら「人間語を使用しない」事が堪へられない程不審である。人のよい彼に於いてはこの不審は不審として止まつてはゐるが、多くの場合、この不審は一轉して、自己のみを人間とし、自己の用ふるところをのみ人間語とするところより容易に他民族及び言語の嘲笑と侮蔑に陷り易いのも蓋し當然であらう。古代の希臘人は不可解な他の言語を使用する異邦人を一括して「囈、吃」とし彼等をバルバロイ bardaroi と稱へたのは人の知る如くである。支那人はかゝる場合自己の中國に對して、南蠻鴃舌の徒と稱へた。露西亞人が外國人を稱して呼ぶニヱミッツは狹義に於いては特に獨逸人に對して用ゐられ、ニヱミッツキー nemackij は獨逸語の事である。稍〻これらと色彩を異にしてゐるが、南亞のホッテントット Hotténtot は和蘭の口語或は俗語の「吃」の意であるのも亦この部類に入れるを妨げないであらう。——ジムの不審もかくして極めて當然であり、文明國における普通の人々の心理に徵してすら何ら特に責めらるべきものを有しないのである。

ジムのこの疑を晴さんとして親切な他の一人が問ひかける、

「猫は吾々人間の言語で喋舌るか、牛は吾々の言語で喋舌るか。」

「否。」

「然らば猫は牛語で喋舌り、牛は猫語で喋舌るか。」

「否。」

「動物は人間の言葉では喋舌らない、彼らは彼らの言葉で喋舌る。同じく人間は人間の言葉で話すのである。佛蘭西人も人間であるならば彼も亦吾々と同じく人間語を使用する筈である。同じ動物の中でも牛と猫とは同じ言語ではない。人間の中でも言語には種々がある。」

ジムをして納得せしめやうとする一方のものゝ說明も亦方法次第から云つて元より完全とは云ふ事が出來ない。種々不徹底な問答が行はれた後もジムの心には未だ佛蘭西人が人間ならば何故吾々の人間語を使用しないかとの疑惑がなほも執念に殘つてゐる。「同じ人間が何故人間語を使はないのか、私はその理由が知りたい」……

依然として單純なジムの頭腦には、世界における言語の多數性は一歩を進めて無數性といひ得る程であり、しかも何れも人間言語としては同一の目的、同一の用法、同一の經路傾向を追つてゐる事の理解は宛然七つの鎖鑰を施した開かずの函である。

吾々がこゝに述べんとする「世界の言語」も要するに同じ目的、同じ用法、同じ意味の發現發展過程としての一の人間言語なるものゝ具體的種々性を扱ふのみであつて、內面的に目的意味を異にした言語を云ふのではない。換言すれば相互に習得する事によつてまた相互に意志思想の疎通を得るが如き言語の謂である。而して眞にかゝる言語の種々性こそはじめに述べた如く言語の研究を促がし、延いては言語學の萌芽となつたものであつた。その芽がその後多數の學者研究家の手によつて培はれ育くまれ確たる、軀幹をなし以て言語學の具體的方面のアトラスとしてこれを支へてゐるのは吾々の所謂比較言語學である。比較言語學は他の科學に對しては獨特にして、その內包する各々の方面に關しては夫れ夫れ特殊なる方法を有する一科の科學である。吾々の今觸れんとするのはその原理的方面の煩瑣なる部分ではない。言語の多數性と多樣性に對するその態度並びに取扱ひの決論であり結果である。

吾々はさきに稍々言語の內面的考察に入つた後を承けてこゝにその外面的多數性の他面の考察に入らんとするのである。Language なるものゝ一般的考察の結論であり前提としての Language-s を能ふ限り系統的に概觀せんとする。

吾々の掲げた第三章の意味はこゝにある。

第一節　言語の系統的分類の原理

今日世界には無數の言語がある。歐洲のみについても、東歐の露西亞、波蘭土語、北歐の諾威、瑞典、丁抹語、或はラップ芬蘭土語、西歐には文明語として全世界に亘つて著しい文化的勢力を揮ふ英獨佛の三語、これにつゞいてイベリア半島の西班牙、葡萄牙語の二語、この二語は以前數世紀にわたつて政治經濟的優越と共に東洋南洋南米にまで廣く弘通を見たものであつた。南歐には伊太利語があり、プロヴァンス語があり、匈牙利、ブルガリア語、更にバルン半島の南端には三千年の文化を誇る希臘語が今尙現實に話されてゐる。東へ轉ずれば小亞の土耳古語（オスマンリ土耳古）、アルメニア、イラン、印度の地方の數多の言語を經て西藏、暹羅、ビルマ、馬來等の南方諸語に至る、北上すれば支那語あり、東、朝鮮を距てゝ海洋中には日本語があり、蒙古、滿洲、及び更に北方のトゥングースの諸語が北より支那語に續き、その西方には遠くサモエド諸語が歐洲に連なり、ロシヤ語がその南方をすぎて西比利亞鐵道に沿ひつゝ東方に延びるのを見る。東方にはカムチヤッカ半島及びその北部一帶にわたるカムチヤダル Kamtchadal ユカギール Yukaguir、チュクチ Tchuktche の諸語、半島の一部に存在するエスキモー語はベーリング海峽を越えてアラスカ、マッケンズイー、バフィンランド、ハドソン灣の北岸一帶に行はれるエスキモー語に通じ、次に北米を南下すれば英國の植民以後の國語として使用せられる英語の外に、土着の亞米利加印度人の使用する數多の言語があり、而もその言語狀態は複雜にして最も調査の進まないものゝ一つである。中米にはメキシコの西班牙語の外に同じく土着の言語も少からず、南米も亦伯剌爾の葡萄牙語（伯剌爾語）、智利の西班牙語の外に無數に分裂した土着語を含んでゐる。海洋に出づれば南太平洋の東方より西方印度洋を經てマダガスアルに擴がる島嶼に使用せられる南島語（Austronesian）があり、未だ未調査の濠洲も亦他に劣らざる複雜にして困難なる言語狀態を呈してゐるは想像する

に難くない所である。海洋を去つて西方、亞弗利加大陸に入るならば、南方のホッテントット（Hottentot）語の外にバントゥ（Bantu）の名の下に一括せられる廣大な地域にわたる諸言語があり、中央亞弗利加の諸語を經て北方にはハム（Ham）セム（Sem）の諸語。セム語は東方アラビヤ（Arabia）シリア（Syria）の言語と相承應しこれと共に一大語族を構成する。

而も吾々の數へ得た所は、事實行はれつゝある言語の一部分について、極めて概括的なる一瞥を與へたにすぎない。露西亞語自らも、更に大別して大ロシヤ（Great Russian）、小ロシヤ（Little Russian）、白ロシヤ（White Russian）、の三部とする事を得、各々はまた更に小なる方言に分たれてゐるべきは、吾國の方言の狀態に照して明らかな事實である。一の言語がその內部において更に數多の方言に分たれるのは、唯にロシヤ語、日本語のみではない。支那語の如きは北方と南方、西方とは殆んど相互に理解し得ざるまでに至つてゐる。英語においても古代英語、即ちアングロサクソン語時代においても、已にノーサンバー（Northumber）、マーシヤン（Mercian）、ウェストサソン（Westsaxou）、及び東南端のケント（Kent）の四部に分たれてゐた事が文献の上において認める事が出來る。況んや日常の口語にあつては更に小なる方言區劃が存在したと見なければならない。佛蘭西に行はれる言語の如きも中世以來南北の二大方言があり、北方の巴里を中心とするイール・ド・フランス（Île-de-France）の地より起つて北方一體に君臨したのが今日吾々の普通に稱する佛蘭西語であり、南方のプロヴァンス（Provençal）語は近時一時ミストラル（Mistral）等の詩人によつて再興の企が實行せられた程、中世以來北方とは獨自の文化を背負つて來た事のある特殊な方言である。しかもその各々は自己の中に多數の小方言を包含してゐる。日本語についても、國內に關東、關西、九州の三大方言區別は認められながらも、而も各々の區分中にはやはり嚴密に云つて、無數の方言を藏してゐる（例へば京都と大阪は同じく關西方言區域に屬する極めて親近な言語であるが、而も二つは全く同一ではない、二つを聞き分ける事は容易である）のみならず、かの琉球語は日本語と同じ根柢の上に立ちながら、一見全く異なる言語の如き觀を呈して、內地の普通に日本語と稱せられるものとは著しい對立を示してゐる。琉球語も亦古く吾が萬葉集にも比すべき雄大な文學を有し（おもろさうし等）、現在宛も佛蘭西語に對するプロヴァンス語の如き有樣にあるものである。且つこの何れの名を以て呼ばれる言語區域も自らの中に無數の方言を藏する。これらは方言の代表者であり、而も自ら他の代表とはまた相互に方言關係に立つものである。

然らば方言の決定は何。例へば一方において「セ」と稱する所を「ヘ」と云ひ、「サ」と云ふ所を「ハ」と稱する如き區域的の相異對立がある時、この各々の言語現象には自ら一定の範圍があり、區域限界が定つてゐるのが常である。而して各々が隣る時は相互に接觸離反するところの境界線が構成せられる、かゝる境界線を氣象學の所謂等溫線、等暑線（isotherminal line）に倣つて假に等語線（isoglossal line, ligne d'isoglosse）と稱するならば、吾々は諸種の言語現象について夫れ夫れ等語線を引く事が出來る。而して多くの場合かゝる等語線はたとへ正確に相一致する事はなくとも少くも相互に相近接して走るものである。かくして吾々は謂はゞ等語線の束を得るのである。この等語線の束が方言の境界であり、その束の充實して多くの等語線を含む時は、二方言間の開きは大きく深く、これに反してその貧弱なる時はそれだけ二方言間の共通性が多いのである。方言は等語線の束でかこまれた言語共通現象の一區域であり、二方言間の開きはこの束の大小に從つてまた廣狹種々である。

京都の方言と大阪の方言の關係は、日本語と琉球語の關係に比して本質的には同一であるが、量的或は程度に於いては大いなる差異がある。吾々が琉球語を日本語の中に包含するよりは、同種類ながら寧ろこれと對立せしめんとする所以はかゝる意味における方言的差異の程度が大きく且つ深刻なからである。たゞ二つは同一の政治範圍に屬し、相互に同種なる觀念を有してゐるが故に、言語の差異も實際以下に見做される傾きがあるのみならず同一の政治圈文化圈に屬するとの考は次第に琉球諸島に於いて所謂日本語即ち標準語の弘通を促がし、遠い將來に於いては琉球本來の方言の衰亡を來すべき事も必ずしも眞相を逸した想像ではない。しかしそのために方言的差異は言語學的には決して縮少せられるものではない。たゞ第二次的に二つが同じ條件の中においては接近せんとする傾のあるのは事實である。佛蘭西南部のプロヴァンス語と雖も言語學的には、北方の佛蘭西語よりも寧ろ東西の伊太利語西班牙語、特に西班牙のカタロニアン（Catalonian, Katalanisch）語に近いものであるが、政治的文化的の圈を等しくするために著しく北方と接近し、近世北方よりの有力な言語的侵入を不斷に蒙つてゐる。吾々のこゝに問題とせんとするところはこれである。即ち言語は方言的差異があると共に、此の反動としての合同が行はれる。而もかゝる分裂聚合は常に社會的連環（sscial segmentation, ségmentation sociale）の斷續に依存する。社會的條件は言語の分布に對する重要なる決定條件の一つである。小方言は小なる比較的獨立した社會的連環の中に發生維持せられ、而してこの單位連環の結合又は集合の上に行はれるもの換言すれば複合的社會的連環を一の單位とする第二次的高位の大連環の中に行はれるものが日本語に對する琉球語、佛蘭西語に對するプロヴァンス語の如き高位の方言――大方言である。從つて大方言的範圍の中にはこれと並んで下位的小方言が含まれてゐるのは勿論である。嚴密に云へば個人個人が已に一の方言であるからである。大小にもせよかゝる方言が相互に益々離反し、遂に理解する事が困難より不可能なるに至れば、これらの方言を夫れ夫れ新たなる別個の言語と稱する。

言語の分類にはまづ範圍より見て言語、――大方言――小方言の三段とする事が出來る。勿論この區分若しくは段階は嚴密を欲するならば如何樣にも詳細に區分する事が出來よう。三段階は單にその圖表（スキーム）若しくはその構圖（ダイアグラム）たるに過ぎない。

吾々が言語を算へる時はこの三段階の最上に位する言語を以てするのが普通である。然るに普通に唱へる言語即ち國語は、序論に於いて述べた如く多くの場合背後に政治的統一を持つ國家若しくは政治的團體が豫想せられる。かくの如く政治的區分が言語的區分と大體にもせよ一致を示し、或は前者が後者の背景をなす場合は言語を算へるに最も便宜である。例へば日本語、英語、佛蘭西語、獨逸語の如き。或は今日政治的意義を有せずとも古代において誇るべき著しい文化を有したために、有力なる文化的背景を有する言語、例へば希臘語、拉丁語、埃及の古代語の如き。希臘は今日に於いても政治的には存立してゐるが、單に希臘語といふ時はアテネの文明を中心とする紀元前數世紀間の古代希臘語を直ちに思はせる程、古代の文化は著しい光輝を以て希臘的文化圈卽ちヘレニズムの世界を統一してゐるのである。

これに對して何らの國家的若しくは政治的統一を有せず、文化的支配を持たざる民族にあつては、彼等の使用する言語を何によつて算へんとするか、吾々はその標準を決定するに非常なる困難を感ずる。而も未開の地と雖も廣大なる範圍に亘つて全く同一の言語が行はれる事は不可能である。嚴密に云つて個人個人が方言の極限單位である。かゝ

る個人の或る集合の上にその仲間に通有にして便宜な言語が、學校毎に、否各〻の級毎について認められるが如く、構成せられるのであるとすれば、廣大なる地域にわたる未開民族の使用するこれらの言語にも方言的差異が構成せられ醸成せられるのは明らかである。且つその方言的差異たるや、遠隔のものは相互に交通なく、各自の社會的連環は相互に觸接せざるだけ、吾々の所謂大方言の場合にも畢竟すべき程、深刻なるものがあるに相違ない。この地域の言語全體を、若しそれが本來的に同一の言語であるとすれば、これを一體として英語、獨逸語といふ如く一の言語として算へるべきか、大方言を一の言語として數へるべきか、遽に決定することは困難である。例へば日本語と琉球語の場合においても、もし二つが相互に獨立の國家を構成してゐる場合は、各〻を一箇の言語として計算したであらう。西班牙語と葡萄牙語、伊太利語と西班牙語、瑞典語と諾威語、英語とフリース語の如きは何れも日本語と琉球語以上の類似近接を有するに拘らず、何れも一言語として算へられてゐるのは、各〻が相互に獨立の政治的團體に屬し、若しくはこれを背景としてゐるからである。

「言語を算へるのは決して同一の標準を以てすべてに當嵌める事は出來ない。政治的背景、文化的統一は極めて重要なる言語分布の條件ではあるが、それは單に言語の分布に修飾を加へるまでゝあつて、未だそれのみにては分言分割の決定的な直接條件ではない。且つまた政治的文化的に著しい背景若しくは統一を有するに至らずとも、人類のあり、社會のある限り言葉は存在するからである。言語を算へるに言語學はこれらの條件をはなれて獨自の言語學的立場よりする。即ち政治文化的範圍を姑らく抽象して直接言語の示す相互の差異のみについて、その相互に著しい開きを示し、且つ對立狀態の著しくなつたものを以て計算の標準とする。」從つて琉球語は日本語に對して著しい對立の姿を呈するが故にこれを一箇特別のものとして數へ、同樣にプロヴァンス語も亦佛蘭西(標準語)に對して一箇獨立のものとして認めるのである。しかしこれに對して關東關西方言の如きは大方言の段階には屬し、開きは相等に著しいものゝ、未だ明瞭な對立を呈示するに至らず、一方より他方への移行も減減漸增的である。單に言語を算へる時にはかゝる平均的な場合は一括の下に一個として取扱ふのが普通である。これらは文化的に社會的に常に交通するが故に著しい對立を示すには至らない。然るに攻究理解の便宜上、專ら言語學的に大方言を分類の標準とする以外に、能ふかぎり政治的文化的統一との一致を求めて、例へば獨逸語、日本語といふ如き場合も多い。實用的効果が極めて高いからである。たゞこの場合に對する言語學的考察を忘れてはならない。吾々は次節以下に試みる分類において、實用と學術の兩面を併せ行ふ事にしたい。但し嚴密に方言學 (dialectology) 的に考察を進める時は問題は自らまた別である。

かくの如く空間的に言語を差異と對立によつて算へるのみならず、言語の計算にはまた時間的に縱の軸についても行はれるのである。今日の日本語を明治の言語に比較してもそこには特に抽出すべき著しい對立は無視し得る程に僅かである。しかし時代を更に遡つて德川時代の上期になれば言語の姿も全體として稍著しい異色を呈し、更に平安、奈良朝に遡つては、かの王朝の文學、萬葉の古歌にあらはれる、言語にも明らかな如く、言語的差異と對立は夫れ夫れの特色間に著しく現はれる。言語は時代によつても分類計算するを得るものである。凡そ一一〇〇年ノルマンディの侵入以前の英語を古代英語、即ち Old English 或は Anglo-Saxon (Angelsächsisch) とし、これより以後凡そ一五〇〇年に至るものを中世英語即ち Middle English とし、以後更に今日に至るものを近世英語 Modern English

とするのも亦英語について同一の時間的區分を施したものに外ならない。近世英語中にあつても早期と中期後期を分つ事はあるが、特に著しい對立を示すものではなく、單に明治と今日を比較するにあたるもの、例へば空間的對立の小方言にあたる場合であり、從つて一括せらるべきものである。

獨逸語についても、佛蘭西に語についてもかくの如くして大體古中新の三つの時代を分つ事が出來る。勿論分割の年次は必ずしも一致しないのは已むを得ない所である。

かくの如くにして計算せられた言語は、計算する人の標準のおき方によつて總計に相當の開きを示してはゐるが大凡三千四五百から四千乃至四千五百があげられてゐる。この中には日本語、英語、佛蘭西語等の政治文化言語學の方面よりして著しい統一と特立性を示すものと現代中央亞細亞北西比利亞等の何等他に著しい背景を有しないものも共に加へられてゐる事を忘れてはならない。しかもこれら三千乃至四千五百の言語は始めからかくの如く多數に存在してゐたものではない。古代ラティウムの一角に發した拉丁語(或はローマ語)が分化して近世の葡萄牙、西班牙、佛蘭西、伊太利、ルーマニアの諸語となつた如く、これら多數の中の或ものは遡つて同源に歸すべきものもあるのは明らかである。換言すれば今日分化してゐる一群の言語も或る當初の根原語から分化分出したものと見る事が出來る。かゝる分化の過程は明瞭である。

始め或廣い地域にわたつて話されてゐた一の言語があつたと假定する。これを使用する一國の人々が、相互に緊密にして規則的な社會的關係を維持してゐる間は、彼等相互の間の交通理解の機關としての言語も分裂を來すことなく、また分裂を來すを許容してはゐられない。がその社會的關係が歴史的或は自然的狀態によつて破棄せられるに至る時、始め廣き地域全體の理解の具としての言語は、新たに分割せられた小區域内の用を果すを以て充分なりとするに至る。然るに言語は變化するものである。序論に於いて述べた如く、言語は變化するが故に比較文典比較言語學があるが如く、轉變する世相の第一線に立つて作用の媒體をなす言語にもそれに應じて亦變化の加へられるは當然である。勿論言語の變化にはかゝる世相の變轉、即ち社會的環境の變化の外に、吾人の智識を以てしては未だ測るべからざる力を以て、言語を一の狀態より他の狀態に向つて推し動かす作用がある。或人はこれを以て言語の變化は言語作用の自然過程であるとさへ云つてゐる。かくの如く當然變化する言語は、一旦環境を異にし、社會的連環の接續を失へる夫れ夫れの區域に小分せられるならば各自燭特なる變化の方向乃至過程を追ひゆくべきは見易きの理である。最初共通にして同一であつた言語はかくして一定の時間の經過の後には分立對立する數個或は多數の新方言に分たれ、遂にはそれ〴〵の地方語を奉ずる住民をして相互に理解するを困難、不可能ならしめるに至る。はじめの共通語が分化分裂して新言語の數個を以て代替せられ、こゝに言語の多數化と多樣化が實現せられるのはかくして行はれるのである。先きにあげた例について再び言ふならば、大羅馬帝國西部の共通語であつた拉丁語は、古代文明と政治的統一の分裂した瞬間から伊太利、ゴール、イベリヤの諸地方にそれそれ獨自の方向に向つて變化發達した。これらの地方の人々は自ら常に拉丁語を使用しつゝあると思惟しつゝある間に九世紀に至つて、彼らは相互に截然と分たれ、しかも本來の拉丁語とは非常に距離のある言語を使用しつゝある事を發見したのである。かゝる新言語が今日の何れにあたるやは上來時に述べ來つたところである。

拉丁語は紀元前三世紀より正確な文獻によつて知り得る言語であり、その文明的盛時に達し更に政治的大壯圖が瓦

壞衰亡して今日のロマン諸語を出すに至つた時代は、從つて明々昭々たる歴史時代であつた。吾々はこの事實によつて、吾人の現實的な吏眼の達し得ざる史前時代に於いても、かゝる言語的過程の行はれたとするは決して想像するに難しとする所ではない。日本語と琉球語が分れて今日の如き對立を示すに至つた始源も先史時代に屬する言語事實である。果して然りとすればロマン諸語を分出した拉丁語自らも、亦先史時代においては、他と分化對立の關係に立つてゐたものではあるまいか。歐亞の二大陸にわたつて行はれる數種の言語は、現代或は古代の文献にあらはれる言語の姿によつて、或る一定の規則的な相關關係にある事を示してゐる。亞細亞の梵語（サンスクリット）、アヴェスタ（Avesta）教典の言語、古代希臘語（Altgriechisch, Greek）、古代愛蘭土語（Old Irish）、ゴート語（Gothic）、古代スラヴ語（Old slavic）、古代アルメニア語（Old Armenian）の如きは即ちこれである。而して拉丁語も亦このグループ中に重要なる位置を賦與せられてゐる有力なる一の成員（メンバー）である。これらのグループは文献時代、歴史時代においては已に分化對立した姿を以て存在してゐたものであるが、相互にかゝる規則的な相關關係に立つことを示し、その各〻より逆推した語形音形は何れも一致した形に歸し得べしとすれば、これらは先史時代一の祖語、即ちさきの所謂共通語より分化發達して來たものではないであらうか。

例へば「二」を意味するものについて見れば

サンスクリット	d(u)vau
古代希臘語	dyo(y=u)
古代拉丁語	duo
ゴート語	tva(·i)
アルメニア語	erku

この五つの中、最初の四個は一見して明らかな如く、單なる偶然以上の相似を示してゐるのみならず、言語學的に相關關係を決定して行くのも困難ではない。問題は最後のエルクである。アルメニア語がこれと同じ關係に立つ言語であるためにはかゝる根本要素の對應一致は重要視せらるべき事柄である。これが如何にして最初の四つの形の示すものと一致若しくは規則的對應の中に入れられる事を得るか。

希臘語「心配する」「怖れる」の意をあらはす語根（ルート）は dio, deido「私は怖れる」或は deinos「怖ろしき」にあらはれる dwei-, dwi-（これが普通の文献にあらはれる希臘語では dei, di となつてゐる）であり、拉丁語の dirus（元は dwi）「怖ろしき」にも間接の形を取つてあらはれるものである。これに對してアルメニア語は語根 erki- を以て相對應してゐる。例へば「心配」「恐怖」の意味のエルキウル erkiwł はこの語根より出來たものである。しかのみならず更に「長い間」「永く」を意味する希臘語 dwaron（極めて古き形、普通にはデーロン deron、ダーロン daron としてあらはれてゐる）に對してアルメニア語にエルカル erkar「長き、永き」があるのを見れば、拉丁語希臘語等の dw- に對してアルメニア語は規則的にエルク erk- を以て對應せしめてゐる事が判明する。而して印歐語の「二」は語根 dw- である。はじめの四形に對して、獨りアルメニア語が特異な形を提供したのも決して偶然ではなかつたのである。エルク erk- は dw- に對して何らかの理由によつてこれと一致すべく、またこれと共通の祖原音形より分化したものと認める事が出來る。吾々が言語の關係を論ずるにあたつて屢〻規則的相關關係に特に重點を置いて來た所以は實に茲に

存する。かくしてアルメニア語は特殊な言語事實を提げてさきの大グループに入り來るものとして取扱はれるのである。この大グループは吾々が印(度)歐(羅巴)語族と稱する所である。

此に於いて吾々は「(言)語族」と「親族語」の二つの定義を得る。語族は同一共通祖語よりの連續的分化をなした相互に異なる言語の集團である。親族語は右の如く定義せられた語族に屬する個々の言語方言を相互に呼ぶものである。拉丁語、ゲルマン語(ゴート語を代表とす)希臘語、スラヴ語、等々は集まつて印歐語族を構成し、スラヴ語、拉丁語、ゲルマン語、希臘語は相互に親族語である。

同樣にして更に拉丁語は祖語であり、ロマン諸語はロマン語族若しくは語派を構成し、その各〻、例へば佛蘭西語と伊太利語は親族語である。故に佛蘭西語と伊太利語の二つはロマン語派内において親族語なるのみならず、拉丁語が印歐語族に屬する限り印歐語族的に見ても同じく親族語である。二つは二重に親族語である。こゝに親族といひ、語族といふのも單にメタフォリカルな意味においてゞあつて、眞に言語にかゝる人間的生物的な血族關係があるのではない。拉丁語が伊太利語となり、アングロサクソン語が今日の英語となつたといふのも、決して拉丁語が伊太利語を、古代英語が近代英語をそれとして生み出したのではない。漸次的變化若しくは修飾の集積堆積が伊太利語となり、近代英語を構成したのである。言語には文字通りの血族關係はない。

吾々がこゝに企圖するが如き言語の分類は、この親族語を語族によつて纏めて行く事である。換言すれば、世界の言語を、これらを統一する數個の共通祖語に統一せられるものに依つて幾つかの群に分ち、言語間の關係を明らかにするにある。徒つて吾々がこゝに取る方法は全然歴史的である。歴史的に言語の古き狀態に遡り、遂にこれらは共通の祖語に歸し得べきやを考察し、出來得べくんばその祖語を再構せんとする。比較言語學は確實にして矛盾なき原語を再構し得るに至れば第一段の完全性と信用は獲得したと認める事が出來る。本章の題として掲げた「言語の系統」なる名辭も、要するに意味するところは共通祖語よりの系譜的連續中に於ける言語關係の謂に外ならない。

かくして現在吾々は世界の言語について確實な語族は凡そ八箇を擧げる事が出來る。多くはユウラシア大陸に行はれるものである。これを西方より算へて、

一、印度歐羅巴語族 Indoeuropean Family 又は印度ゲルマン語族 Indo-germanic Family
二、ハミト・セミット語族 Hamito-Semitic Family
三、ウラル語族 Ucalic Family
四、アルタイ語族 Altaic Family

時に三、四の二つを合せてウラル・アルタイ語族と稱する事もあるが、この合同分離についての議論は當該各項に於いて試べるであらう。

五、ドラヴィダ語釋 Dravidian Family
六、印度支那語族 Inds-Chinese Family
又は支那西藏語族 Sino-Tibetan Family
七、南亞細亞語族 Austroasiatic Family

八、南島語族 Austronesian Family
又はインネシアン語族 Indonesian Family
七、八を合せて南方語族 Austric Family と稱する事がある。

こゝに Family（語族）と云ふのは、Family of Speech（語族）の謂である。世界の言語には右の八大語族に屬するものゝ外に、未だ明瞭に語族を決定限定するに至らないものも多い。亞弗利加の言語、亞米利加の土語などがこれである。吾々はこれを夫れ夫れ一括して單に地理的に

九、亞弗利加の言語
十、亞米利加の言語

として取扱ふ事とする。亞弗利加の言語には比較的に語族として明瞭なバントゥ語族その他の如きものが含まれてゐる。バントゥ語族は著しきものとして特に一項の下に特出する事も出來よう。

言語にはまた全く孤立にして何れの語族にも歸屬せしめ得られないアイヌ語、西洋では西班牙と佛蘭西の國境ピレネー山中に話されるバスク語（Basque）、或は曙光のみにして未だ斷定的に所屬の確定するに至らない日本語朝鮮語の如きものがある。近時の調査によつて日本語と朝鮮語を同一祖語から發した親族語とし、二つを合せて更にこれをさきのアルタイ語族の一つとせんとする企ても幾分の光明を見出して來たやうに見える。しかし今最も著しいのは日本語を南洋語との關係において考察せんとする事である。關係的根本的なるか或は語彙の貸借に止まるかは未だ明らかではない。明らかに解決せられてゐないのみならず、問題そのものゝ提出態度も定まつてゐないのである。がしかし要するにかゝる問題は言語學の攻究探究即ち Forschung の場合に屬し、事實と方法と結果とを與へられたものとして展開說述する概論の範圍を出づるものであるから、本論においては專ら未だ歸屬の疑はしきものとして孤立の一項に入れて置く事とする。その外、カムチャツカ地方の諸語、高架索の言語も未だ歸屬明らかならず、また自らにて一の語族を構成するにも至らない。孤立である。同樣に濠洲の言語（土語）も分らない。かゝる孤立不歸屬の中には、資料の缺如と調査の不充分の場合がある。吾々はかゝるものを集めて

十一　孤立のもの

の一項に入れる事にする。孤立のものは、古く多くの親族語を有する語族の一つであつたのが、有史以前その一つを殘して他は全部絕滅に歸したためであるかも分らない。もし然りとすればこれらの孤立の言語は古代若しくは先史時代において今日とは異なる多くの語族が世界に彌漫した事、從つてまた今日に至るまでに語族の上に語族が重なり、宛もトロヤの市の如く數層の言語族層の最上面に横はるものが今日の語族であり、語族と語族の間には常に競爭征服が行はれたのではないかと思はしめる。云はゞこれらの孤立の言語は地下深く横はる古代の地層を覗はしめる段層でありまたその露呈である。勿論孤立の言語には單なる孤立以上に出で得ないものもあつたであらう。史前の事は信憑すべき材料のない限り正確な斷定を下し難い。

最後に古代において著しい文化文學を發達せしめ見るべき文獻を殘しながら、遂に現今に及ぶ系譜的連續を得ることなくして絕滅に歸した言語がある。バビロンの言語、小亞細亞の古言語、伊太利のエトルスキの言語等がある。亞米利加のインカ帝國の言語等も或はこれに入れるべきであらう。しかし史料の不充分はこれを扱ふを許すや疑問であ

る。吾々はこれを纏めて

十二　古代の文明語

の一項を設けて一括する。九以下は必ずしも語族による分類でない事に注意せられたい。

第二節　印度歐羅巴語族

(Indo-european Family of Speech)

印度歐羅巴語族若しくは略して印歐語族は時に印度日耳曼語族と稱せられる。前者は英佛伊露の學界の用ゐる所であり、後者は主として獨逸の學者の稱するところである。しかし言語學においては創成以來獨逸の學者の努力が少くとも一方の基調をなしてゐるために殆んど獨逸一國に限られてゐるこの名稱も、言語學界一般においては拔くべからざる勢力を揮つてゐる。吾國においては明治の初年以來二つの稱呼が並用せられて來たが、獨逸と同じ文化同じ環境の系統に屬する北歐諸國の學界も英佛と同じく印歐語なる名稱を採用してゐるのであるから、ことには學界の大勢に從ひ、且つ音調の經濟にして和かなものを採つて印歐語と稱するを可とするであらう。

しかし稱呼は古來この二つに限られてゐたのではない。今尙勢力を持つものとしてはアリアン (Aryan) 語族なる稱を擧げる事が出來る。主として英吉利に勢力を得、丁抹の英語學者イェスペルセンもその採用を主張する所であり、一時廣く行はれはしたが近時次第にまた忘却の淵に陷らんとする傾がある。アリアンとは東印度より西大西洋岸に至る間に廣布した文化的統一民族の稱である。アリアンはまた狹義に於いては後述する如く、東方印度及びイランの二つに限つて用ゐる事がある。今日一般の學界においてはこの用法が普通であつて、廣義には用ゐない。或は古くヤフェテ (Japhet) 語族の稱も提唱せられた事がある。舊約におけるノアの三男セミ・ハム・ヤフェテの末子にあたり歐羅巴と小亞細亞の地を授けられ白色人種の祖となつたと云はれるヤフェテの話に基づくこの稱呼は直ちに忘れ去られた。印歐語族は世界の言語族の中でも學的に最も古く且つ確實に研究せられたものである。從つてその命名も亦最も多い。以上の外にサーマティク (Sarmatic)、ヨーロッパ語族 (European Family of Speech)、サンスクリティク語族 (Sanscritic Family) も古く提唱せられた名である。サーマティツクは名稱あまりに漠然として把握するに困難であり、ヨーロッパ語族は東方印度より西方大西洋まで歐亞の大陸に亘る大語族の稱呼としては小に過ぎる嫌がある。況んやサンスクリティクの如きはこの語族を更に南亞細亞の一部に局限するかの如き觀を呈する。サンスクリティクと云つたのは、これらの言語が印歐語族中最古の文獻語サンスクリット(梵語)から出たと考へたからである。また印歐或は印度日耳曼の如く、東西の兩極を取つて名とする類にはインドセルティク (Indo-celtic, Indo-celtique) 語族の名稱もあつたが今全く用ゐられない。何れにしても最も適切に事情にあてはまつた名稱ではないが、今用ゐられるところは大體印度歐羅巴と印度日耳曼の二つである。獨逸に行はれない印度歐羅巴語族の稱呼も本來十九世紀獨逸の學者フランツ・ボップ (Frauz Bopp) の唱へた所であり、起源は獨逸であるのは興味ある事柄であると云はなければならない。

世界に數ある語族の中、最も研究の精緻にして最も完全なる比較文典を構成し、原語の再構の最も正確なるは印歐語族である。將來他の幾多の語族について研究若しくはその比較事業の大いに進捗した時にあたつても、それらの規範となり指導原理の奈邊に存するかを知らしめるものは印歐言語學である。この意味において、印歐語は少くとも今

日の言語學界に於いては、言語の系統を論ずるに際して最も重要なる意味が賦與せられてゐると云はなければならない。事實他の語族について試みられた比較研究は印歐言語學の色彩があまりに濃厚である。印歐語においてはその內容的研究より出發した原理も、そのまゝ他に應用せられる時は全く外面的にして內容に觸れざる桎梏となる。吾々はこれに注意しなければならないと共に、印歐語そのものとしての研究には、一般に言語研究に對する有力なる示唆のあるのを否む事は出來ない。

印歐語族の內部には數個の語派がある。はじめの印歐原語內における方言的分裂に依つて、相互に隔てられた部分部分が漸次獨自の經過變轉の方向を辿つて發達分化した結果であり。吾々の以前よりの用語を以てすれば原印歐語の分化的繼續である。現在に於いて吾々の知り得るものを東より數へ、順次北へ周つて次の十個を擧げる事が出來る。これら語派の中には數個の言語を含むものもあれば、全く一個の言語が直ちに一の語派を成してゐるものもある、一個の言語と雖も、そのあらはすところの言語的徵證が他に對して特殊且つ深刻にして到底他の言語派の單なる一の方言と見做す事を許さゞるもの、或はその一個を殘して他は吾々の目から早く史前史後に沒し去つたからである。

一、インド・イラン語派(又はアリアン語派)
二、小亞細亞印歐語(ヒッタイト語)
三、中央亞細亞印歐語(トハリア語又はトカラ語)
四、トラキア・フリジア語及びアルメニア語
五、希臘語
六、イリリア語及びアルバニア語
七、イタリア語派
八、ケルト(セルト)語派
九、ゲルマン語派
十、バルト・スラヴ語派

右にあげた語派は、現今目前に行はれつゝある語派言語、若しくは今日に於いて存在せずとも早く何らかの文獻を殘し、吾々をしてその印歐語なる事を認めしめたものについて云ふのである。文獻を殘さず、記載に上らず、たゞ話され語られて空く沒し去つたために今日吾人の分類に上る事を得ない言語もその數決して少からざるものがあるであらう。これは獨り印歐語についてのみ云ひ得る事ではない。他の語族語派についても、又言語が活用せられる限り、世界の何れの地に於いても、行はれたに相違ない。例へば右の第八項として揭げたケルトである。ローマの古文獻の示す如く、また今日佛蘭西、白耳義の地名の示す如く、當時ケルトの分布は、今日僅に愛蘭、ウェイルズ、ブルターニュ等の小地域を占むるのみなるに反して、廣大なる範圍にわたり、西歐洲に有力なる民族語として勢力を揮つてゐたのであつた。これを今日の小地域に比する時、時の流と共に行はれる言語の進出と退却の如何に激甚なるものがあるかを思はしめられると共に、今日尙も蒙りつゝある言語的壓迫の極更に一歩を進めて遂に姿を人の口より沒するであらう事も亦想像する事が出來る。若しこれを有史以前の現象であつたとするならば、ことに特別なる事情の存在し

ない限り、吾々はケルトについて何ものをも知り得ざるか、或は假に知り得たとしてもこれを印歐語と見做すべきや否やの問題を解決する資料をなすには足らないであらう。何れにしても吾々の系譜的分類には編入することが出來ないのである。同樣の事を吾々はまたアイヌ語についても考へる事が出來る。而もケルトに關しては、佛蘭西の地名の中ケルト語を以てしても說明する事の出來ないのをあるを思へば、佛蘭西の地、即ち古代ガリア Gallia の地にはケルト以前にも何らか別種の言語を奉ずる一の民族があつたのである。吾々はこれについては何物をも知る事は出來ない。勿論印歐語たるや否やの問題を投ずる事すら不可能である。

吾々の分類には右の如き不完全性のある一面、近年新らしき發見の下に舊來の分類には加へられてゐなかつたものを導入し、或は他の語派に屬するとせられてゐたものに新たに獨立の地位を與へるに至つたものもある。右の中の第二、第三項の如きは新たなる導入であり、最近中央亞細亞及び小亞細亞の探檢發掘の產物として發見せられた古文書の困難なる解讀の結果、こゝに印歐語と認められ、而も優に一の語派を構成すべきものと決定せられ、印歐語の一語派として採錄せらるゝに至つたものである。(從つてかゝる問題的な所を幾分有する語派を未だ取扱つてゐないものも非常に多い)。第四項のアルメニア、第六項のアルバニア語は近年新しく獨立の語派と認められたものである。從來アルメニア語は第一項中のイランの一つと目せられ、アルバニア語は種々憶測せられて未だ明確な位置が決定せられなかつた。後者は今日においても未だ明白に解決せられず、言語が現に目前において發達變化しつゝある如く言語の學も亦同樣に進步の途上にあることを示すものであるが、吾々が前者アルメニア語をトラキア・フリジア語に合せ並べたのは今の所單なる便宜による假の分類である。たゞ二つの關係が確實に證明せられず、單に憶測せられるに止まるからである。多くの分類にはトラキア・フリジア語を認めず、アルメニア語をのみ獨立せしめてゐるのが常である。

而してこれらの語族を大別して二つの大グループとする標準として極めて著しい一の音韻現象がある。印歐原語には今日吾々の比較言語學的方法の敎ふる所によれば本來三種のK音があつた。

一　純粹のK音、所謂喉音。

二　喉唇音のK、即ち普通のKの發音と同時に唇を以てする英語のW音の輕きものが添へられる音、印歐言語學者は qo を以てあらはす。時にまた Kᵘ。

三　口蓋音のK、即ちカ・コ・クのKではなくキ・ケのK、舌面の上顎に接する位置は普通のKに比して著しく前方である。英語のYの發音の位置にてKを發音した場合。ḳ又は k̇。

さきにあげた第一第四第六第十項の各語派は第二種のK音即ち喉唇音を第一の普通のK音に變化せしめると共に、第三種のKをS種の音に轉化せしめたのであつたが、これに對して以上の外の語派に於いては第二種をそのまゝ維持すると共に、却つて第三種を第一種と同じく普通の喉音Kに化したのである。卽ち問題となるのは第三種の口蓋音的Kの扱方であつて、一方においてはKはSとなり、他方にあつては單なるKとなる。吾々は原語においてḳ音を含んでゐた單語の中數詞の「百」を取り、これに該當するイランの古語アヴェスタ語のサテム satem（正しくは satəm）及び拉丁語のケントゥム centum によつて、前者の現象を呈する語派を一括してサテム語、後者のそれによる語派を汎稱してケントゥム語と稱する。

この二派を地圖の上に案配するならば、サテム語は大體において東方に位し、ケントゥム語は大體において西方殊に西歐に位する。この現象は印歐原語内において、K音に關する方言語的分裂が東西に行はれたためであらう。たゞケントゥムの希臘語が二つのサテム語の間に位し、トハリア、ヒッタイトの二語がサテム語の中、或はその近傍に存するのが特別な注意を要するのみである。これらはK音に關する東西の分裂があつた後、第二次的に移動定着したためであらう。かゝる悠久の過去に屬することは何れの文献のこれを語るものもなく、何れの遺物遺跡のこれを證するものもない。たゞ言語的事實により、言語學的方法によつてのみ遙かに推定し得る事實である。言語學も、考古學歴史學の足らざるところを補ひ、偉大なる寄與をなすと共に、時に古代事實の研究に於いて同じくその曇を摩すことあるを記さなければならない。

但しこれはK音に關する限りにおいてゞあつて、これに並行してすべての言語現象が東西に二分せられてゐるのではない。例へばケントゥムの希臘語は言語組織一般としては却つてサテムの古代印度のサンスクリットに近く、中央亞細亞のトハリア語もK音以外の點においては却つて西方ケントゥムの構造に遠いものがある。のみならずサテム語の有する語彙中にもケントゥム語の性質そのまゝにS音を有すべくしてK音を有するものもあり、而もこれは西方からの新らしい借用とする事の出來ないものである。一般に方言的分裂はすべての現象について一樣に行はれるものでなく、また同一の現象についても必ずしも徹底的に行はれ盡すものでない事は今日如實の現象についても亦同樣である。要するにK音についてのこの現象は、印歐語の方言分裂現象の中、最も眼に著しくして且つ廣汎なるものであるといふにすぎないが、しかもこのために此れに附隨する各〻語派の言語的態度を暗示し、印歐語族の或種の把握に有力なる手懸りである事實は否定する事が出來ない。以下簡單に各〻の語派について一瞥を試みる事にする。

第三節　印歐語族の諸派

I　印度イラン（アリアン）語派（Indo-iranian, Indo-iranisch Aryan）

印歐語族に屬する多くの言語或は語派が殆んど歐羅巴のみに行はれてゐる中、亞細亞にあつて古來政治的文化的に最も勢力を揮つた民族の使用した言語である。印度イランはまた一にアリアン（Aryan; Aryen）とも稱せられる。アリアンは曾て印度及びイラン人が共に自らを稱した共通名稱アー(ー)ルヤ Arya- に出で、今イランと稱するのはその繼續變形した名稱である。Arya- は「貴き、貴族の」等の意味を有し、その複數の屬格「アリアン人等の」即ち英語で "of the Aryans" を意味する形が aryānām, その中世波斯語形がエーラーン ērān 次いで今日の如くイーラーン iran（支那史の所謂伊蘭）と發音せられるに至つた。此れを簡單にイランと稱するのは吾々の便宜である。從つてイランは原形アールヤに遡る時、廣義に於いて本來印度及びイランの双方を指示し得た筈である。獨逸においてはアリアンの獨逸語形アーリッシュ Arisch を以て吾々の云ふ印度イランに並用代替するのが常である。古く人類學上大體吾々の云ふ印歐語族に屬する言語を使用する人々を、アリアン人と汎稱した事によつて、印歐語族全體をアリアン語族と稱することもある。この語派の系統を簡單に圖示すれば、

A　印　度　派

a　古代　（イ）吠陀文學の言語
　　（ロ）叙事詩の言語　}廣義の梵語（サンスクリット）
　　（ハ）古典梵語（サンスクリット）

b 中期　プラークリット語――巴利語（パーリ）

c 近代　（イ）ヒマラヤ諸方言

（ロ）印度本部諸方言（東中西に三分）

（ハ）シンガル語

（ニ）ジプシイ（ツィゴイナー）の言語

B イラン派

a 古代　（イ）古代波斯語

アケメニ王朝ダリウス、クセルクセスの碑銘の言語――ペルシスの方言

（ロ）アヴエスタ（ゼンド）語

（ハ）スキタイ語

b 中期　（イ）ペフレヴィ（ペールヴィ、パフレヴィ）語

（ロ）北部ペフレヴィ語

パルト語（パルチア語）

（ハ）ソグド語

（ニ）東部イラン語

c 近代　西部　（イ）近世波斯語（標準語）

（ロ）その他の波斯諸方言

（ハ）カスピ諸方言

東部　（イ）ペルチスタン語

（ロ）アフガニスタン語

（ハ）パミル方言

北部　（イ）ヤグノービー語

（ロ）オセット語

A 印度派についてはその言語の時代を大體三分して古代中世近代とする事が出來る。而して今日正確なる日附を知り得る限りの文獻において最も古きものは有名なる佛教君主アソカ Aśoca 王の手になる各地の碑文である。時代は凡そ前三世期の頃と稱せられる。その言語は已に古代語の俤を幾分失ひ近世語に至らんとする傾向を體する中期の言語である。

これに對して日附は未確定であるが、時代の極めて古かるべきものは所謂吠陀（ヴェーダ）Veda の文學にあらはれる言語である。吠陀四種（リグヴェーダ、アタルヴァヴェーダ、ヤヂュルヴェーダ、サーマヴェーダ）の中また最も古形に近きものは祭祀に際する讃歌の集攬、所謂梨俱（リグ）吠陀（Rgveda, Rigveda）である。アタルヴァ吠陀 Atharvaveda（アタルヴァン Atharva〔或種の司祭〕の吠陀）の言語はこれに比すれば餘程新らしいところが見える。梨俱吠陀編纂成立の年代の推定は極めて不一致であり、紀元前二千年より四千五百年間に種々なる臆測がある。これらは印度語派の言

語として最も古き時代に屬するものであるが、これにつゞいてマハーバハーラタ Mahābharata 及びラーマーヤナ Rāmāyaṇa 等の叙事詩の言語は同じく古代の範疇に屬しつゝもその姿は前の吠陀に比して更に新らしい。前三世紀以後の梵文學古典時代の所謂古典梵語 Classical Sanskrit は已に定着した文章語であり、日常の口語との開きは極めて著しく、吾々は古典梵語のテキストより當時の「活きた」言語狀態を想像するのは極めて困難である。しかも當時に於いても方言的分裂は相當深刻であり、古典梵語にはかゝる各自の特徴を有する各々の方言より借用せられた要素も決して少しとするを得ないのである。

已に Rgveda もその根本においては大體印度西北のパンヂャーブ (Punjab, Penjab) 地方の方言を以てしつゝ、而も一方種々なる方言の影響があると稱せられる。

中期の印度派にはプラークリット Prākrit の諸語がある。Prākrit はサンスクリット即ち Saṃskrita の「完成せられたる、完全なる」に對して「自然的、非人工的」の意味である。Prākrit によつて著はされた文學（主として劇作）も多いが、その一派巴利(パーリ)語 Pāli は南方佛教徒の言語として種々の佛典編纂の用語となり、今日宗教史上に於いても重要なるものである。Prākrit には種々なる方言がある。シャウラセーニー Śauraseni, マーハーラストリー mahārastri, マーガドヒー māgadhi 等。

現代印度の方言は此れら古代中期の言語若しくはこれらと相並んで行はれてゐた幾多の方言の繼續である。印度最北端の地に行はれるヒマラヤ諸方言 (Himalayan Dialects) の外に、所謂印度本部の方言は東西中の三つに大別する事が出來る。何れも古代中期の言語に比して文化的文明的に重要さは極めて薄いものであるが、單に重要なるものの

みについてその名を列擧すれば、

西部方言　ラーンダ Lahnda, シンディ Sindhi, マラト marathe

中部方言　パンジャビ Punjabi, Penjabi, 西ヒンディ語 West Hindi, 東ヒンディ East Hindi, ビハリ Bihari

何れも自らの中に多數の小方言を藏する。

西部方言ベンガル語 Bengali, オリヤ Oriya, アッサム語 Assamian. この中特に注意すべきは中部方言中の西ヒンディ語である。西ヒンディ語の一方言、恒河上流のミラト Mirat を中心としてその北にわたる地方に行はれる、ヒンドスターニ Hindoustani は今印度の標準語乃至通用語として使用せられ、吾々が普通に印度語を學ぶと稱する時の印度語は實に Hindousrani に外ならない。年々デーリ Dehli に開かれる市場の取引語であつた事が今の如き弘通を見るはじまりである。ヒンドスターニの文章語としてはウルドウ Ourdou 及び單にヒンディ Hindi と稱せられるものゝ二つがある。

以上の外錫倫(セイロン)の南部には今なほ同じ語派に屬するシンガル語 (Singhal, le singhalais. Singhalesisch) が行はれる。波斯アルメニア羅馬尼西班牙までも行き渡て奔放逸樂の生を樂むかのジプシイ gypsy 或は所謂チゴイネル Zigeuner は元來印度の出であり、その携へ出でゝ各地で種々なる變形を蒙りつゝ使用する言語は西北印度の方言であつた。

B　イラン派 (Iranian) 右の印度派の西方、今のアフガーニスターン (Afghānistan) ベルーチスターン (Belūtchistan) より波斯一帶土耳古との境界に達し、北方はパミル (Pamir) 高原、ブカラ (Bukhara) アラル (Aral) 海よりカスピ海 (Caspian海、裏海) に到る線に圍まれ、南方は印度洋と波斯灣に限らるゝ地域に行はれる言語である。

この地域は土地險峻にして相互の交通を阻まれ聯絡を缺く言語社會多く、從つて方言的區分も亦極めて深刻なるものがある。

先づ古代においては古代波斯語とゼンド（Zend）或はアヴェスタ（Avesta）語との二つがある。古代波斯語（Old Persian）と稱するものは波斯のアケメニアン王朝に屬するダリウス Darius（紀元前五二二—四八六年）及びクセルクセス Xerxes（紀元前四八六——四六六）二王の功業を錄した碑文の言語である。二王の年代は他の史實によつて明瞭に決定し得るが故に、その碑銘の年代も自らまた明らかであり、すべての印歐諸語の有する文獻の中、明確なる日附を有するものとしては最古のものに屬する。古代波斯語はかくの如くして單に金石の文にあらはれるのみであつて、一般の文學、或は指令書、官用文書の用語として吾々に傳へられてゐるものはない。碑銘は波斯の各地に見出され、極めて多樣である。多くは古代波斯語の外にエラム（Elam）又はバビロニア（Babylounia）語の副文を添へた二言語或は三言語の碑文。その最も大いなるものは波斯の西南方ケルマンシヤ（Kermanshah）或はキルマンシヤ（Kirmanshah）の町の東北に位置するメディア Media 地方ベヒストウン Behistun の山腹岩壁に鏤刻せられたもの。今日の研究よりすればこれら碑銘にあらはれる古代波斯語は略々イランの西南地方ペルシス Persis 地方當時の方言にあたると云ふ。從つてこの外、今日吾々にまで殘らずして空しく亡び去つた古代波斯の方言も必ずや亦多數にあつたに相違ない。

ゼンド（Zend）語或はより正しくはアヴェスタ（Avesta）語と稱するものは、かの哲人ニイチエ（Nietzsche）のツアラトウストゥラ（Zarathustra）にあたるザラスシュトラ Zarathushtra 又はゾロアスター Zoroaster のはじむる所のマヅダ教（Mazdeism）の經典アヴェスタの言語である。アヴェスタの經典は自ら二部に分たれ、その一部ガーサー（Gātha「讃歌」）中の言語は語形極めて古く、アーケイック古風なる點において印度支派の最古の文獻梨俱吠陀に敢て讓らざるものがある。他の部分はこれを狹義においてアヴェスタと稱する。經典そのものゝ編纂せられた年代と場所は不明であるが、幾多の動搖の後今の如き定形を取るに至つたのはマヅダ教を國教とし經典の確立を圖つたササン王朝（二二六——六五二）以前ではあるまいと考へられる。言語は右の古代波斯語と非常に近接し、共にイラン語中においては西部イラン語に入るべきものとせらる。

これら古代波斯語及びアヴェスタ語の外に古代イラン語に屬するものとしてスキティア語（Scythian, le scythe）を擧げる事が出來る。たゞその言語的遺物少くして明瞭なる姿を見出し得ないのが遺憾であるが少許の材料による精緻なる研究の結果は、これを右の二つに對立して北部イラン語に屬する事を明らかにしたのである。

紀元後數世紀を經てイラン語が再び吾々の前にあらはれた時はその姿に非常な改變の跡があつた。空間的に云へば古代イラン語とは大方言的差異に立つものである。吾々はこれを中期イラン語と稱する。その中最も重要にして最も知られたるものをペールヴイ（Pehlvi）若しくはパフレヴイ（Pahlevi）と稱する。ペールヴイは前項の古代波斯語の直系にして近代波斯語の直祖にあたる。この三つは性質構造の上に著るしい相違を來してはゐるが、要するに本質的に同一の言語を相異なる三つの時點における變化の不同において捕捉したものにすぎない。ペールヴイはこの時代における印度及び波斯のマヅダ教に關するテキストに使用せられて殘る外、ササン王朝の官用語であり、又三世紀の人マニ（Mani）にはじまるマニ教文學の用語である。最後のものにあらはれるペールヴイは最も當時の口語に近い

形を取つてゐると考へられる。

同じく中期のイラン語に屬するものゝ中、文獻として殘るものに北部ペールヴィ語がある。單なるペールヴィとは稍々言語的に性質を異にする。パルチア語（Parthian）はその一形であり、ササン王朝以前のアルサケース王朝の用語であつた。パルチヤ語は今日死語である。

イランの北方ソグディアナ Sogdiana におこり、曾て東洋史上有力なる文明語として東方滿洲地方まで弘通したソグド語（Sogdian）は、ペールヴィとも異なり、東北部イラン語に屬する。その言語としての性質が闡明せられたのは最近二十年間の中央亞細亞の探險と發掘にかゝるテキスト研究の結果である。何れも八世紀より九世紀のテキストであり中には第一世紀に遡るものも存する。

未だ充分研究せられてはゐないが、最近トルキスタンより發見せられた文書はにあらはれる言語、中期イラン語の中、他と同じ列に置くべからざる特殊な位置を保持し、今日東部イラン語の名を以て呼ばれる。曾てコータン Khotan 地の佛教徒の用ゐた言語である。

イラン派の近代語を大別して、西部、東部、北部とする事が出來る。西部には第一に近代波斯語がある。印度派のみならずイラン諸語も亦一般に語形の變轉が著しく、特にこの波斯語の如きは構造の簡單化最も甚しく、紀元第一世紀の頃にして已に十世紀後の英語を見るが如くであつたといふ。詩人として九世紀のフィルドウスイ Firdusi ハーフイス Hafis がある。英國のフィッツヂエラルド（Fitzgerald）の譯した四行詩（ルバイヤット）に有名なオーマーカイヤム（Omar Khayyam）も亦近代波斯語の詩人である。――數世紀以前より宗教文化的に亞剌比亞の影響を蒙る事著しく、語彙の大部分特に精神文化に關するものは殆んどすべて亞剌比亞語である。――「波斯的よりもむしろ亞剌比亞的になつた」。――中期、印度に進出した事があり、今波斯以外にアフガーニスターン、トルキスターンに用ゐられる。波斯國内に行はれるのはこの近代波斯語のみではない。カシヤン、ナイン、シラズ等の方言がある。カスピ海の南より西にかけては所謂カスピ諸方言（Caspian Dialects）がある――マザンダラニ Mazandarani その西のギラキ Guilaki バクーの近傍のタート Tāt 等。

西方土耳古との境に本據を置くクルド kurde 語も亦西部近代イラン語である。クルド語を使用する團體は常に遠隔の地に四散して言語の常住の坐を決定するのに困難がある。このあたりは諸語族の交錯地である。

近代語の東部方言及び北部方言には重要なるものはない。東部には印度との境にペルチスターン、アフガーニスターンの二語があり、パミル高原の諸方言も亦こゝに屬する。北部方言には中期のソグド語を繼續するヤグノビ Yagnobi があり（パミルの西方）、今一つのオッセート（Ossète）語は遠くはなれて高架索の地に存在する。曾てこの地方一帶を占めて特異の文化を誇つたスキタイ人の衰れなる（言語的）後裔である。今極めて振はず政治的に露西亞の壓迫を蒙り全く語系を異にする高架索諸語にかこまれつゝ僅かに存在を保つのみ。その中にもなほ數個の方言を區分する事が出來る。

印度支派にせよイラン支派にせよ、何れも過去による程有力にして特異なる文化を所有しつゝ現在に近づくと共にかゝる力と業績を失つて來た言語である。この點は後段述べるところの希臘語、或は埃及の言語と相通ずるところが

ある。

II　小亞細亞の印歐語（ヒッタイト語 Hittite）

小亞細亞の印歐語としてこゝに掲げたヒッタイト語は現在において實際に使用せられてゐない古語であり死語である。ヒッタイト（帝國）の名は舊約聖書の所々にヘテ人としてあられ、埃及の古文書にも見られる所であつたが、その直接の遺跡は長く吾々の視界から失はれて、今日まで吾々は紀元前十數世紀の過去にバビロン Babylon 埃及と共に東方古代の有力なる國家として勢力を揮つた事のあるのを單に聞知するのみであつた。その亡んだのは大體紀元前一二〇〇年の頃であるとせられるゝ考古學者はその帝國の舊位置をシリア Syria の北部と推定して發掘してゐたのであるが、その發掘の進展と共に遺跡は次第に北方に延びてゐる事を知り、一九〇七年二人の獨逸の學者（ヴインクラー H. Winkler プーフシュタイン Puchstein）が小亞ハリュス Halys 河畔今の土耳古の首府アンブラ Angora 附近ボガズケョイ Boghazköi の村に發掘を試みて多數の文書遺跡を發見し、遂にその言語の性質をも闡明するを得るに至たものである。文書の九分を占める言語は疑もなく印歐語に屬するものであり、吾々はこれを假にヒッタイト語（Hittite 佛語 Hirtite 又は Héteen 獨逸語 Hethitisch）と稱する。文書の中には言主自らこの言語を呼ぶ稱呼が見出されない。當時ヒッタイト語は帝國内の公用語であり、これと共に宛も往年に於ける獨逸語の如くバビロン語が學藝學術の語として、埃及語が外交用語として往年の佛蘭西語の如く東方文明諸國に併用せられてゐたのであつた。遺跡の中にもこれらの言語を見る事が出來るのみならず、その併用文書或は反譯の辭書樣のものが、未知の語の鮮明に重要なる鍵となつたのである。文獻の古きは紀元前一九〇〇年に遡る。ボガズケョイはこの帝國の首府のあつた地である。ヒッタイトの發見は印歐言語學上極めて重要なる事件であり、これによつて原語推定の有力なる一支持を得、而して今日の分布のみが必ずしも古今に通じた固定現象にあらざる事を知ると共に、將來必ずしも今の狀態を維持するものにもあらず、一の言語の上に他の言語が掩ひかぶさる現象は常に繰り返さるべきであらう、また延いては今日まで吾々の未知のうちに云はゞ暗より暗に葬られ去つた言語も世界ににおいてその數決して少からざるを繰り返し思はしめるものである。吾々をして更にこの感を深うせしめたものは次に述べんとする

III　中央亞細亞の印歐語（トハリア語トカラ語 Tokharian）

トハリア語 ｛ トハリアA――トゥルファンの方言
　　トハリアB――クチヤの方言 ｝

の發見である。トハリア語も亦死語であり古語である。二十世紀の初頭中央亞細亞東トルキスタン（支那トルキスタン）に試みられた探險によつてトゥルファン Turfan とクチヤ Kutcha の地方に未知の言語で書かれた文書が新しく發見せられた。此の言語を吾々はトハリア語と稱する。トハリアの名は古く希臘の史家ストラボー Strabo のトカハロイ Tokharoi（トハリア人）と稱へる所より取つたものである。土耳古のウイグル（回紇）人のトフリ Toxri と稱へ支那史に所謂トウフォラ（トカラ）吐火羅である。發見の當初よりトハリア語に二つの方言のある事が認められ一方をトハリアA、他方をトハリアBと稱する。Aはトゥルファンの地に發見せられたものであり、Bは大體に於い

てクチヤの方言であつたとせられる。時代は明確に決定する事が出來ないがたゞ支那史上明瞭にあらはれてゐるクチヤ王の名にかゝる文獻に見出し得る事によつてトウルファン語の方は姑く知らず、少くともクチヤ語のみは七世紀の中葉には實際に話されてゐた事を知り得るのである。亡び去つた年代は分らない。言語の型は古風であり從つて印歐語におけるその位置を極めて重からしめてゐる。ヒッタイトと共にケントゥム語に屬する。

IV　トラキア、フリヂア語（Thraco Phrygian）及びアルメニア語（Armenian）

（一）　アルメニア語

（イ）　古代古典アルメニア語＝文語（グラバル）

（ロ）　近代アルメニア語＝口語

東部（ロシアアルメニア語）

西部（トルコアルメニア語）

（二）　トラキア語、フリヂア語

アルメニア語の下に一括せられる諸方言は今日ティグリス・エウフラテス河地方の北方。高架索の南より黑海の南岸にわたる地域に行はれる。アルメニア語においてアルメニア人自身をハイ Hay（複數ハイクァ Haykh）と稱する。アルメニアの名は波斯の古文獻に見える古い稱呼であり、吾々はこの名を借りてその言語と國土を呼ぶのである。專門學者の推定によればアルメニア人は紀元前八世紀から六世紀にかけてこの地方に侵入定着した民族であるといふ。

從つてその今日のアルメニア語には被征服者の異種言語要素の大いなる作用も加へられてゐるのであらう。吾々の現實に知る最古の文獻は紀元九世紀の頃にあらはれた福音書のアルメニア譯である。アルメニア文字の發明はこれ以前に已に行はれてゐたが故に、文語の統一或は文書の作製は五、六或は七世紀にも遡るであらう。この聖書の飜譯に用ゐられた言語は所謂古代アルメニア語（Old Armenian）或は古典アルメニア語（Classical Armenian）である。今日文語として用ゐられてゐる言語は本質的にこの古典アルメニア語であり、彼等はグラバル Grabar（書かれたる言語）と稱する。

アルメニア語が口語として現今實際に行はれる地域は即ちアルメニア共和國の小地の外、高架索、土耳古、波斯の一部分にも見出されるものが多く、遠くは移民植民と共に東歐各地亞米利加に行はれる。方言的に東西の二つに分つ。東は所謂ロシアのアルメニア語であり、西は所謂トルコのアルメニア語である。グラバルは本來この西部方言の一つに發するものである。アルメニア語は一時（六六——三八七）イランの一派パルティアの政治的支配を蒙つてゐた結果、語彙にはイラン要素極めて多く、最近（一八七三）に至るまでイラン語の一つとせられてゐた位である。宛も日本語の語彙における支那要素、英語のそれにおける佛蘭西語要素を見て、日本語を支那の一派とし、英語をロマン語の一つとする如き謬であつた。印歐語族中においてアルメニア語は孤立してゐる。しかし吾々の知る範圍においてこれと直接間接に近い關係に立つものとして——未だ明瞭に指示する事は出來ないが——次の

トラキア・フリヂア語　の研究が材料の發見につれて共に進むならば、アルメニアの語との關係も或は立證せられ

かくてアルメニア語も獨立ながら孤立の位置より救ひ出す事が可能でもあらう。トラキア語（Thracian）は希臘の北

方トラキア（ThraceThracia）の地及び小亞のその植民地におこなはれた言語であり、フリヂア（Phrygian）語はバルカン半島におけるはじめの住地よりはなれて小亞に植民した民族の言語である。（故に小亞におけるその地をフリヂアと云ふ）。二つは密接な一グループを構成する言語であるが、早く亡び去りしかも文献極めて乏しきため充分なる言語的考察を加へる事が出來ない。しかしその印歐語であり、而もアルメニア語に親近なる關係を持する事は確實であらうと推定せられる。たゞ吾々はこれだけの理由のみにてこれらを合せて一の語派とするを憚かるが故に姑く「トラキアフリヂア語とアルメニア語」としたのである。

V　希臘語

a　古代（イ）イオニア・アッティカ方言

イオニア語

アッティカ語――アテーネーの言語（古典希臘語、文學語）

（ロ）アカイア方言（アルカディア・キュプロス方言）

（ハ）アエオリア方言――（レスボス方言）

（ニ）ドーリア方言

b　中期　共通希臘語（コイネー）（ヘ―・「コイネー」・ディアレクトス）の發生（例――新約聖書の希臘語）

c　近代　文語――中期コイネーの修飾的繼續
　　口語――ロマイック、（ロメイック）　（第二のコイネー）

希臘語は自ら一個を以て一の語派を構成する言語である。しかしその内部に方言的分裂の著しい事は古へより有名な事實であつた。今の希臘の地には古く希臘人の侵入以前有力な文化民族が居住してゐた事は古代史の教へるところである。エーゲの文明クリートの文明も本來希臘人の與かり知らぬところであつた。加ふるに山多くして相互の社會的連環を斷たれ易い地域に侵入した希臘人の希臘語は、定着混淆するや早くから獨自の言語變化の道を辿らなければならなかつた。希臘は古き正確文献を吾人に提するにかゝはらず、その最古のものにすら已に方言的差異の發見せられるのはこれによる。而も希臘人の希臘の地への侵入は一回にして止まらなかつた。有史以前少くとも彼等は三回四回にわたつて大侵入を企てゝゐる。從つてはじめに來たものは後來のものに追はれ征服せられたのみならず、彼等の定着後も相互の攻撃侵入があり、新たなる混淆の下に言語の混合變化も亦激しく行はれた事は想像に難くない。かくして最古の文献から已にあらはれる希臘の方言的區別は全く希臘地域内において醸成せられたものであらう。希臘古代の方言として吾々は次の四つを算へるのが常である。

a　イオニア・アッティカ語（Ionian-Attic）文學的方面より見て最も重要なる言語。イオニア地方（小亞）は希臘領土内に於て最も早く文化の爛熟した地であり、イオニア語に非常に近い言語の行はれる希臘本土アッティカの中心たるアテーネーは紀元前五世紀四世紀の頃即ち支那の孔子と時代を前後して後世世界に向つて深刻なる影響を及ぼすべき哲人詩人を輩出せしめ、今日西洋思潮を支配する重要なる主流の一を當時において醸成したのであつた。例へば戯曲